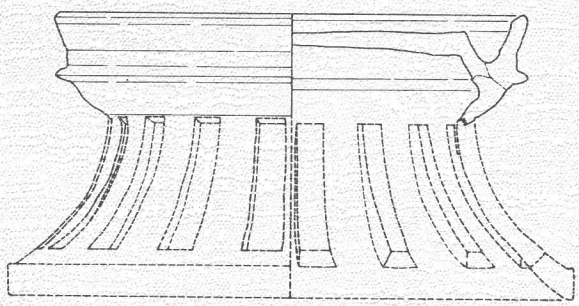
史跡 斎宮跡

平成6年度発掘調査概報

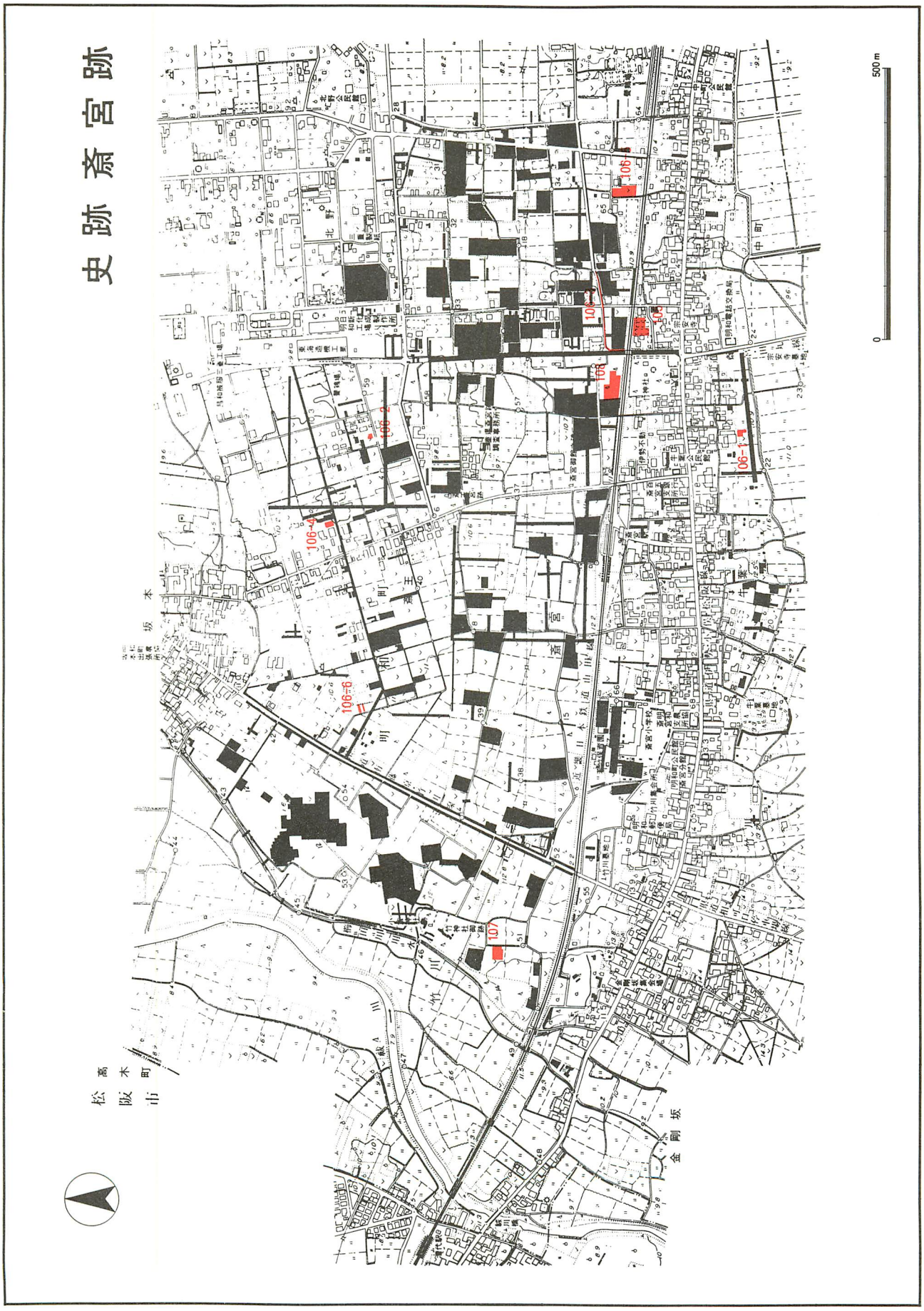


1995

斎宮歴史博物館

第105次調査区遠景（南から）

第108次調査区遠景（北から）



第1図　平成6年度発掘調査場所（1：10,000）

はじめに

「史跡　斎宮跡」の調査・研究とその成果を広く県民に公開・展示することは、当斎宮歴史博物館にとって最大の使命であると言えましょう。

とりわけ調査・研究部門は、当館の業務全般にとって基礎とも言える重要な業務分野と認識して、その体制の充実や調査の必要性についても、地域の皆様をはじめとする多くの人々からより一層の理解を得るべく努めているところであります。

しかしながら、近年斎宮跡の実態解明にとって少しずつではありますが着実にその成果を蓄積していることとはうらはらに、史跡の調査や保存・活用にとって難しい問題が顕在化してきております。そこで、これら様々な問題に対処していくために、地元住民代表、明和町教育委員会及び当斎宮歴史博物館の三者で定期的に連絡会を開催し、お互いの意見を出し合って、地域住民と行政機関とが協力して「斎宮跡」の保存・普及・振興に資するため協議を重ねております。

このたび刊行させていただく本概報は平成６年度中に実施いたしました斎宮跡の計画的発掘調査の成果の概要をまとめたものでありますが、発掘調査の開始以来25年にして近鉄線以南では史跡指定前の範囲確認のためのトレンチ調査以来初めての本格的な面的発掘調査となった第105次調査、斎宮成立以前の当地域や初期斎宮を知るうえで多くの成果を得た第107次調査、旧参宮街道沿いにあって、現在の竹神社が所在して斎宮の中でも特に重要な場所であった可能性も考えられる地域の一角での第108次調査等いずれも今後の斎宮跡の調査・研究にとって極めて有意義なものと言えましょう。

このような斎宮跡の保存と調査・研究の充実は文化庁をはじめ斎宮跡調査指導委員の先生方のご指導や地元関係機関・各位のご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。

なお文末となりましたが、当斎宮跡の史跡指定以前から今日までの間、斎宮跡調査指導委員として国文学の立場から幾多のご指導・ご助言を賜りました 久徳高文 先生にはさる２月ご逝去なさいました。これまでのひとかたならぬご指導に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたしまして本概要の刊行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

平成７年３月

斎宮歴史博物館

館長　川村政敬

例　　言

1．本書は、国庫補助金の交付を受けて斎宮歴史博物館が平成６年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要をまとめたものである。

2．明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は別途、明和町教育委員会の刊行による。

3．遺構の実測にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。

4．遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。

5．遺構表示記号は次の通りである。
ＳＢ；建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＡ；柵列　ＳＦ；道路　ＳＸ；その他

6．方格地割における各区画の名称は第31図に示した。

7．遺物実測図は、特に標示がない限り実物の４分の１である。

8．斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都府立大学名誉教授	門脇禎二
千葉大学教授	北原理雄
椙山女学園大学名誉教授	久徳高文
前奈良国立文化財研究所所長	鈴木嘉吉
㈶大阪文化財センター理事長	坪井清足
名古屋学院大学教授	楢崎彰一
三重大学教授	八賀　晋
名古屋大学教授	早川庄八
㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	福山敏男
皇学館大学教授	渡辺　寛

9．現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の吉水康夫、野原宏司、大川勝宏、赤岩　操があたり、前川友秀、田端由佳、田所美里がこれを補佐した。
また、遺物整理には島村紀久子、角谷和代、奥田康子、鈴木美智子の協力を得た。
その他、調査には田中里佳（奈良大学学生）、川合正宏（立命館大学学生）の参加を得た。

目　　次

Ⅰ．調査の経過と概要 …… 1
Ⅱ．第105次調査 …… 3
Ⅲ．第107次調査 …… 17
Ⅳ．第108次調査 …… 30
発掘調査報告抄録 …… 72

表・挿図目次

〔表〕1．平成６年度発掘調査一覧 …… 2
2．第105次調査時期別遺構分類表 …… 4
3．第107次調査時期別遺構分類表 …… 17
4．斎宮跡布掘状掘形建物一覧 …… 21
5．第108次調査時期別遺構分類表 …… 33
6．ＳＡ7000の柱痕底面高と地山面の相関 …… 34
7．掘立柱建物・柵列一覧表 …… 54
8．竪穴住居一覧表 …… 55
9．遺物（土器）観察表 …… 56
10．斎宮跡発掘調査次数一覧表 …… 66

〔図〕1．平成６年度発掘調査場所（1:10,000） …… i
2．第105次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 3
3．〃　遺構実測図（1:200）・遺構変遷図（1:500） …… 5・6
4．〃　出土遺物実測図（SK7179･7156･7157、SD7154･7181、特殊遺物） …… 11
5．〃　鍛冶山西ブロック周辺遺構配置図（1:1,000） …… 15・16
6．第107次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 18
7．〃　遺構実測図（1:200） …… 19
8．〃　SX7200・7201遺物出土状況実測図（1:20） …… 20
9．〃　SB7210遺構実測図（1:100） …… 21
10．〃　SK7220遺物出土状況実測図（1:20） …… 22
11．〃　SX7240遺構(1:20)・遺物(1:4) 実測図 …… 23
12．〃　出土遺物実測図（SX7200・7201、SK7202、その他） …… 25
13．〃　出土遺物実測図（SK7220、SB7210・7215、その他） …… 26
14．〃　出土遺物実測図（SK7220） …… 27
15．〃　出土遺物実測図（SK7220） …… 28
16．第108次調査　調査区位置図（1:2,000） …… 30
17．〃　遺構実測図（1:200） …… 31・32
18．〃　SD7254・7268・7269・7307埋土断面図（1:30） …… 37
19．〃　出土遺物実測図（SD7252、SK7261・7260） …… 39
20．〃　出土遺物実測図（SK7260・7288・7290、SD7258・7275・7273 SK7250・7262・7317・7326） …… 40
21．〃　出土遺物実測図（SK7321・7323・7322・7289・7324 SD7309・7308・7269・7307、SK7305） …… 41
22．〃　方格地割中枢部における平安時代中期土師器の変遷（1:4） …… 42
23．〃　出土遺物実測図（その他） …… 44
24．〃　管状土錘の法量（幅／長、重量／孔径）相関 …… 45
25．〃　規則的配置の主要建物（1:500） …… 46
26．〃　主要遺構変遷図（1:800） …… 47
27．〃　平安時代後期～末期主要溝遺構分布図（1:2,000） …… 48
28．〃　土錘・製塩土器出土分布図（1:500） …… 50
29．〃　方格地割中枢部付近の微地形試案（1:1,000） …… 51・52
30．斎宮跡地区表示 …… 70
31．斎宮跡方格地割区画名称 …… 71

写 真 図 版

巻　頭．上：第105次調査区遠景（南から）　　下：第108次調査区遠景（北から）
ＰＬ１．第105次調査区全景（真上から）
ＰＬ２．上：調査区東半（西から）　　下：ＳＡ7150・7170（南から）
ＰＬ３．上：ＳＢ7180・7165・7195・7190（南から）　　下：ＳＢ7175・7185（北西から）
ＰＬ４．上：ＳＢ7155・7190・7191東半（西から）　　下：ＳＢ7155・7190・7191西半（南から）
ＰＬ５．上：ＳＢ7155・7160東半（南から）　　下：ＳＢ7160西半（東から）
ＰＬ６．上：調査区西半（南から）　　下：ＳＡ1411・2675・7151（東から）
ＰＬ７．第107次調査区全景（真上から）
ＰＬ８．上：調査区遠景（東から）　　下：調査区全景（北から）
ＰＬ９．上：ＳＸ7200（北西から）　　下：ＳＸ7201遺物出土状況（南東から）
ＰＬ10．上：ＳＢ7232（北から）　　下：ＳＢ7227・7228・7229（北から）
ＰＬ11．上：ＳＢ7210（東から）　　下：ＳＢ7231・7233（北から）
ＰＬ12．上：ＳＫ7220遺物出土状況（南から）　　下：ＳＸ7240（北から）
ＰＬ13．第108次調査区全景（真上から）
ＰＬ14．上：調査区全景（西から）　　下：ＳＡ6999・7000（西から）
ＰＬ15．上：調査区南東部（東から）　　下：ＳＢ7285（北から）
ＰＬ16．上：ＳＢ7315（東から）　　下：ＳＢ7293（西から）
ＰＬ17．上：ＳＢ7300（東から）　　下：ＳＢ7299（東から）
ＰＬ18．上：ＳＢ7310（西から）　　下：ＳＢ7313（北から）
ＰＬ19．上：ＳＤ7269・7307（北から）　　下：ＳＫ7281埋土断面（東から）
ＰＬ20．第105次調査出土遺物
ＰＬ21．第107次調査出土遺物（弥生土器）
ＰＬ22．　〃　（ＳＫ7220）
ＰＬ23．　〃　（ＳＫ7220・ＳＸ7240・その他）
ＰＬ24．第108次調査出土遺物

Ⅰ．調査の経過と概要

斎宮跡とならんで明和町内に所在する国指定文化財である天然記念物「ハナショウブ群落」や、これにちなんで史跡の公有化済場所の維持・管理の一環として栽培されている花菖蒲の咲くシーズンに併せ、例年６月の第１日曜日を原則として開催されている「斎王まつり」に協賛して実施している現地説明会に向けたスケジュールを考慮して、前年度の史跡現状変更申請に伴う事前の発掘調査である第102-3次調査がようやく３月30日に終了したばかりにもかかわらず、平成６年度の最初の計画発掘調査である第105次調査は、早くも新年度早々の４月７日より開始した。

調査場所は、史跡指定前の遺跡範囲確認のためのトレンチ調査や史跡現状変更に伴う小規模な事前の発掘調査以外に本格的な発掘調査がほとんど実施されていなかった近鉄線の南側に位置しているものの、周辺で蓄積された近年の発掘調査の成果から一時期の斎宮にとって中枢的性格を持つ部分ではないかと考えられる地域の一画にあたっている。

約800㎡余の調査対象地は以前にビニールハウスが設置されていたため、その骨組みや基礎の撤去が必要であり、調査スケジュール等との関係から、本年度は東半部の410㎡の調査を実施し、残る西半部については次年度に調査を実施する予定であったが、諸般の事情から急遽これを変更して全面を対象とすることにした。このため、東半部の調査作業は５月９日にほぼ完了し、写真撮影や実測等の作業後、６月５日には「斎王まつり」にあわせて現地説明会を開催し、約300名の参加を得た。その後埋め戻しに引き続いて残る西半部の調査に着手したものの、例年斎宮跡の普及・啓発事業の一環として小・中学生の夏休み期間中に実施している「体験発掘教室」の現場として計画していた第107次調査と並行したため、10月７日に至りようやく調査の全作業を完了することができた。

調査の結果は、大型柱掘形を持つ10棟をはじめ11棟の掘立柱建物や４条の柵列の検出、緑釉陶器片・陶棺片等の出土など多くの貴重な成果を得た。これまでの周辺での知見も含めて新たな問題も少なからず提起されることとなったものの、今後の斎宮跡における実態解明にとって有意義な一歩をしるすこととなった。

続く第107次調査は、前述のとおり「体験発掘教室」の実施にかかるスケジュールとの調整を考慮して、第105次調査の後半に当たる西半部の遺構掘り下げと写真撮影及び実測のための割り付け等の作業が終了して間もない７月18日から開始した。

これまでの周辺地域における限られた調査成果の蓄積から当調査区を含む一帯では、斎宮成立以前と初期斎宮の時期に相当する遺構・遺物が集中することが知られており、特に初期斎宮跡の解明につながる手がかりの把握は、今回の調査において大きな期待のひとつであった。

調査の結果、当初の想定に違わず弥生時代中期の方形周溝墓２基や溝持ち布掘の柱掘形を持つ総柱の掘立柱建物の検出や本概報表紙カットに使用した円面硯の出土等、今後の当該地域の調査にとって参考となる貴重な成果を得て、11月15日に埋め戻しを含む全ての作業を終了した。

この間、８月24日から26日までの３日間には体験発掘教室を開催し、博物館内での斎宮の発掘についての話、土器の水洗・接合等のほか当調査区で実際の発掘作業を体験し、例年にもまして酷暑の中にもかかわらず職員や作業員の指導のもとで子供たちには貴重な経験をしてもらうことができた。

さらに第108次調査は、昨年度の第103次調査に続いて方格地割の中でも旧参宮街道沿いで、現在の竹神社が所在して、「斎宮」の中でも極めて重要な性格を持った区画であったことも想定される柳原地区で10月11日から作業を開始した。当該地は保存管理計画の土地利用区分における第１種地区に相

当するため、既に史跡管理団体である明和町により公有化されているものの、調査前は手入れの行き届かない山林として雑草の生い繁る林となっていた。このため、調査の円滑に多大の支障が予測されたため、作業に先立ちその伐開と除草を兼ねて重機により表土除去を実施している。

調査の成果は、前年度の第103次調査により確認されている柵列ＳＡ7000の延長部分15間分のほか掘立柱建物14棟、土坑39基等の遺構や、緑釉陶器・土師器・須恵器・灰釉陶器等の多量の出土遺物を得て、平成７年３月３日に漸く全ての作業を完了した。この間、早朝に発生した阪神淡路大震災の当日である１月17日には予定していた調査指導委員会を開催し、予期せぬ大災害にもかかわらずご出席いただいた先生方には現地指導も含めて多くの有意義なご指摘を得、２月19日には現地説明会を開催して、寒中にもかかわらず200名を超える熱心な参加者を得た。

その他、三重県教育委員会が調査主体である計画的発掘調査以外に管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当して実施している史跡現状変更に先立つ事前の発掘調査は、本年度も第106-1次から第106-6次調査及び発掘調査を前提としつつも工事立会いの過程で遺構に重大な影響を及ぼすことがないと思われるため本格的な調査には至らなかった町道側溝新設も含め、７件について実施した。

なかでも第106-1次調査は、平成４年度の第96-5次調査で八脚門が検出されて以降に方格地割の南辺に面する７区画のうち、第104次調査に続きその中央南辺付近に位置する地点での３箇所目の調査で、調査前にはここでも八脚門が検出されることも予想されたが５棟の掘立柱建物や柵列等が検出されたものの第104次調査と同様にその所在は確認することはできなかった。

一方、昨年度の第102-6次調査に続く通称中町排水の改修に伴う第106-3次調査では奈良時代前期の古道の両側溝や一時期の斎宮跡にとって中枢部と考えられている一画を囲む柵列の一部を検出したほか、第106-4次調査では史跡北辺を東西に巡る所謂鎌倉時代大溝の検出や、第106-5次調査での奈良時代古道の両側溝と方格地割における東から１列目と２列目を画する南北方向の区画道路及びその両側溝を確認する等多くの貴重な成果を得ている。　　（吉水康夫）

調査次数	地区名	調査面積㎡	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
105	6AFN	780	H.6.4.7～H.6.10.7	明和町斎宮字鍛冶山2758-1他	佐々木　敬	計画発掘調査	3
106－1	6AEW－J	180	H.6.6.14～H.6.7.13	明和町斎宮字鈴池338-1　他	森西喜作	倉庫の新築	3
106－2	6AEE－W	26	H.6.7.7～H.6.7.14	明和町斎宮字楽殿2891-3	向井浩高	住宅の新築	3
106－3	6AFL・6AFM	200	H.6.8.22～H.6.10.13	明和町斎宮字鍛冶山　地内	明和町	側溝改修	2
106－4	6AEC－L	180	H.6.10.14～H.6.10.25	明和町斎宮字苅干2861-3	坂本正成	住宅の新築	3
106－5	6AGO	646	H.6.11.14～H.7.3.31	明和町斎宮字鍛冶山2362-3	青山　尚	倉庫の新築	2
106－6	6ACC－B	128	H.7.1.23～H.7.3.9	明和町斎宮字塚山3340-4	田畑　学	住宅の新築	3
107	6ABI－Q	530	H.6.7.18～H.6.11.15	明和町竹川字中垣内414-1 他	沢　恒一	計画発掘調査	3
108	6AEQ－C	1,100	H.6.10.11～H.7.3.3	明和町斎宮字柳原2779-2　他	明和町	計画発掘調査	1
合　計		3,770	内訳：計画発掘調査　2,410㎡、　史跡現状変更に伴う事前調査　1,360㎡				

第１表　平成６年度発掘調査一覧

Ⅱ．第105次調査

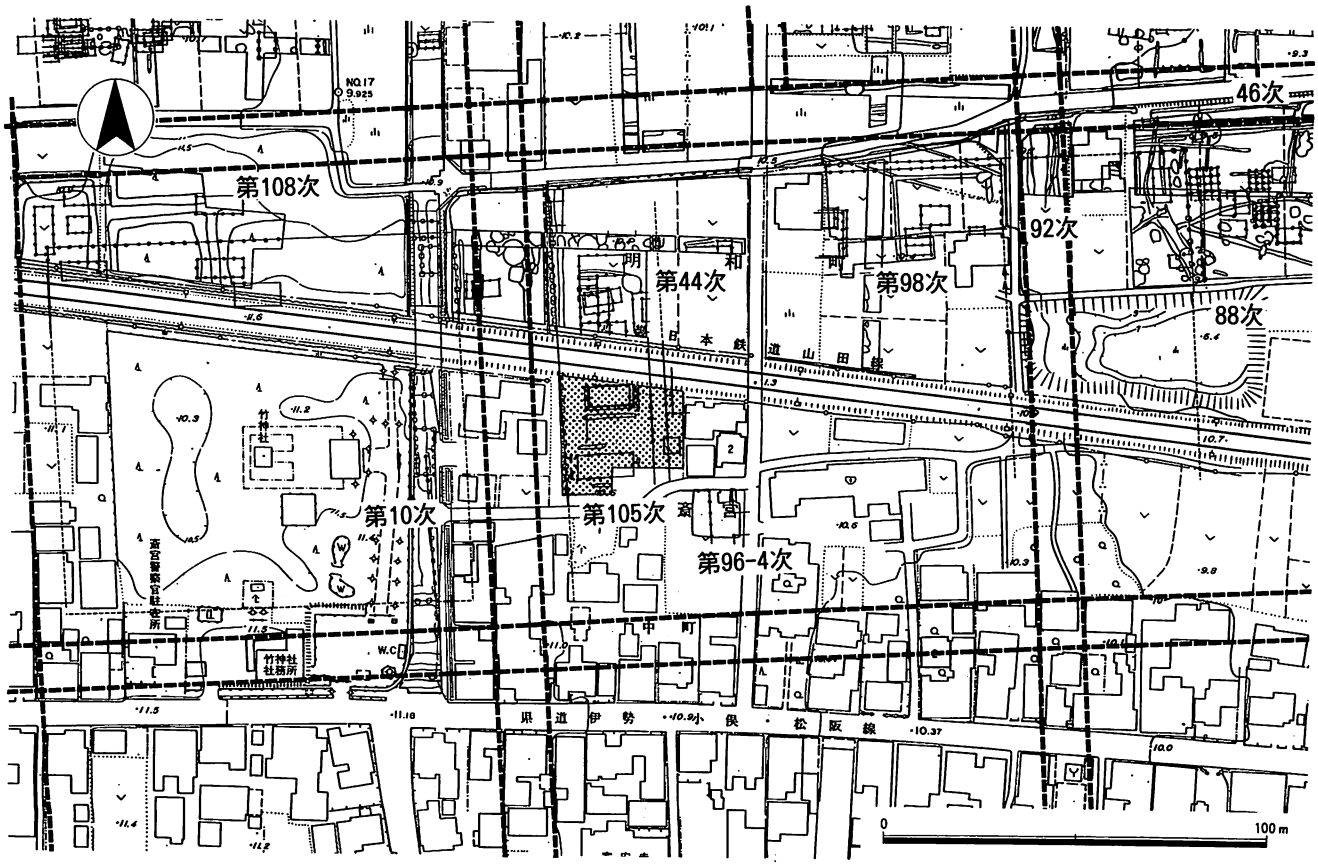
6ＡＦＮ（鍛冶山地区）

1．はじめに　本年度最初の計画調査として、第105次調査を史跡東部、鍛冶山地区で平成６年４月７日から10月７日まで実施した。本調査区は竹神社の東側約50m、近鉄山田線南側の現況畑地であるが、隣接する住宅等で囲まれるため調査区東半と西半の２回に分けて行い、最終的に調査面積は780㎡に及んだ。

史跡東部には、奈良時代後期～平安時代初期にかけて造営が開始されたと考えられる方格地割が25年に及ぶ斎宮跡の発掘調査で明らかになってきた。これは一辺約120mを基調として幅約12mの区画道路が碁盤目状に続き、東西５列×南北４列、合計20の方形区画で構成されるものとも考えられたが、平成５年３月史跡南限で発見した八脚門ＳＢ6850とそれに取付く東西柵列ＳＡ6849により、最大東西７列×南北４列まで拡大することがわかってきた。また、この方格地割のほぼ中央部、鍛冶山西ブロックで実施した第98次調査では、大規模な柵列（板塀）に囲まれた内側に大型の掘立柱建物を検出するなど、方格地割の中枢部としてこの区画が位置づけられるようになった。

今回の調査はこの鍛冶山西ブロックの西辺部にあたり、近鉄線を挟んで北側の第44次調査で検出した南北柵列ＳＡ1411・2675の南側延長部分を確認し、この柵列の内側に配置される掘立柱建物群の実態を解明することを調査の目的とした。

調査区の現況は標高10.5m前後の平坦な畑地で、遺構面は灰色系の耕作土と20cm～30cm厚のにぶい黄褐色土の包含層を除去した下部の黄橙色粘土（地山）として捉えた。調査区全体の地山面もほぼ平坦で標高10.1m前後を測る。



第２図　調査区位置図（１：2,000）

2．遺構

調査区南半は近世以降の撹乱溝等でかなり削平されていたが、検出した遺構としては、奈良時代後期から平安時代後期までに及び、柵列７条、掘立柱建物11棟、溝17条、土坑15基がある。

(1) 奈良時代後期～平安時代初期の遺構

柵列３条、掘立柱建物６棟、溝６条がある。

ＳＡ1411　調査区西辺部、ＳＡ2675と重複する南北柵列で、柵列の方向はＮ４°Ｗを示し、柱間は2.95m（10尺）等間で10間分（29.5m）を検出した。ＳＡ1411は方格地割の鍛冶山西ブロックの内側を囲む大規模な柵列の西辺に相当し、近鉄線を挟んで北側、第44次調査では12間分を検出している。この柵列の北端からさらに１間分北の柱穴（未検出）を北西隅として今回検出分をあわせると南側へ28間以上延長するものと考えられる。柱掘形は一辺0.8m～1.0mの方形で、深さは45cm前後である。埋土は黒褐色土で直径約30cmの柱痕跡を検出した。柱穴の底面は標高9.7m前後とほぼ一定する。出土遺物は皆無に等しい。新旧関係は柱穴の切り合いより古い方からＳＡ1411→ＳＡ2675である。

ＳＡ7150　調査区中央部で新たに発見した南北柵列で、ＳＡ1411の東側約24mで並行し、柵列の方向は同様にＮ４°Ｗを示す。柱間は2.95m等間で６間分（17.7m）を検出した。柱掘形はＳＡ1411よりもやや大型で一辺0.9m～1.1mの方形、深さは約70cm、直径約30cmの柱痕跡がある。底面は標高9.5m前後を基準とするが、柵列の北端から３間目が標高約9.7m、５間目が標高約9.3mであり、約20cmの高低差がみられる。埋土は黒褐色土で土師器の破片が数片出土しただけである。

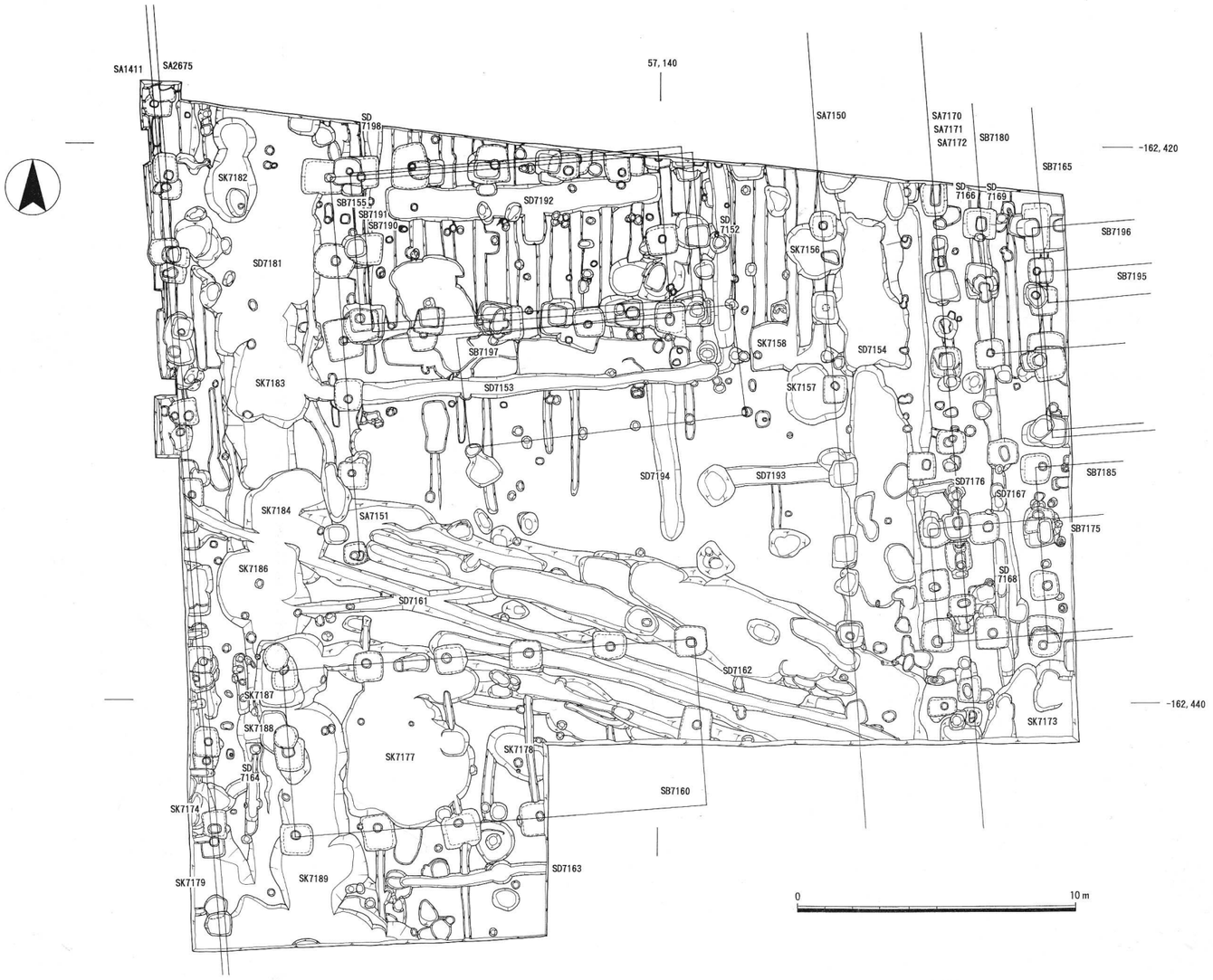
ＳＢ7155　調査区北西部、東西棟の桁行４間×梁行２間で、柱間は3.0m（10尺）等間である。棟方向はＥ４°Ｎを示し、ＳＡ1411から西妻までと、ＳＡ7150から東妻までの距離はほぼ等間隔の約６mを測る。柱掘形は一辺約1.2mの方形で深さは90cm前後、柱痕跡は直径約35cmを測り、ＳＡ1411の柱穴よりも大型である。確認できた底面は標高9.2m～9.3mとかなり深い。埋土は黒褐色土で遺物はほとんどみられない。重複するＳＢ7190・7191は、柱穴の切り合いよりＳＢ7155→ＳＢ7190→ＳＢ7191と建て替えられる。

ＳＡ7151　ＳＢ7155の西妻柱筋の南側延長線上で３間分の柵列が延びており、この建物に取り付く板塀が想定される。柱間は不揃いで、南西隅柱から2.1m（７尺）、2.7m（９尺）、3.0m（10尺）を測る。柱掘形は一辺0.8m～1.0mの方形、深さは30cm前後で直径約30cmの柱痕跡を検出した。埋土は黒褐色土で、柱穴底面は２間目まで標高約9.7mを測るが、３間目の柱穴は標高約9.4mとさらに低い。

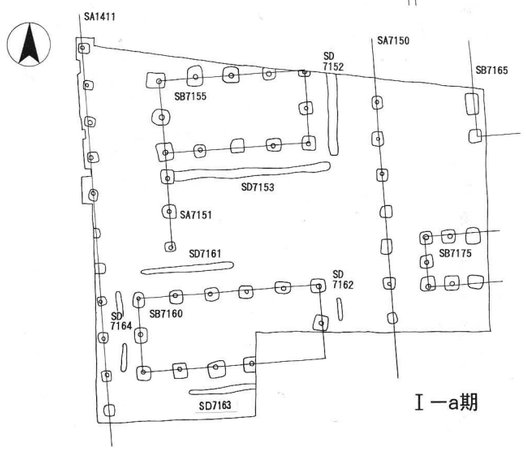
		遺構の種別											
		ＳＫ				ＳＡ		ＳＢ			ＳＤ		
奈良	後期					Ⅰ	1411 7150 7151	7155 7160 7165 7175 7180 7185			7152 7153 7161 7162 7163 7164		
平安	初期	7179											
	前Ⅰ期					Ⅱ	2675 7170	7190 7191 7195 7196					
	前Ⅱ期	7156 7157 7158 7177 7182 7183 7184 7186											
	中期										7154 7169		
	後期	7178									7181 7192		
時期不明		7173 7174 7187 7188 7189				7171 7172		7197			7166 7167 7168 7176 7193 7194 7198		

第２表　時期別遺構分類表

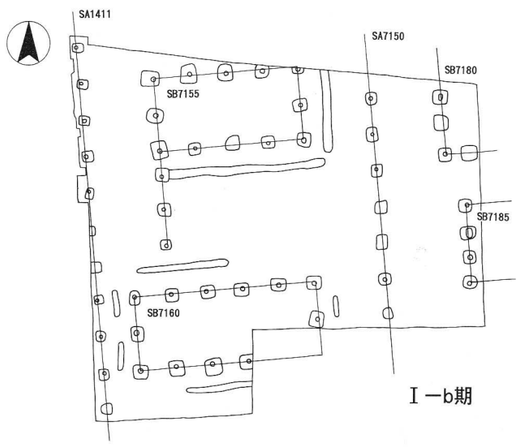
第３図　遺構実測図（1：200）・遺構変遷図（1：500）



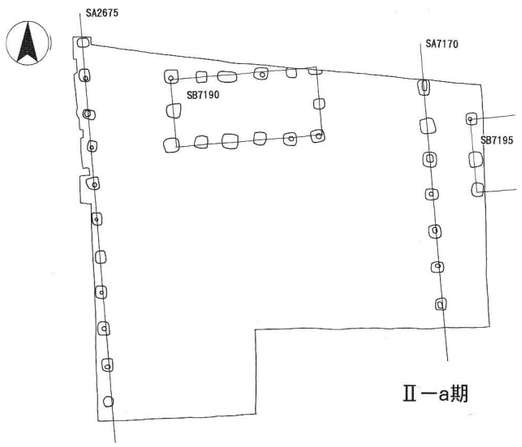
		Ⅰ　期		Ⅱ　期	
		a	b	a	b
SA	1411 7150	←――→			
SA	2675 7170			←――→	
SB	7155 7160	←――→			
SB	7165 7175	←――→			
SB	7180 7185		←――→		
SB	7190 7195			←――→	
SB	7191 7196				←――→



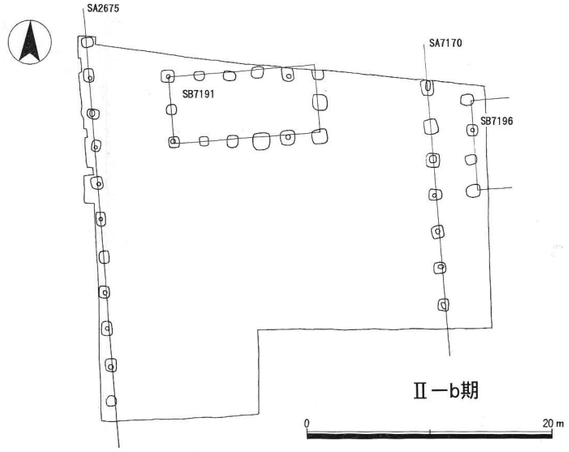
Ⅰ－a期



Ⅰ－b期



Ⅱ－a期



Ⅱ－b期

ＳＤ7152･7153　ＳＢ7155の東・南側に約2.1mの距離をおいて溝ＳＤ7152・7153が並走するが、北・西側にも同様の溝が存在するものと思われる。これらは断面逆台形を呈し、幅60㎝～70㎝、深さ35㎝～50㎝を測るが、溝底は標高9.8m前後と平坦である。黒褐色土の埋土からは遺物は出土していない。

ＳＢ7160　ＳＢ7155の南側約12mの間隔をおいて並ぶ東西棟である。東妻の柱通りはＳＢ7155の東妻柱筋と同じで同時期に併存したものと考える。柱間は3.0m等間で桁行５間×梁行２間と最大級の建物である。柱掘形は一辺約1.2mの方形で深さ40㎝～80㎝、柱痕跡は直径35㎝前後を測る。柱穴底面は標高9.3m～9.4mで、黒褐色土の埋土からは出土遺物は皆無に近い。

ＳＤ7161～7164　ＳＢ7160の四辺には、約1.5m隔てて並行する溝ＳＤ7161～7164が検出された。確認した溝幅は約40㎝、深さ30㎝～40㎝を測り、断面逆台形である。溝埋土は柱穴と同じ黒褐色土だが、出土遺物はいずれも確認されなかった。

ＳＢ7165　調査区北東隅でＳＡ7150の東側に約7.5m隔てて並行し、柱間3.0mの南北１間分を検出したが、建物全体は調査区外へさらに拡がるものである。柱穴はＳＢ7196に切られるが、柱掘形は一辺1.1m前後の方形と考えられ、埋土は黒褐色土である。柱列の方向はＮ４°Ｗでしかも柱間が3.0mであることからＳＡ7150と並行し、ＳＢ7155と同規模程度の南北棟を想定するが、東西棟の可能性も充分残される。

ＳＢ7175　調査区南東部、柱間は2.1m等間で桁行３間×梁行２間の東西棟と考えられる。棟方向はＥ４°Ｎで、ＳＡ7150の柱通りに対して西妻柱筋が並行し、その間隔は約６ｍを測る。柱掘形は一辺約1.2mの方形で深さ約80㎝、柱痕跡は直径35㎝前後である。確認した柱穴底面は標高9.4m前後とほぼ一定する。埋土は黒褐色土と黄橙色土（地山）が混在するが、遺物は弥生土器と見られる小片が３点出土した。柱穴の切り合いから新旧は、ＳＢ7185より古い。

ＳＢ7180　調査区北東部で桁行２間分×梁行１間分を検出したが、南北棟の５間×２間が想定され、柱間は2.4m（８尺）等間である。棟方向はＳＡ7150と同じで、西桁行筋までの距離は約5.6mを測る。柱掘形は一辺1.0m～1.2mの方形で深さ約70㎝、柱痕跡は直径35㎝前後である。柱穴底面は標高9.4m前後である。埋土は茶褐色土で、柱穴の切り合い関係より古い方から、ＳＢ7180→ＳＢ7195→ＳＢ7196の順である。

ＳＢ7185　調査区南東部でＳＢ7175と重複して南北３間分を検出したが、柱間が2.1m等間で南北棟の３間×２間が想定される。柱列の方向はＮ４°Ｗである。柱掘形はＳＢ7175よりやや小型で一辺約1.1mの方形で深さは約80㎝、柱痕跡は直径30㎝前後を測る。底面の標高は9.4m前後である。埋土は茶褐色土、遺物は土師器片が数点出土した。

(2)　平安時代初期の遺構　土坑１基がある。

ＳＫ7179　調査区南西隅で検出した土坑で東半はＳＤ7181、北半はＳＡ2675の柱穴に切られ、底面ではＳＡ1411の柱穴を確認した。調査区外へさらに拡がるもので規模・形状は明らかでないが、長径2.2m以上、深さ約30㎝と考えられる。埋土からは平安時代初期とみられる須恵器杯・蓋、土師器杯・皿等が少量出土した。

(3)　平安時代前Ⅰ期～前Ⅱ期の遺構　柵列２条、掘立柱建物４棟がある。

ＳＡ2675　調査区西辺部、ＳＡ1411の柱穴北辺を切る南北柵列で、10間分（29.5m）検出したが、ＳＡ1411の建て替えとみられる。柱間は2.95m（10尺）等間で柵列の方向はＮ４°Ｗ

を示す。第44次調査では11間分検出し、さらに第106-3次調査では北西隅となる北端の柱穴を確認したため、今回の検出分を含めて南側へ27間以上延長することがわかった。柱掘形は一辺0.9m～1.1mの方形、深さ約45㎝、柱痕跡は直径約30㎝を測る。柱穴底面の標高はＳＡ1411とほぼ同じ9.7m前後である。茶褐色土の埋土からは土師器小片がわずかに出土している。

ＳＡ7170　ＳＡ7150と同様、新たに発見した南北柵列で、東側約４ｍに並行して６間分（17.7m）を確認した。柱列の方向はＮ４°Ｗ、柱間は2.95m（10尺）等間で、ＳＡ2675とは約28ｍの間隔をおいて並行することから同時期併存と考える。柱掘形は一辺0.9m～1.2mの方形で深さは50㎝～60㎝、柱痕跡は直径30㎝前後である。底面の標高は9.7m前後を測る。出土遺物は皆無で、埋土は茶褐色土である。

ＳＢ7190･7191　ＳＢ7155と重複し、柱間をやや縮小して東西棟の桁行５間×梁行２間に建て替えたものである。ＳＡ2675の東側約７ｍでＳＢ7190の西妻、ＳＡ7170の西側約９ｍで東妻の柱筋を揃える。ＳＢ7155の柱間は3.0m等間であったが、桁行で2.4m、梁行で2.7mとなる。柱穴の切り合いからＳＢ7190→ＳＢ7191の順に建て替える。ＳＢ7191の柱掘形は一辺0.8m～0.9mの方形で深さ60㎝～70㎝、柱痕跡は直径約30㎝を測る。ＳＢ7190は重複するため確認できた柱掘形で一辺1.0m前後の方形、深さは約70㎝､柱痕跡は直径30㎝前後を測る。柱穴底面の標高はいずれも9.4m～9.6mでＳＢ7155と比べて20㎝以上高い｡埋土は茶褐色土系で､平安時代前Ⅱ期～中期と見られる土師器杯・皿・甕の小片が少量出土した。なお、ＳＢ7155では東辺・南辺でＳＤ7152・7153が存在したが、ＳＢ7190・7191では該当する溝は確認されなかった。

ＳＢ7195　調査区東辺部で検出したＳＢ7195・7196は、建物全体が明らかにできなかったが、いずれも調査区外に拡がる建物として捉えた。ＳＢ7195はＳＡ7170の東側約3.6m隔てて並行し、西妻柱筋を揃える東西棟と考えられる。柱間は3.0m等間、梁行２間分検出したが、ＳＢ7155と同規模の４間×２間が想定される。ＳＢ7180・7196と重複しており、確認できた柱掘形は一辺0.9m～1.0mの方形で深さ約50㎝を測る｡柱痕跡は直径30㎝前後で底面の標高は 約9.6mである。暗茶褐色土の埋土から土師器細片がわずかにみられる。柱穴の切り合いからＳＢ7180より新しく、ＳＢ7196より古い。

ＳＢ7196　ＳＢ7165・7180・7195の柱穴と重複し、桁行３間分を検出した。柱間は2.4m等間で南北棟の３間×２間が考えられる。柱掘形はやや不定形で一辺0.7m～0.9mの略方形を呈し、深さは約70㎝で底面の標高は9.3m～9.5mを測る。直径約30㎝の柱痕跡が一部認められた。埋土は黄色土がやや混入した茶褐色土で､平安時代前Ⅱ期～中期とみられる土師器　杯・皿・甕の破片が少量確認された。

(4)　平安時代前Ⅱ期の遺構　土坑８基がある。調査区北東部のＳＫ7156～7158や、調査区西辺部のＳＫ7177・7182～7184・7186である。

ＳＫ7156～7158　ＳＫ7156・7157はＳＡ7150の柱穴を切っており、いずれも直径約2.0ｍの略円形土坑で深さ約40㎝を測るが、埋土から完形に近い土師器杯・皿が出土している。ＳＫ7158は南辺でＳＫ7157と接し、深さ約20㎝で一辺約1.8mの方形を呈する。

ＳＫ7177　西端が南北溝ＳＤ7181と接する大形の円形土坑で直径約4.5m、深さ約35㎝を測る。埋土は黒灰色土で､土師器杯・皿の破片が少量出土した。

ＳＫ7182～7184・7186　ＳＤ7181の溝底でＳＫ7182～7184・7186を検出した。いずれの埋土もやや黒

灰色を呈し、わずかながら土師器杯・皿・甕小片が出土している。ＳＫ7182は不定形な長円形で長径約４ｍ×短径約２ｍ、深さ約30㎝を測る。ＳＫ7183・7186は長径３ｍ前後の略円形で深さは30㎝～40㎝を測る。ＳＫ7184は西半が撹乱土坑に切られるが、深さ約30㎝、直径約1.5mの円形土坑と考える。

(5) 平安時代中期の遺構　溝２条がある。

ＳＤ7154　調査区東半部、ＳＡ7150とＳＡ7170の間で南北方向に続く溝である。溝幅は2.8m前後、深さ30㎝～45㎝を測る。断面形は浅い半円形を呈し、溝底は標高9.9m前後とほぼ平坦である。茶灰色土の埋土からは、土師器杯・皿小片を中心として遺物整理箱で４箱分出土したが、一部平安時代前Ⅱ期に相当する土器片も混入する。

ＳＤ7169　調査区北東隅でＳＤ7166と重複する南北溝で、ＳＢ7180の西桁行筋の柱穴を切る。確認長約4.2m、溝幅約30㎝、深さ約30㎝を測り、土師器小片が出土する。

(6) 平安時代後期の遺構　溝２条、土坑１基がある。

ＳＤ7181　調査区西辺部の南北溝ＳＤ7181は、溝幅2.5m～3.5m、深さ20㎝～50㎝で、断面形は浅い半円形を呈する。溝底の標高は北端で約10m、南端では約9.7mとなり、北から南へ緩やかに傾斜する。底面ではＳＢ7160の西妻柱やＳＫ7182～7184・7186～7189が確認されている。遺物としては当該期の土師器杯・皿片が少量出土したが、平安時代前Ⅱ期～中期のものもわずかに混入する。

ＳＤ7192　調査区北辺付近で、ＳＢ7190の北桁行筋を切る浅い溝である。確認全長は約10m、溝幅約1.1m、深さ20㎝前後を測る。埋土は淡茶褐色土でわずかに土師器片を含む。

ＳＫ7178　ＳＫ7177の東隣に位置する楕円形土坑で、長径約2.5m×約1.5m、深さ約20㎝を測る。茶褐色土の埋土からはロクロ土師器等の小片が出土する。

(7) 時期不明の遺構　柵列２条、掘立柱建物１棟、土坑５基、溝７条がある。

ＳＢ7197　調査区中央付近、ＳＢ7155・7190・7191と重複する東西棟で桁行５間×梁行２間である。棟方向はＥ７°Ｎを示し他の建物とは異なる。柱穴は円形で直径約40㎝と小さく、深さ約40㎝を測り、柱間は2.0m等間である。出土遺物は皆無であるが、ＳＢ7191より新しく、少なくとも平安時代中期以降と考えられる。

ＳＡ7171･7172　ＳＡ7170の柱筋と重複する南北柵列で、方位はＮ４°Ｅを示す。ＳＡ7171は柱間は2.95m等間で６間分（17.7m）を検出した。柱穴は径約45㎝、深さ30㎝～60㎝、底面の標高は9.6m～9.9mと一定しない。ＳＡ7172は柱間は3.0m等間で５間分（15.0m）を検出した。柱穴は径30㎝～45㎝、深さ30㎝～50㎝、底面の標高は9.7m～9.8mで高低差は10㎝前後である。これら柵列とＳＡ7170との新旧関係は埋土の切り合いでは明確にできなかったが、新しいものと考える。

ＳＫ7173･7174　ＳＫ7173は調査区南東隅で検出した深さ約80㎝の土坑で大半が調査区外に拡がり、全体規模は不明である。黒褐色土の埋土からは近世陶器を含むが、大半が土師器鍋片で16世紀代とみられる。ＳＫ7174は調査区南西隅でＳＡ2675を切っており、直径1.8m前後の略円形を呈するものと考えられる。出土遺物は16世紀代の土師器鍋片である。

ＳＫ7187～7189　ＳＤ7181の南半、溝底で検出した略方形の土坑である。ＳＫ7187は長径約2.0m×短径約1.5mで深さ約40㎝、ＳＫ7188は長径約1.5m×短径約1.0mで深さ約30㎝、ＳＫ7189は長径約3.0m×短径約2.7mで深さ約30㎝を測る。出土遺物は土師器細片のみで平安時代前Ⅱ期～中期のどの時期に属するかは不明である。

ＳＤ7166～7168　ＳＡ7170の東側に約３m隔てて並行し、南北へ直線的に続く溝である。ＳＤ7166はＳＢ7165の西側に約2.1m隔てて並走する雨落溝と考えられる。ＳＢ7180の柱穴を切っており、ＳＤ7169と重複するが、確認長約10m、幅約60cm、深さは約15cmで溝底はほぼ平坦である。埋土は黒色土でＳＢ7165に類似するが、出土遺物は皆無である。

ＳＤ7167はＳＢ7185の西側に約1.5mの間隔をおいて並行し、この建物の雨落溝の可能性も窺われる。ＳＤ7167はＳＤ7168の下部で検出し、ＳＢ7175の柱穴を切っている。埋土は黒色土で確認長約16m、幅約50cmで断面逆台形を呈し、深さ30cm～40cmを測る。溝底の南半ではやや深くなり標高9.7mと平坦である。ＳＤ7168は茶褐色土の埋土で溝幅約60cm、深さは20cm～30cmと浅い。この溝上面で 確認した小ピットからは陶棺の一部とみられる大形陶器片が出土している。

ＳＤ7176　ＳＢ7175の北側約1.5mで並行する東西溝で、確認長約1.6m、溝幅約40cm、深さ約30cmを測る。埋土はＳＢ7175の柱穴と類似する黒色土で雨落溝の可能性もあるが、出土遺物は皆無であった。

ＳＤ7193･7194　いずれも溝幅は約80cm、深さは約20cmと浅く、埋土は黄灰色土である。溝の方向はＳＤ7193でほぼ東西方向、ＳＤ7194ではほぼ南北方向を示す。

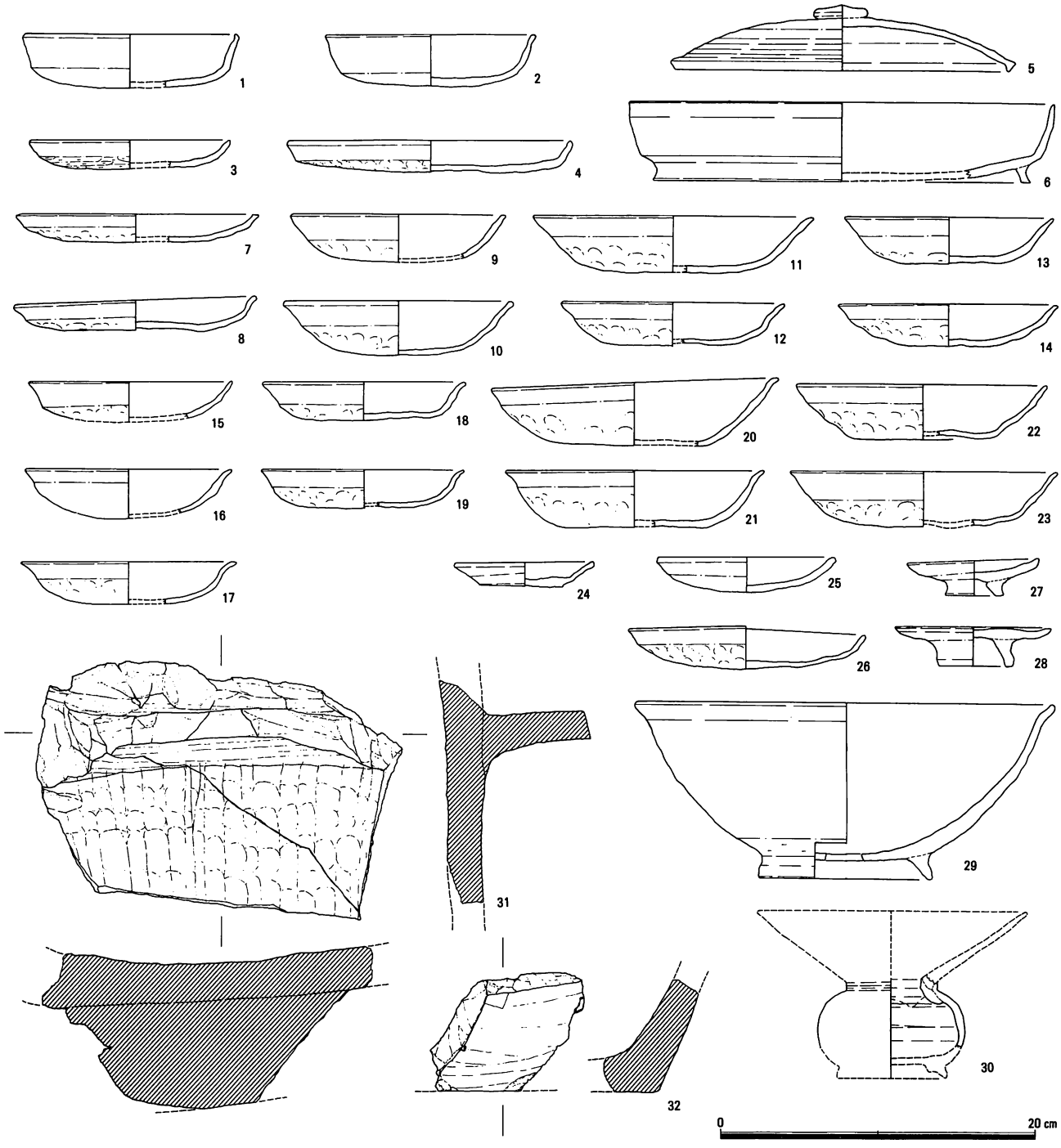
ＳＤ7198　溝幅約40cm、深さ約15cmの南北溝でＳＢ7191の西妻柱筋を切るが、出土遺物からは時期を決定するに至らなかった。

３．遺物

今回の調査では遺物整理箱で約80箱分出土したが、大半が包含層及び撹乱溝・土坑に混在する平安時代の土師器片や近世の土師器・陶器片であり、柵列や掘立柱建物の柱穴からは極少量であった。一方、土坑ＳＫ7179・7156・7157や溝ＳＤ7154･7181などからはややまとまって土師器杯・皿等が出土したものの、いずれも完形品は少なく、残存度の低い土器破片が多いのが特徴的である。ここでは平安時代初期～後期までの土坑及び溝からの一括資料の中で実測可能な土器を中心に概述することとし、加えて特殊な遺物についても若干触れておきたい。

(1)　ＳＫ7179出土土器　平安時代初期のＳＫ7179からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕等が出土した。土師器杯（１・２）は口径13.6cm～14.0cm、器高3.4cm前後のものである。（１）は口縁部がやや外反気味にたちあがり、端部が内弯する。（２）は口縁部が外方へほぼまっすぐ開くものである。器面の調整はいずれも口縁部をヨコナデするｅ手法である。土師器皿（３）は口径13.0cmで口縁部がやや内弯気味にたちあがる。調整は口縁部を横ナデし、底部のみヘラケズリするｂ手法である。（４）は口径18.2cmと大型で口縁部がほぼまっすぐ外方にのび、端部がやや内弯する。調整はｅ手法である。須恵器杯蓋（５）は口径22.0cm、器高4.2cmで天井部上半にロクロケズリが施される。須恵器杯（６）は推定口径27.0cm、高台径24.0cm、器高5.1cmと大型である。

(2)　ＳＫ7156・7157出土土器　平安時代前Ⅱ期とみられるＳＫ7156・7157から出土した土器の大半は土師器杯・皿である。土師器皿（７）は底部と口縁部との境が明瞭でなく断面弓状となり、口縁端部の上方に平坦面をつくるものである。口径は15.6cm、器高1.8cmで調整はｅ手法である。法量がほぼ似かよった（８）は、口縁部が外反するタイプである。土師器杯は口径14cm前後、器高3.0cm前後で口縁部が外方へほぼまっすぐ開くもの（９・10・13・14）と口縁部がやや屈曲して外反するもの（12）がある。（11）は口径が18.0cm、器高3.1cmと大型である。器面調整はいずれもｅ手法であるが、口縁部ヨコ



第４図　出土遺物実測図　　ＳＫ7179：１～６、ＳＫ7156：７～11、ＳＫ7157：12～14
ＳＤ7154：15～23、ＳＤ7181：24～29、特殊遺物：30～32

ナデの範囲は器高の２分の１程度となる。

(3)　ＳＤ7154出土土器　　平安時代中期と考えるＳＤ7154からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、緑釉陶器、灰釉陶器片等があり、遺物整理箱４箱分出土した。土師器杯（15～19）は口径13cm～14cm、器高2.5cm～3.0cmのものである。(21～23）は口径16cm～17cm、器高3.5cm前後、(20)は口径18.5cm、器高4.1cmと大型の部類に属する。器面の調整はいずれもｅ手法であるが、口縁部の外反も弱くヨコナデの範囲も器高の３分の１程度と狭くなり、体部との区別が不明瞭となる。色調も白っぽいものが多く、器壁も薄手となる。

(4)　ＳＤ7181出土土器　　平安時代後期と考えるＳＤ7181からは土師器杯・皿・台付皿・甕等が出土

したが、ロクロ土師器片が顕著に認められた。(24) は口径9.1cm、器高1.6cmの小皿である。色調は橙色を呈するものの、須恵質と考えられるものでロクロ土師器皿の成形技法と酷似する。(25) は口径11.4cmの土師器小皿である。(26) は口径15.2cmの土師器杯で混入遺物と思われる。土師器台付皿 (27・28) は非ロクロ製のもので浅くほぼ平坦な皿部に高台が付くものである。須恵器鉢 (29) は口径26.6cm、器高13.3cm、径11.0cmの高台が付く。底径が小さく体部に丸みをもち口縁端部がやや外反する。底部中央には焼成後に外面から径約2.7cmの穿孔が施される。

(5) 特殊遺物等　緑釉陶器片13点、判読不明の墨書土器片 3 点、製塩土器片13点、砥石等石製品 3 点、釘等鉄製品 8 点、土錘 1 点、陶棺と考える大型陶器片 2 点がある。また、包含層からは「寛永通寶」、「寶永通寶」の銅銭が各 1 点ずつ出土している。

緑釉陶器唾壺　緑釉陶器 (30) はＳＤ7154から出土した唾壺の体部片であり、猿投産で淡緑色を呈する。体部最大径は9.3cmを測るが、実測図から復元すると推定口径約17cm、器高11cm前後で、台径約 7 cmの高台が付くものと考えられる。

陶棺　須恵質陶棺の破片と考える (31) はＳＤ7168の上面で検出した小ピットで、また、(32) は包含層から出土した。いずれも陶棺身の残欠で全体は不明であるが、粘土板を貼り合わせ、平面長方形を呈する箱型でやや小型のものを想定する。(31) は棺身側面とみられる厚さ2.5cm程の粘土板に幅7.0cm、厚さ2.0cm程の粘土板をほぼ水平に貼り付けて突帯部とすることから棺蓋受け部と考えられる。また、左側端部に貼り付けとみられる粘土痕跡が残ることから棺身上部角付近と思われる。外面調整は貼付突帯上部では横方向のナデ、突帯部上面は板ナデのままで端部から下面にかけてはナデ、下部は指オサエ後、縦方向のナデ仕上げである。内面の上半は横方向の板ナデ、下半は横方向のナデを施している。(32) は棺身底部と考える破片で底部粘土板の厚さは2.8cm、棺身部は厚さ2.0cm程で、調整は内・外面ともナデ仕上げである。これらの破片はいずれもオリーブ灰色を呈し、よく焼成されて堅緻だが、胎土には砂粒を多く含む。なお、県内における陶棺の出土例は非常に少なく、上野市佐那具町御墓山窯跡出土の陶棺などが知られる程度だが、今回出土の陶棺では蓋受け部とみられる突帯部の形態が異なるなどの違いもあり、これらを陶棺とするかどうかも含め検討を必要とする。さらに斎宮跡ではこれまで報告例はないものの、過去の出土遺物の中に類似する陶器片が存するとの指摘もあり、今後の調査研究と資料整理に期待したい。

４．まとめ

今回の調査では、方格地割の鍛冶山西ブロック西辺部で南北柵列ＳＡ1411・2675の南側延長部分を確認し、この東側で新たな南北柵列ＳＡ7150・7170や大型掘立柱建物を検出したことである。これらの発見によりこの区画内の様相が明らかとなった点では貴重な成果であったといえよう。なお、今回の調査結果について、これまで周辺で実施した調査成果を含めて再検討することとしたい。

外郭の柵列（外柵）　調査区西辺で確認した 2 条の南北柵列は第44次調査で検出したＳＡ1411･2675の南側延長部分であり、それぞれ28間、27間以上続くことがわかった。柱間はいずれも2.95m等間である。これらは方格地割鍛冶山西ブロックの西限に相当する南北区画道路東側溝ＳＤ2670の東側約7.0m（24尺）で並行し、このブロック全体の内側を取り囲む外郭の柵列（以下外柵とする）で板塀と考えられる。柱穴の切り合いより古い方からＳＡ1411→ＳＡ2675であることが判明しているが、調査区南西隅では平安時代初

期とみられる土坑ＳＫ7179がＳＡ2675の柱穴に切られ、しかもＳＡ1411の柱穴を土坑底面で検出したことから、ＳＡ1411はすくなくとも平安時代初期までで、ＳＡ2675はそれ以降に建て替えられたものとみられる。

内郭の柵列（内柵）　一方、今回調査区中央で新たに発見した南北柵列ＳＡ7150・7170は外柵に囲まれた区画内をさらに画する内郭の柵列（以下内柵とする）と考えられ、外柵同様に板塀を想定する。ＳＡ7150は西辺に相当する外柵ＳＡ1411の東側約24m（80尺）、ＳＡ7170はＳＡ2675の東側約28m（95尺）の間隔をおいてそれぞれ並行して６間分を検出したが、柱間はいずれも2.95m等間を測る。これら柵列の柱穴からは出土遺物が乏しく明確な時期を決定することはできなかったが、外柵と内柵の柱穴の埋土がそれぞれ酷似することや各外柵の柱通りと並行して内柵の柱通りが対応することなどからＳＡ1411にはＳＡ7150が、またＳＡ2675にはＳＡ7170が併存するものと考える。

ＳＡ7150は、南北方向にさらに延長するものと考えるが、今回の調査区から線路を挟んで北側の第29次・第44次調査区で、この北側延長上に位置する南北方向の柱列（ＳＢ2705）３間分があり、これをＳＡ7150の延長部分と考えるならば少なくともさらに９間分は続くものと思われる。しかし、この調査区東端の遺構検出状況から土坑等の重複で北側へ延びる柱穴が明瞭にできなかったとするならば、外柵の北辺に相当するＳＡ6760までさらに延長する可能性も少なからず残っている。

ＳＡ7170については、ＳＡ7150同様に線路を挟んで北側の第29次調査区で検出された南北方向の柱列（ＳＢ1427）１間分がこの北側延長線上にあることが判明した。このことから北側へは少なくとも14間分延びるものと考えられ、確認できた総延長としては20間分に及ぶ。ＳＡ7170は第98次調査検出の区画溝ＳＤ6810と左右対称の位置関係を呈するものと考えられ、これを確信する結果となった。しかし、柱列ＳＢ1427に先行する柱列ＳＢ1428が今回の調査区では確認されなかったものの、同一線上に存在するＳＡ7171・7172の延長を含め、今後の検討課題となった。

柱穴の規模・形状等　今回検出した４条の外・内柵の柱間はいずれも2.95m等間であるが、外柵の新旧で柱掘形規模に違いがみられる。ＳＡ1411は一辺0.8m～1.0mの方形だが、ＳＡ2675では一辺0.9m～1.1mの方形となってやや大型であり、相対的に旧→新で小→大へと変化する。この状況は第98次調査検出のＳＡ6760とＳＡ6780でも同様に認められた。内柵では新旧によるこの規模の相違はみられないが、いずれもＳＡ1411よりは大きい。

また、柱穴底面を絶対高でみると、外柵２条と内柵ＳＡ7170では高低５㎝程度の差があるものの標高9.7mでほぼ一定である。ＳＡ7150では底面高でややばらつきがみられ、標準的標高約9.5mに対して約20㎝の高低差がある。因にＳＡ6760とＳＡ6780では柱穴底面の起伏が顕著であり、20㎝～40㎝の高低差が認められる。

柵列の変遷　第98次調査では柵列の新旧関係から大きく２つの配置を想定して概述したが、今回の調査結果により柵列の変遷をⅠ期（奈良時代～平安時代初期）、Ⅱ期（平安時代前Ⅰ期～前Ⅱ期）として考えていきたい。

Ⅰ期　Ⅰ期では外柵の南辺は現時点で不明だが、北辺ＳＡ6760、西辺ＳＡ1411、東辺ＳＡ6770で構成される一辺400尺（約117.6m）の囲みが存在する。さらにＳＡ2800によって東側に160尺（約47.5m）張り出した形状となって北辺が最大560尺（約165m）となる長方形の区画が想定される。内柵ＳＡ7150は西辺ＳＡ1411の内側80尺で並行するが、

これに対して東辺ＳＡ6770から張り出すＳＡ2800が２倍の距離に相当する160尺で並行し、柵列の規格的配置が注目される。

Ⅱ期　Ⅱ期では東側の張り出し部分がなくなり、１辺400尺で構成される外柵がそれぞれ建て替えられて北辺ＳＡ6780、西辺ＳＡ2675、東辺ＳＡ6790となる。また、この囲みの東側には南北区画道路が延長され、この区画の整備がほぼ完成されたものと考えられる。内柵ＳＡ7170は西辺ＳＡ2675の東側95尺で並行し、柵列の北側延長線上が北辺ＳＡ6780の柱穴には直接取り付かないことも予想される。

建物の規模・形状等　掘立柱建物の中で全体規模が把握できたものとしてＳＢ7155・7160がある。いずれも柱間が10尺（3.0m）で掘立柱建物の柱間寸法としては最大である。したがって５間×２間のＳＢ7160はこれまで検出した建物の中でも最大規模を有する。柱掘形の規模は一辺約1.2mの方形で柵列の柱掘形よりも大きい。柱穴底面の絶対高では、ＳＢ7155が標高9.2m～9.3m、ＳＢ7160では9.3m～9.4mを測り、柵列の柱穴底面よりも30cm～50cm深く掘削したことが窺える。また、これらの建物周囲を巡る溝やＳＢ7155の西妻柱筋の延長線上に取り付くと想定される柵列を検出したことは建物の様相を知るうえで貴重な発見といえるだろう。

掘立柱建物群の変遷　掘立柱建物の時期については、柱穴からの出土遺物が細片かつ微量のため、明確な時期区分が困難であったが、柵列との対応関係及び建物の新旧関係や規格的な配置を考慮し、建物群の変遷を想定した。また、内柵の西側と東側では建物配置が異なっており、中心施設の存在を予想する東側ではさらに建物配置を検討する必要がある。したがって、柵列の変遷をⅠ期、Ⅱ期と対応させ、掘立柱建物の配置をそれぞれａ、ｂに区分して考えることとした。

Ⅰ－ａ期では内柵ＳＡ7150の西側で東西棟のＳＢ7155・7160が40尺の間隔をおいて南北に並び建つ。ＳＡ7150の東側では南北棟のＳＢ7165、東西棟のＳＢ7175が配置される。ＳＢ7175を除いて他はすべて柱間が10尺等間であることが特徴である。

Ⅰ－ｂ期ではＳＡ7150の西側はＳＢ7155・7160が存在し、東側のみ建て替えられて南北棟のＳＢ7180・7185となる。

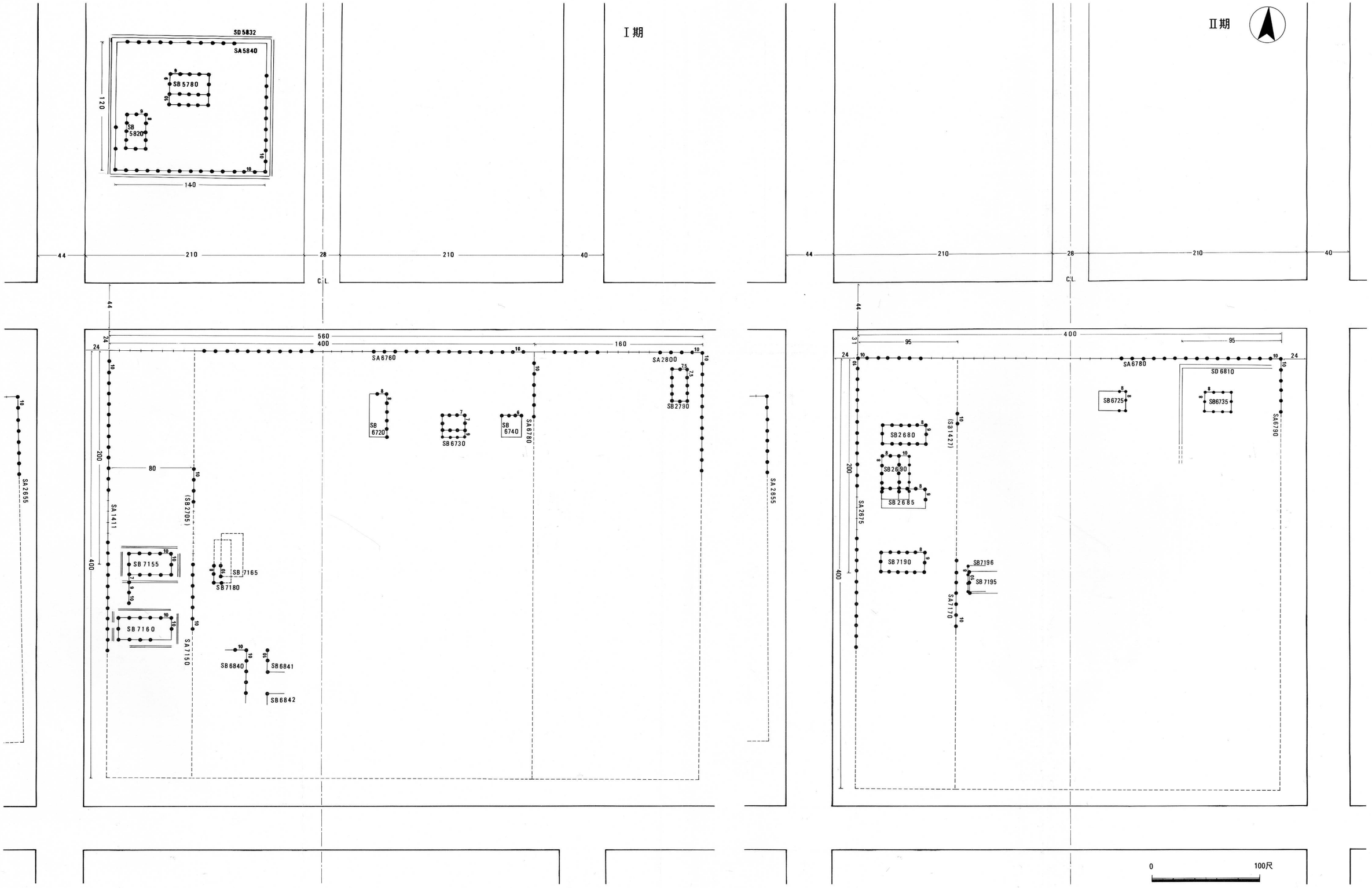
Ⅱ－ａ期ではＳＡ7170へと推移し、西側ではＳＢ7155の建物規模は変えずに柱間を縮小して５間×２間としたＳＢ7190が建てられるが、第44次調査で検出した同規模の東西棟ＳＢ2680・2685を含めこの３棟が40尺の間隔をおいて規則的に配置される。また、ＳＡ7170の東側では東西棟ＳＢ7195が配置される。

Ⅱ－ｂ期ではＳＡ7170の西側でＳＢ7190がＳＢ7191に建て替えられ、東側では南北棟のＳＢ7196となる。

以上、主要遺構となる柵列と掘立柱建物群を中心に概述してきたが、今回新たに発見した内柵２条によって方格地割の中枢部とされる鍛冶山西ブロックがさらに細分化され、複雑な様相を呈することとなった。また、中心施設の範囲がこの内柵の東側へ展開することが予想されるなど、この区画を考えるうえでは極めて貴重な調査結果になったといえよう。斎宮跡の実態解明に向けて課題は多いが、鍛冶山西ブロックが重要な鍵を握っているものと思われ、今後の発掘調査の進展がよりいっそう望まれる。

（野原宏司）

《参考文献》・笠井賢治「御墓山窯跡出土の陶製仏殿（厨子）」『1994年度上野市文化財年報１』上野市教育委員会1995



第５図　鍛冶山西ブロック周辺遺構配置図（１：1,000）

Ⅲ．第１０７次調査

６ＡＢＩ－Ｏ（中垣内地区）

１．はじめに　平成６年度第２回目の計画調査である第107次調査は、史跡西部の台地縁辺部にあたる大字竹川字中垣内で、平成６年７月18日から11月15日にかけて面積530㎡を対象に行った。調査地は斎宮歴史博物館から南西へ約400m、近鉄山田線の北側で現況畑地に立地する。

この調査地周辺は、斎宮跡が発見されるきっかけとなった地域で、当時は古里遺跡と呼ばれる遺跡であった。これまでには昭和55年度第30次調査、昭和56年度第36次調査、昭和60年度第58－４次調査、平成２年度第85－８次調査、また平成５年度第100次・第102-5次調査などが行われている。調査の結果、飛鳥時代～奈良時代にわたる竪穴住居や掘立柱建物、平安時代末期～鎌倉時代の遺構が分布することが確認されている。

遺物では三彩陶器や円面硯、銅製銙帯鉈尾などが出土しており、奈良時代の斎宮において重要な地域である。

これらの調査から、飛鳥時代の柵列（第58－４次調査 SA4281・4282、第85－８次調査 SA6280）による囲みの様子、また奈良時代の柵列（第30次調査 SA1674、第100次調査 SA6940～6942）による囲みの様子が次第に明らかになりつつあるが、それらに伴う掘立柱建物およびその配置等は依然として不明確である。

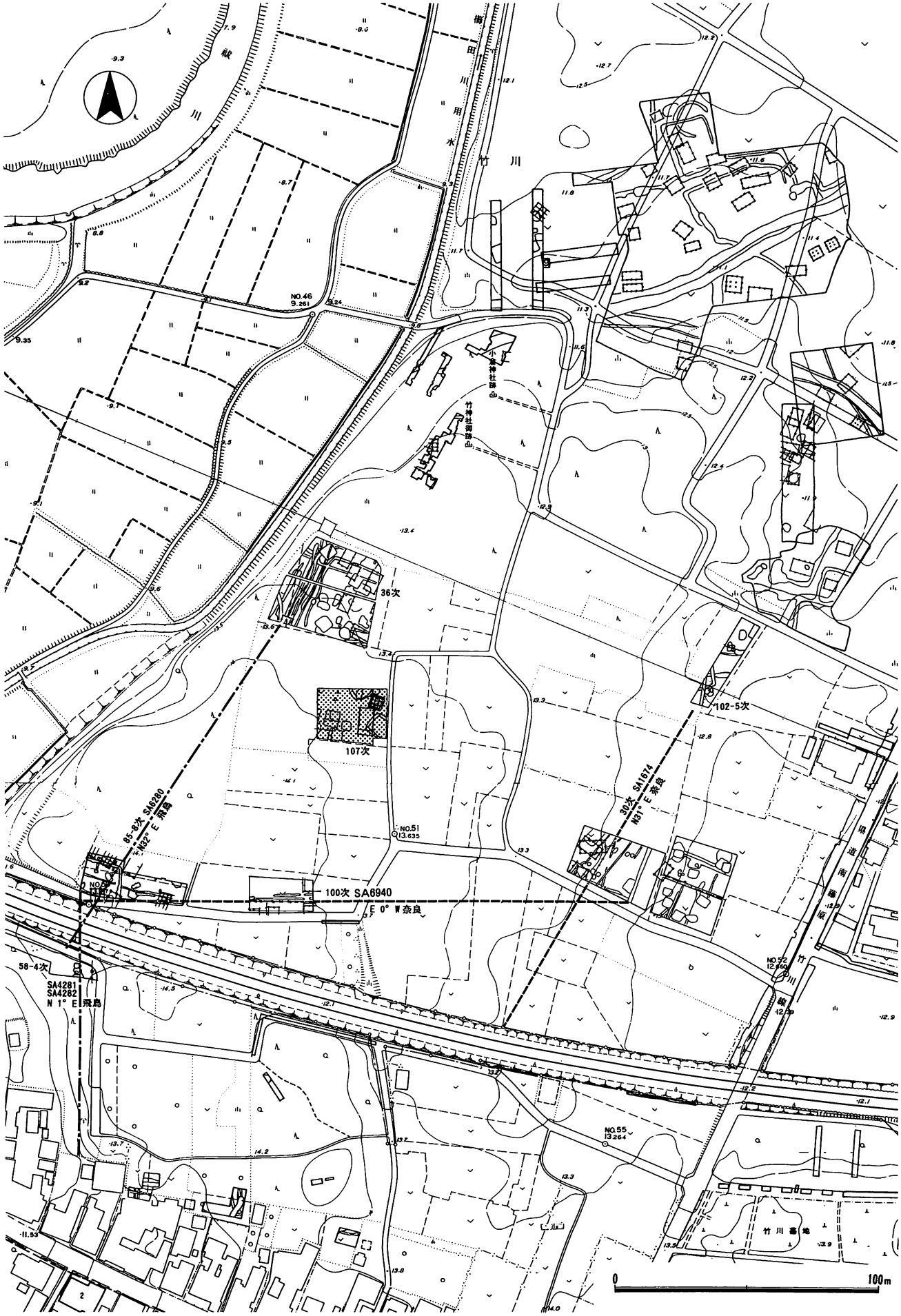
今回の調査は、そうした斎宮の成立期・終末期の様子を考える上で、今まで断片的であった面的な調査を昨年度の第100次調査に続いて実施し、遺構の実態を明確にすることを目的として行ったものである。

２．遺　　構　調査区は、東西26m、南北20mを設定し、基本層序としては上層より表土（灰黄色土厚さ25cm～30cm）、遺物包含層（灰褐色土厚さ30cm～35cm）、地山（黄褐色土）で、調査区東南隅のみ部分的に地山上層に黒色土がみられた。

遺構はすべて地山面で検出している。調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓２基、土坑１基、奈良時代の柵列１条、竪穴住居６棟、掘立柱建物11棟、溝６条、土坑４基、鎌倉時代の掘立柱建物２棟、溝３条、井戸１基、土坑１基、土坑墓２基、時期不明の掘立柱建物１棟、井戸１基を検出した。

	遺構の種別					
	ＳＡ	ＳＢ	ＳＤ	ＳＥ	ＳＫ	ＳＸ
弥生時代					7202	7200　7201
奈良時代中期	7209	7205　7208　7210　7215 7216　7219　7222　7225 7226　7227　7228　7229 7230　7231　7232　7233 7234	7223　7224 7236　7237 7238　7239		7214　7217　7218 7220	
鎌倉時代		7207　7221	7203　7211 7212	7204	7213	7240　7241
時期不明		7235		7206		

第３表　　時期別遺構分類表



第６図　調査区位置図（１：2,000）

(1) **弥生時代中期の遺構**　　方形周溝墓２基、土坑１基がある。

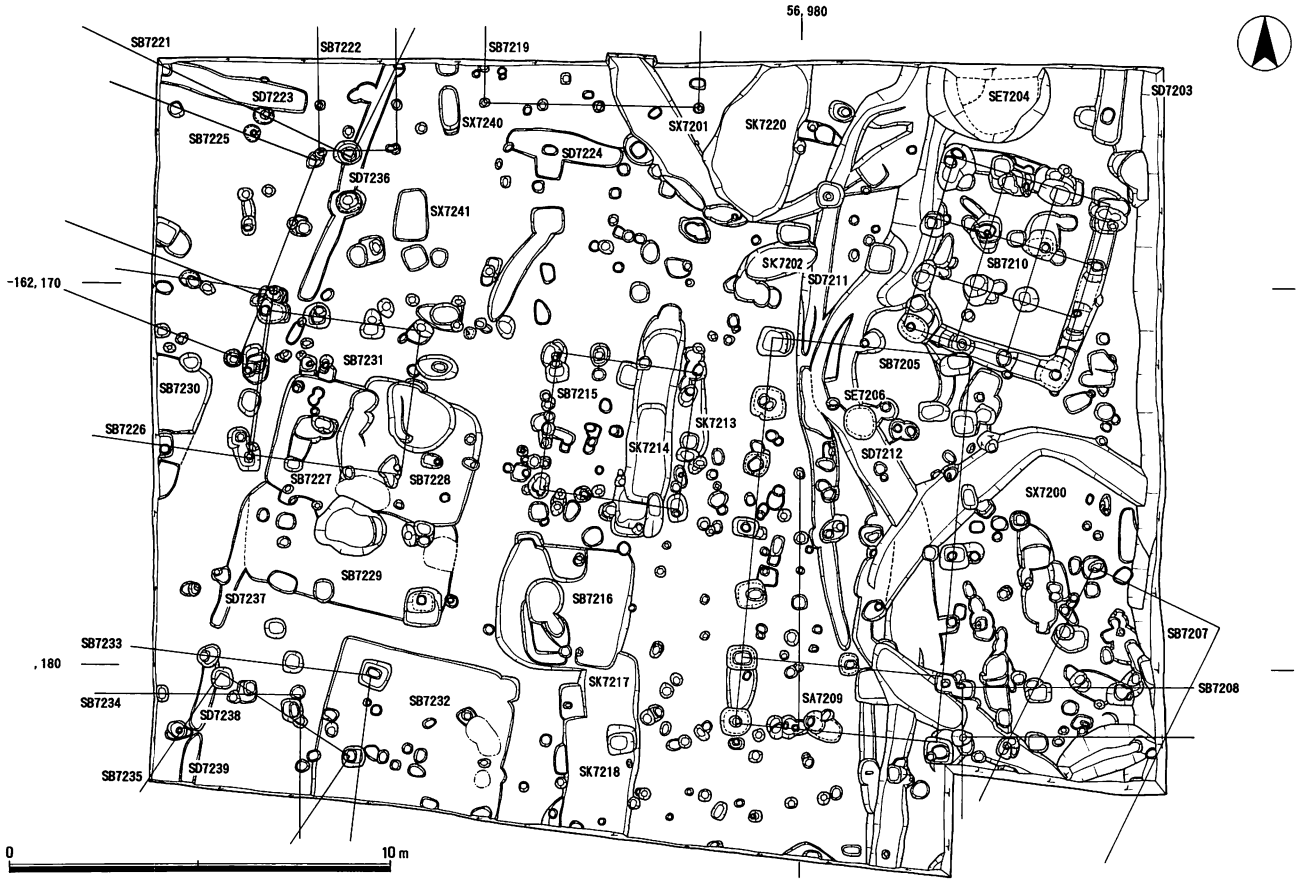
ＳＸ7200　　調査区東南隅で検出した方形周溝墓で、周溝の内肩間で北東－南西辺は約７mだが、北西－南東辺は調査区南東隅にかかるため明確に検出し得なかった。溝の幅は、各辺中央部が幅広く1.3 m、各コーナー部分の溝幅は狭く0.7mとなる。周溝の北コーナーで弥生土器の壺（10）が口縁部を北に横転した形で出土した。また西のコーナー付近で同じく弥生土器の壺（９）が出土している。

ＳＸ7201　　調査区の北端に南西辺と東南辺の周溝を検出した方形周溝墓で、ＳＸ7200と同じく溝中央部で1.3mと幅広く、南のコーナーで0.5mと溝幅が狭くなる。推定規模は北東－南西辺で約６m、北西－南東辺については確認できていない。ここでは、弥生土器の壺が出土している。北から（５）、（６）、（７）の順で各々1.5mの等間隔で並んでおり、（５）は調査区壁面で確認した時点で既に破損していたが、（６・７）は完形でいずれも横倒しになっていた。また据えられた様子は窺えない。

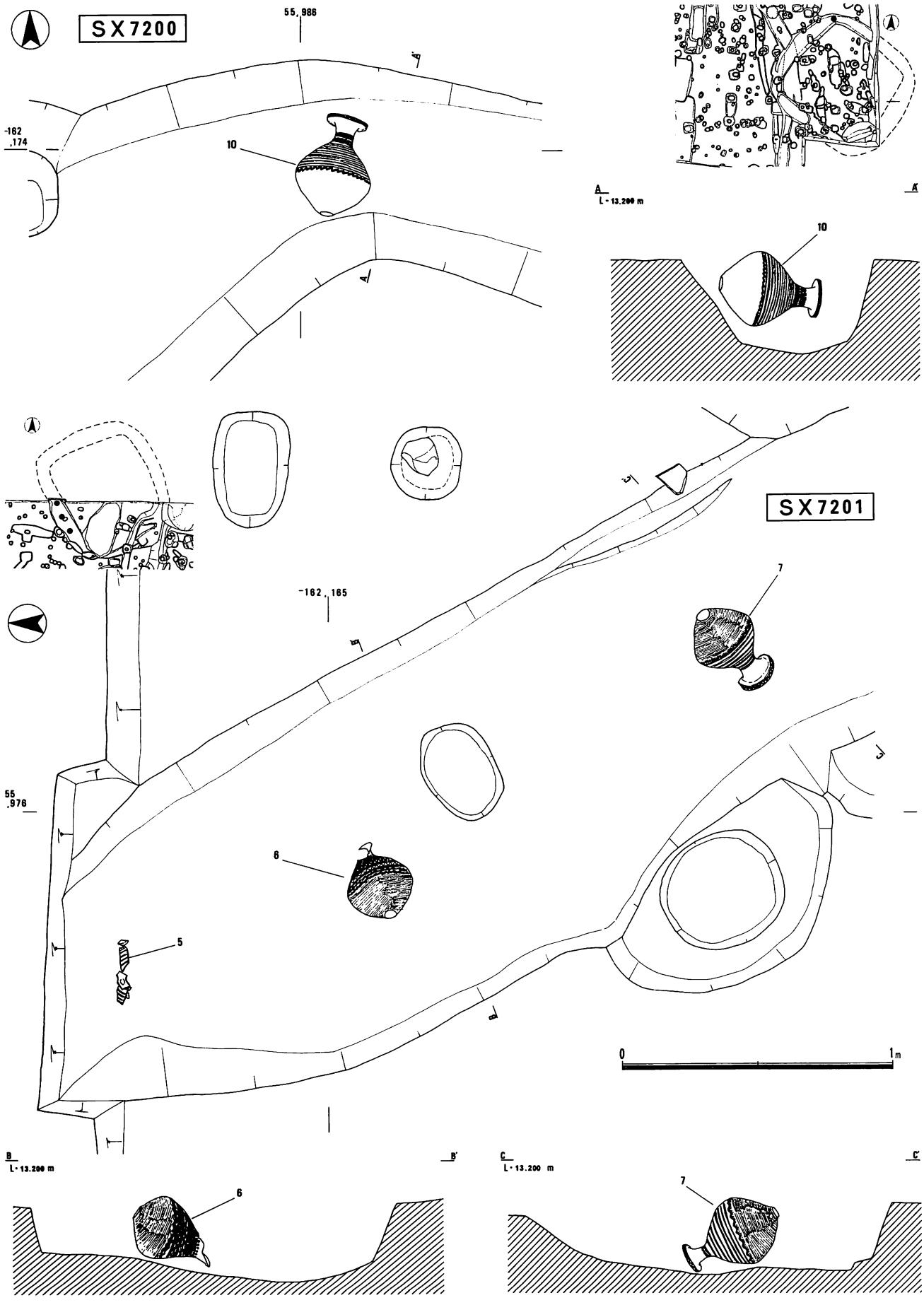
ＳＫ7202　　この土坑からも破損はしていたが完形に復元できる弥生土器の壺（８）１個体分を出土している。長径2.0m、幅90cmを呈する長楕円形土坑である。

(2) **奈良時代中期の遺構**　　竪穴住居６棟、掘立柱建物11棟、柵列１条、溝６条、土坑４基がある。

ＳＢ7205　　調査区東半で検出した５間×２間南北棟の掘立柱建物で、南面に庇をもつものと考えられる。柱掘形は一辺70cm～80cm、柱の直径は30cm～40cmで、調査区内では比較的大型の建物といえる。また若干方位を違えるものの、北妻通りの延長と北桁行筋を、ＳＢ7226に南妻通りをＳＢ7233にほぼ揃えているのでこれらは同時に建てられていた可能性が考えられ、後述のＳＢ7210より新しく建てられたものと思われる。



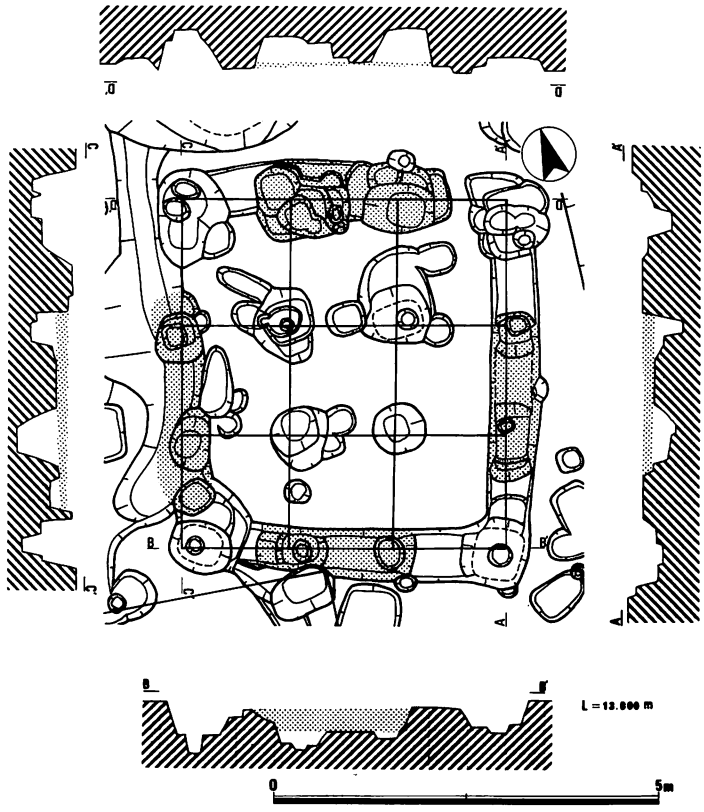
第７図　遺構実測図（１：200）



第8図　SX7200・7201　遺物出土状況実測図（1：20）

次数	遺構番号	建物時期	規　模	種　別
64-3	SB4675	奈　良	3×3	総　柱
66	SB4410	奈良後	4×2	側柱総布掘
68	SB4560	奈良前	3×3	総　柱
68	SB4561	〃	(1)×−	(総柱)
83	SB5800	平安初	5×2	側　柱
85-8	SA6280	飛　鳥	(7)	柵　列
88	SB6238	奈良後	3×3	総　柱

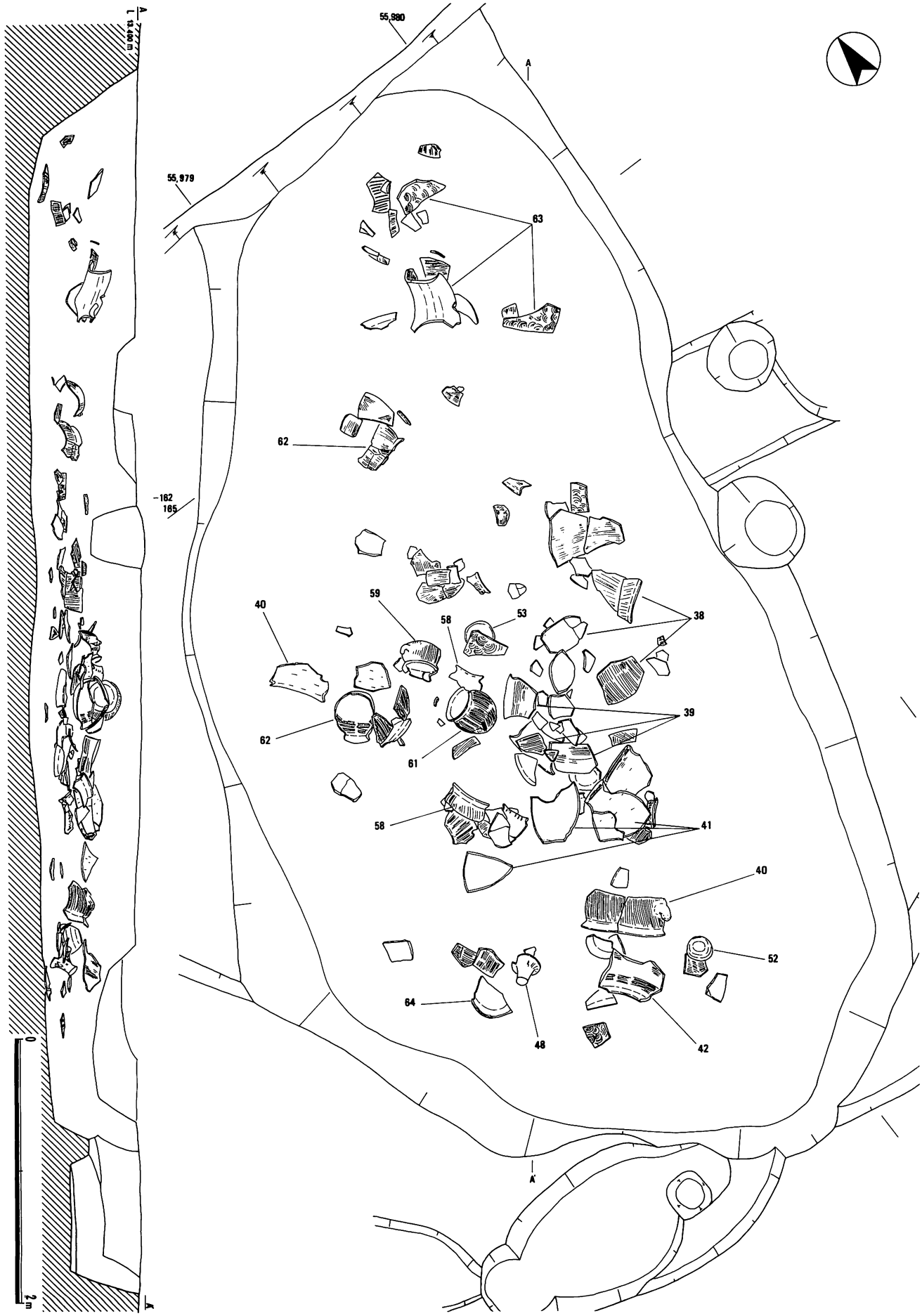
第4表　斎宮跡布掘状掘形建物一覧



第9図　ＳＢ7210　遺構実測図（1:100）

ＳＢ7210　調査区の北東隅で確認した3間×3間の総柱建物で、桁行1.5 m前後、梁間1.4 m等間である。この建物は、深さ10～12cmの溝が側柱を一周巡る布掘状掘形をもつ（ただし北東隅のみ陸橋として溝を連結させない箇所をつくる）もので、斎宮跡でも8例みられる布掘状掘形をもつ建物の一例ではあるが、他例と特に異なるのは、一段下げた溝の中にさらに各辺中央2本分の柱掘形を溝状に10cm～25cm下げてから1本ずつの柱掘形を各各つくっていることである。斎宮跡でこれまで検出している布掘状掘形をもつ建物は、上表のとおりである。今回のように三段構えの布掘状の掘形をもつ例は他県の検出例を併せて考えても初めてである。また布掘状掘形から多量の土錘が、北西隅でＳＸ7201と切り合っているため柱掘形内からは弥生土器壺の比較的大きい破片(24)が出土している。

ＳＫ7220　調査区北辺中央、方形周溝墓ＳＸ7201に重複して検出した長楕円形の土坑である。底部までの深さは40cmであるが、遺構面から約20cmのところで直径60cmの半円形に囲む石組みがみられる焼土面が現れた。その焼土面上からは鎌倉時代の遺物とフイゴの羽口が出土し、焼土中に第10図の様に奈良時代中期の土器が散在していた。その焼土を除去しながら遺物の状況を記録していったところ、遺構面から約30cmで底が現れたが、土坑底部まで焼土は達していなかった。出土遺物は、土師器杯・高杯・竈と須恵器杯・杯蓋・平瓶・線刻文字のある甕、大型円面硯・甕・鍋などがある。この奈良時代の土坑の出土遺物には、完形に復元できるものが極めて少なく、その出土状況、遺物の復元後の状況からみても廃棄土坑であろうと考えられる。また焼土面はこの土坑の上に石組みを伴った屋外炉のような施設を後世につくったものと思われる。



第10図　ＳＫ7220　遺物出土状況実測図（１：20）

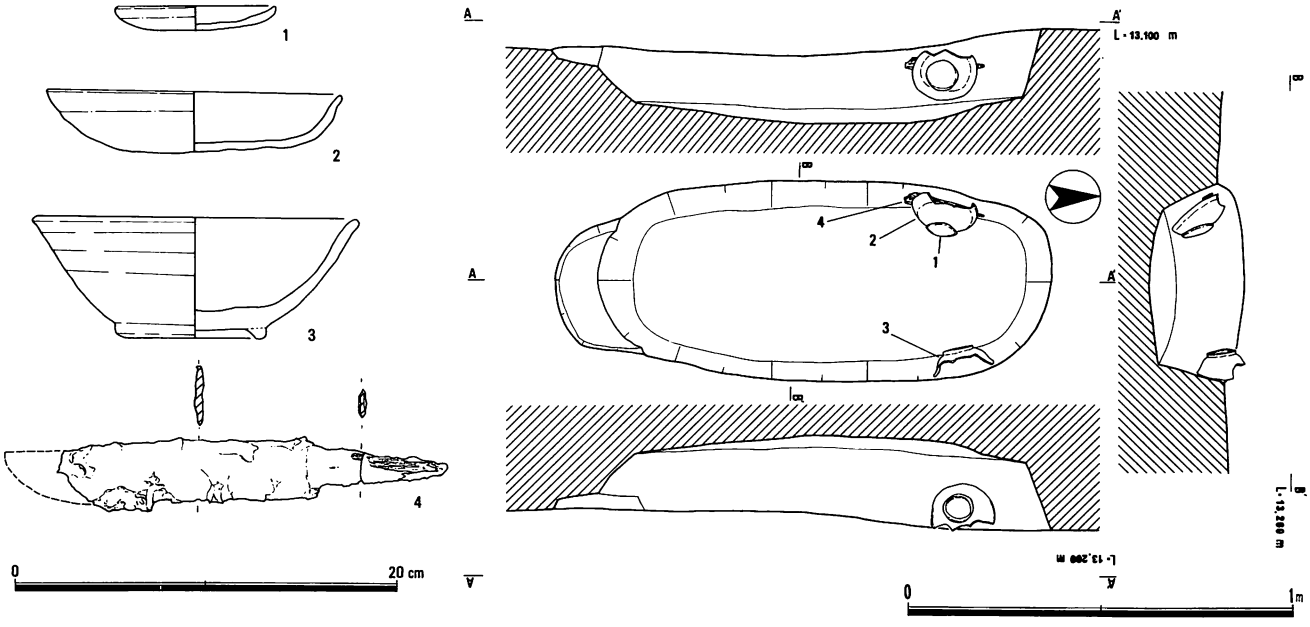
ＳＫ7214　調査区中央にある長径2.6m、短径1.4mの土坑である。遺構面からの深さは60cmとやや深いもので、出土した遺物には土師器・須恵器の甕類が多く、またフイゴの羽口や鉄滓が多く出土している。埋土中に焼土はみられなかった。

ＳＤ7223・7224・7236～7239　幅40cm～60cm、深さ９cmの浅く断続的に続く溝で、ＳＤ7223・7224とで東西辺を、ＳＤ7236～7239までの溝で南北辺を構成した、区画線として敷かれたものと思われる。東西辺でほぼＥ20°Ｓ、南北辺でもほぼＮ20°Ｅと直交する傾きを示し、この方位にＳＢ7225が棟方向を合わせて建つものと考えられる。

(3) 鎌倉時代の遺構　掘立柱建物２棟、溝３条、井戸１基、土坑１基、土坑墓２基がある。

ＳＥ7204　調査区北辺に接して検出した井戸で、北側３分の１ほどは調査区の外へ続いているため検出できていない。最大径3.2mで、25cm下げたところで直径を2.5mに狭め、壁面はオーバーハング状に抉られているため、遺構面から約1.2mまで下げて掘削を止めた。出土遺物は、鎌倉時代の土師器皿、山茶椀が多量に入っていた。

ＳＸ7240　長径1.2m、短径0.5mの長楕円形の土坑墓である。土坑の北寄り東壁面に山茶椀（３）が、同じく北寄り西壁面に鉄製小刀（４）が壁面に貼りついた状態でその上に土師器の皿（２）、さらにその上に土師器小皿（１）が重なって出土した。この土坑墓上面あるいは周辺からは多くの青磁・白磁が出土している。土坑の形状は異なるものの副葬品の種類としては斎宮駅北側周辺で検出される土坑墓と類似している。



第11図　ＳＸ7240　遺構（１：20）・遺物（１：４）実測図

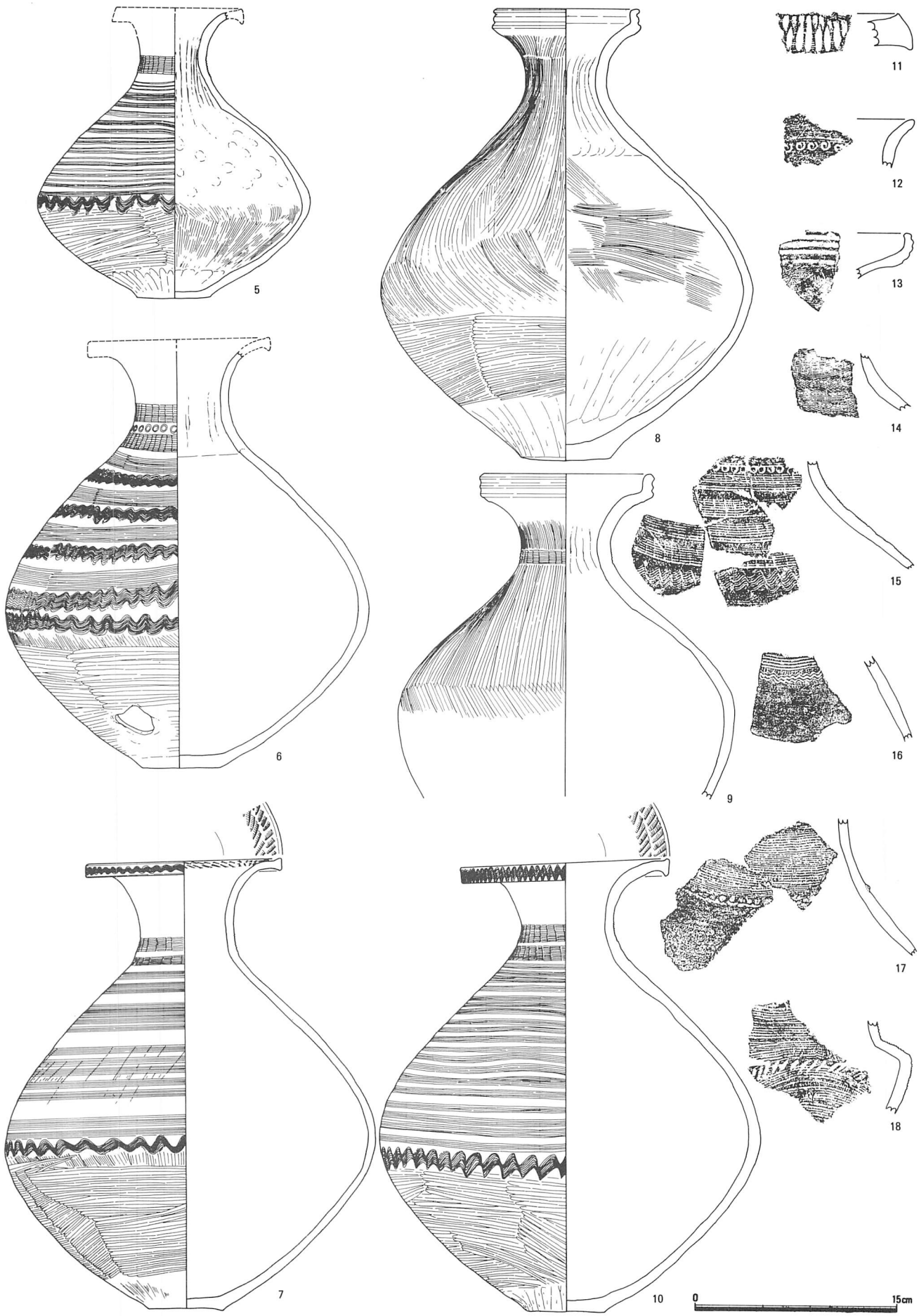
ＳＸ7241　ＳＸ7240の南西1.5mに隣接している、長径1.4m、幅0.8mの隅丸長方形の土坑墓である。ＳＸ7240に比べ遺構面から底部までの深さが12cmと浅いが、土師器小皿が２枚～３枚ずつ重なった状態で、十数枚出土した。その他に副葬品と思われる遺物はないが、ＳＸ7240のすぐ南側に位置することからこのＳＸ7241も土坑墓と考えられる。周辺ではＳＸ7240と同じように、青磁・白磁が多く出土している。

3．遺　　物　主に、遺構に伴って出土した土器についてその概要を述べる。

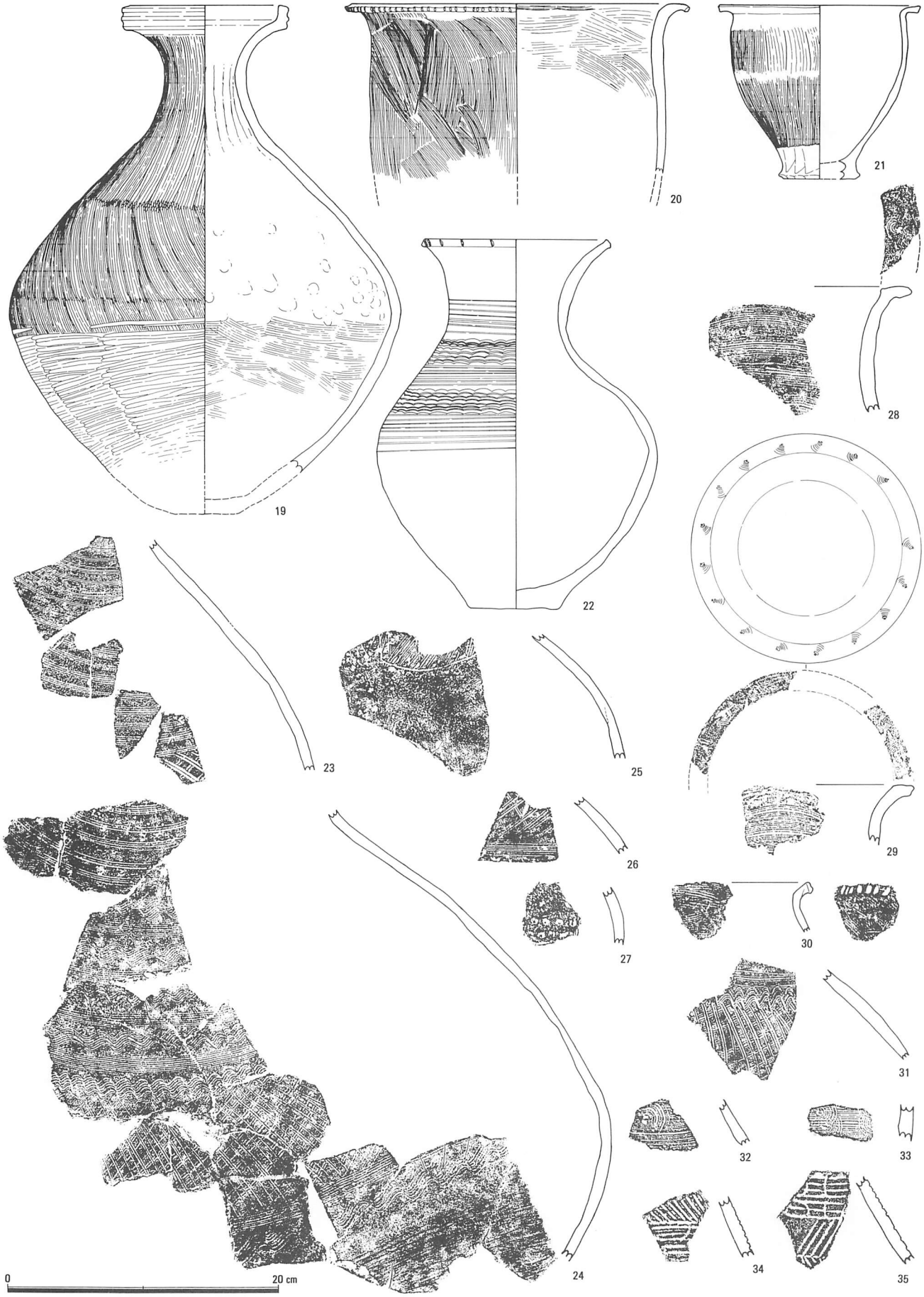
(1) 弥生時代の遺物　（５～７）はＳＸ7201の出土土器である。（５）は口縁端部を欠損しているものの、胴部最大径20.2cm、底部径5.5cm、残存高21.4cmと今回出土した中では小型の壺で、残存状況も良好である。頸部に簾状文１段、体部上半は櫛描横線文12段、波状文１段、体部下半にヘラミガキ、内面にはタテハケがみられる。（６）は（５）の南1.5ｍで出土したもので、同じく口縁端部を欠損している。残存高31.0cm、胴部最大径27.2cm、底部径5.6cmの壺で頸部に簾状文１段・竹管文１段・簾状文１段、体部上半に櫛描横線文と波状文を交互に４パターン、最後に２段の波状文を巡らせる。下半にはタテハケの上から横方向のヘラミガキを施す。胴部内面はハケ、頸部以上はナデである。さらに（６）の南約1.5ｍに出土した（７）は、器高33.7cm、口径14.6cm、胴部最大径27.6cmの壺で、口縁内側に連続刺突文２列、口縁側面に波状文１段、頸部に簾状文２段、体部上半にタテハケの上から櫛描横線文12段、波状文１段、下半に同じくタテハケ上から横方向のヘラミガキを施す。胴部内面はハケ、頸部以上はナデである。ＳＫ7202出土の（８）は器高33.8cm、口径10.6cm、底部径6.4cm 、胴部最大径が27.6cmの壺で、口縁部外面に凹線文、頸部以下体部上半にかけてタテハケ、下半は横方向のヘラミガキ、底部から4.4cm 上方のみ縦方向のケズリを施す。内面は底部に縦方向のケズリ、胴部に横方向のハケ、頸部にはシボリ痕がみられる。（９・10）はＳＸ7200の周溝内、北と南の隅で出土した壺で、（９）は口径12.9cm、胴部最大径25.3cm、残存高24.9cmで周溝南隅より出土した。また調整が（８）に類似しており、頸部に１段簾状文が入り、胴部最大径部分でタテハケの方向を右下へのハケへ変換している他は（８）と同じ構成である。(10) はＳＸ7201の（７）とほぼ同寸大、酷似した文様構成のもので、櫛描横線文が19段とやや多く櫛描横線文下のタテハケがみられない他は（７）と同じである。壺体部のみしか復元できなかった（23・24）はいずれもＳＸ7201の遺物であったものが後世のＳＢ7210、ＳＫ7220に混入したものと考えられる。櫛描横線文を12段あるいは櫛描横線文と波状文を交互に５パターン繰り返したあとに櫛描の斜格子文を胴部上半まで施すものである。その他包含層出土の遺物として（25）は壺の体部に線刻で絵を描いたようにみえる模様をもつ。残念ながら破片が約10cm四方の小片であるために全容を窺うことはできない。(28・29) は口縁上面端部に類似した施文を行うもので、(28) は幅2.4cmの端部上面に扇形文と波状文を施す。(29) は幅1.5cmの端部上面に同じく扇形文を2.8cm等間隔で口縁全周16箇所に施文したものと推定される。また櫛描横線文と扇形文の組み合わせ（32・33)、疑似流水文と斜行文（山形文の一部か）を施した破片（34・35）がみられる。

(2) 奈良時代中期の遺物　ＳＫ7220で出土した土器を（36～64）までにあげるが、完形のものは２個体しかなく、いずれも欠損品ばかりである。出土状況からみても、いずれも廃棄された土器であると思われるが、(63) の須恵器大型甕の口縁部内側に焼成前に線刻したと思われる文字がみられるが、判読は不可能である。

(3) 特殊遺物　(64) の須恵器円面硯は硯面３分の１のみ残存し、推定される硯面の直径は18.4cmである。脚部は欠損しているため推定復元をしているが、脚部透かしについては、上面幅が1.5cm、透かし毎の間隔は2.0cmで計17本の方形透かしが入るものと考えられる。斎宮跡で出土した中でも大型硯の部類に入る。その他、製塩土器１点、土師器ミニチュ



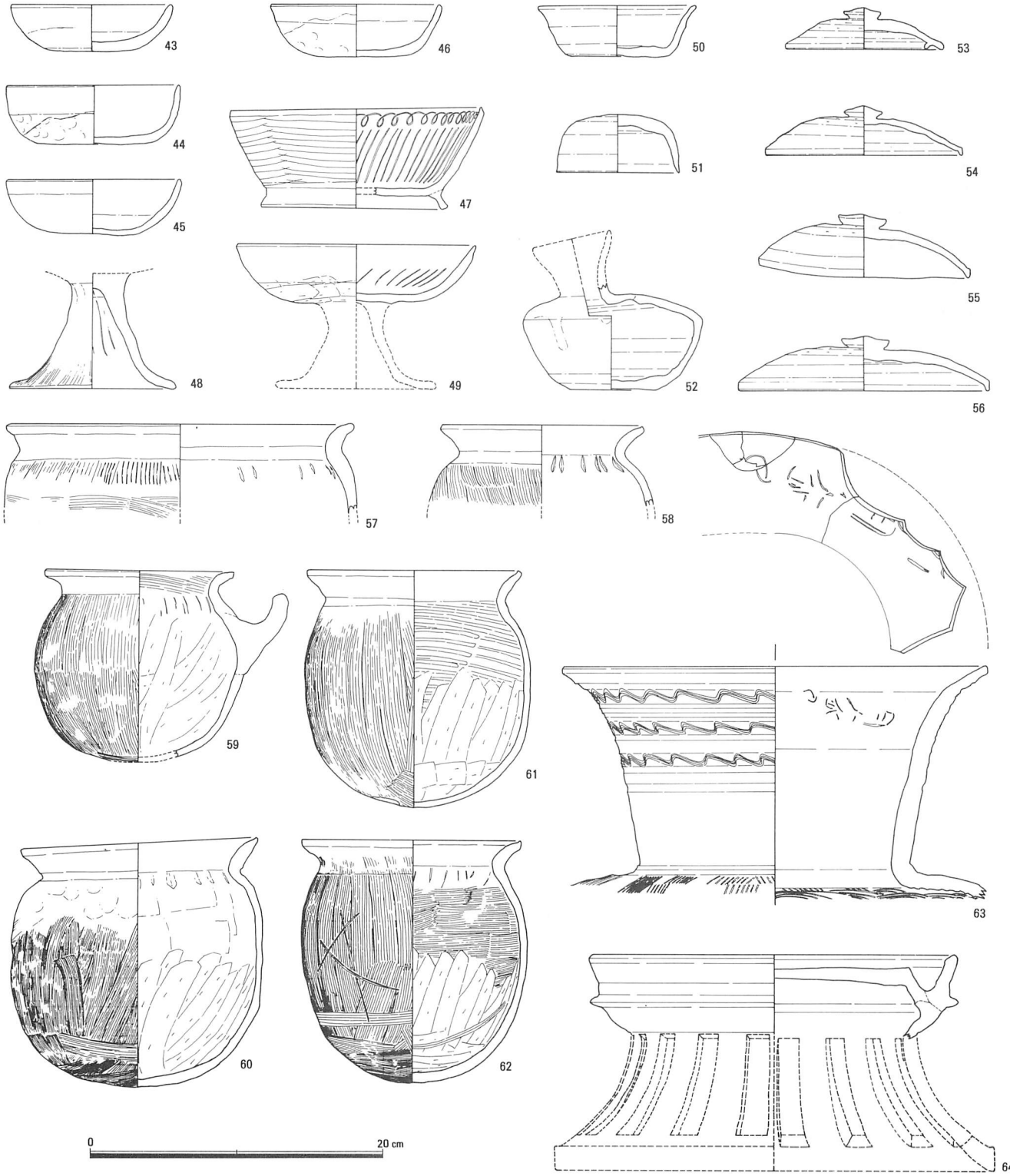
第12図　出土遺物実測図　ＳＸ7200：５～７、ＳＫ7202：８、ＳＸ7201：９・10、その他：11～18



第13図　出土遺物実測図　ＳＢ7210：24・26・27・31、ＳＫ7220：23、ＳＢ7215：33
その他：19～22・25・28～30・32・34～35

第14図　出土遺物実測図　ＳＫ7220

ア１点、墨書土器山茶椀（「大」か）１点、ＳＫ7220及びＳＫ7214から出土したフイゴ羽口７点、石製品として石鍋・スクレイパーなどがある。土錘は36点と多量に出土しており、そのうち22点がＳＢ7210から出土していて、土錘は主に幅0.8㎝～1.2㎝前後、長さ5.5㎝～5.8㎝の細口のものである。今回鎌倉時代の遺構はあまり多く検出されなかったが、青磁が24点、白磁が16点と、斎宮跡全体のなかで比較的多く輸入陶磁器を出土する古里地区においても調査面積に比して高い出土率を示すものである。青磁は主として龍泉窯系のもので、白磁には壺の底部破片２点、四耳壺とみられる口



第15図　出土遺物実測図　ＳＫ7220

縁破片が１点ある。ＳＢ7226上面あたりから、須恵器の獣脚であろうと思われるものが１点出土しているが、脚中央部径3.8㎝、底部径5.0㎝、残存高9.0㎝を測る。ヘラ状工具によると思われる５面の面取りを施し、粗略ながら爪先の表現がなされている。かなりの大型製品の脚部であろうと考えられる。緑釉陶器は今回の調査区内からは１片のみが出土している。

４．まとめ　今回の調査で明らかとなった方形周溝墓と飛鳥・奈良時代の様相について概述する。

(1) 方形周溝墓の分布　祓川段丘上の台地縁辺部の今回調査地周辺における方形周溝墓の分布状況をみると断片的な調査しか行われていないが、平成５年度第102－５次調査においてほぼ同規模とみられる弥生時代中期の方形周溝墓ＳＸ7100が検出されている。そのほか古里地区・斎宮歴史博物館周辺にも同時期の方形周溝墓群の分布がみられるが、この一群は、いずれも四隅に陸橋をもつもので、第107次及び第102－５次調査地周辺のものとは形状の上でも、また分布地においても、古里地区の中でもまた別の一群である方形周溝墓・集落を形成していたものと思われる。この二群の間約240ｍの間には、古墳時代になると円墳・方墳約40余基からなる塚山古墳群が形成されることになる。

(2) 飛鳥・奈良時代の柵列　本調査の目的である、飛鳥・奈良時代の柵列による囲みの実態であるが、残念ながら今回その囲みを構成した柵列本体の検出はできなかった。調査で確認した掘立柱建物のうち、正方位にのせた奈良時代の掘立柱建物・柵列はほぼ調査区内全域に分布しており、正方位にのせた柵列等の区画施設によってこれらは画される可能性が高いと考えられる。一方、Ｎ31°～32°Ｅの方位に揃える掘立柱建物は今回の調査区では１棟しか検出しておらず、その方位の区画施設の影響を直接的に受けない場所に建つ建物であろうかと思われる。

第58－４次調査のＳＡ4281・4282と第85－８次調査のＳＡ6280でつくる約147°に開いた飛鳥時代の囲み、あるいは第30次調査のＳＡ1674と第100次調査のＳＡ6940等でつくる約149°に開いた奈良時代の囲み、いずれの柵列からも正方形あるいは長方形の平面構成をした施設を予測するのは困難である。

そこで、囲みの一角にこうした鈍角の開きをもつ不正多角形の囲みを構成していたか、あるいは各々独立した柵列で未調査地にそれぞれの対辺となる柵列があるのかということが考えられる。いずれにしても柵列の規模が決して小さいものではないので、構成される施設も極端に小規模なものを考えるのは不自然であるということと、構成される施設が必ずしも正方形もしくは長方形という直交する対辺ばかりで構成されているのではなく、一部に不正多角形の辺をもっているかもしれないという可能性が皆無ではないということが考えられる。

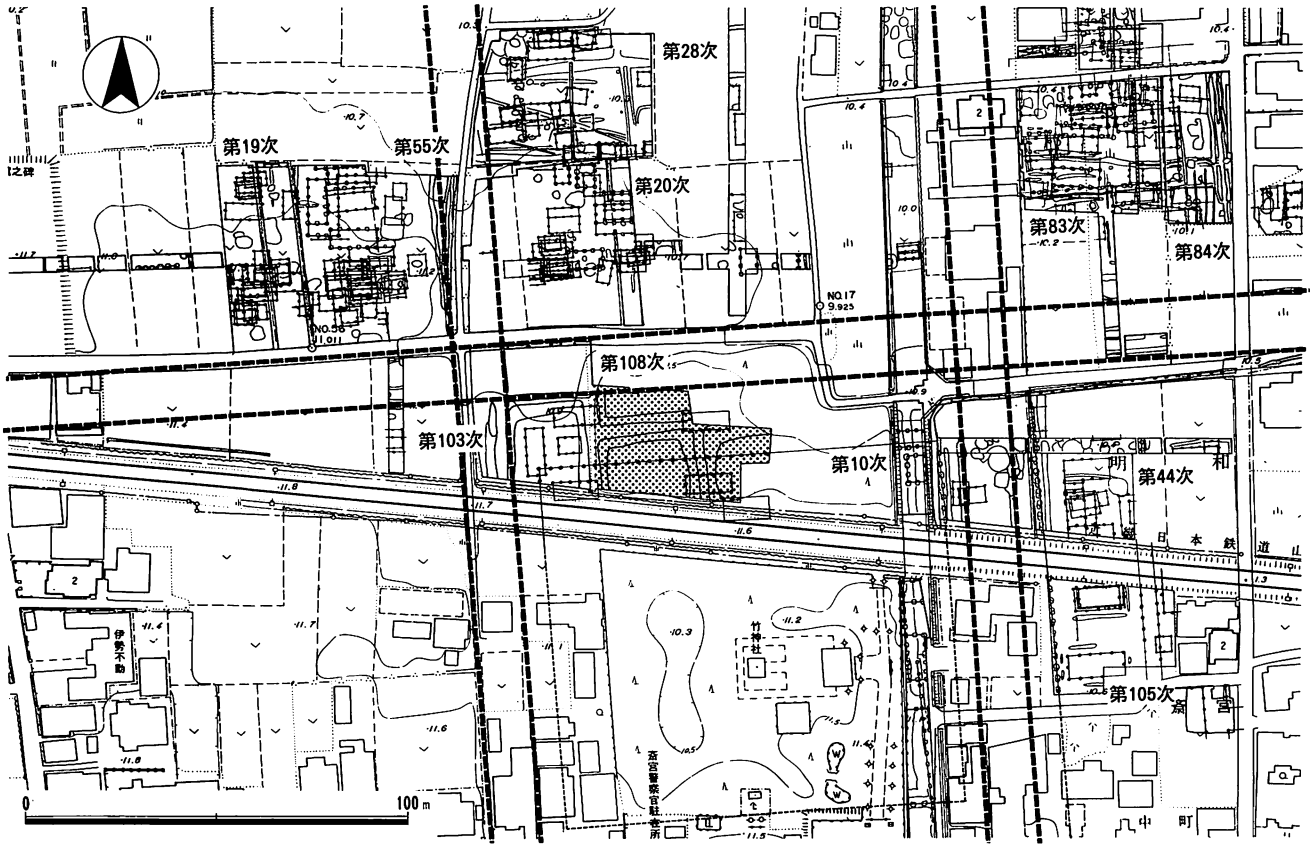
以上のことから、調査区周辺の飛鳥・奈良時代の柵列による囲みを解明する上で、面的な調査による十分な資料がまだまだ不足しているために、実態の様相が不明確のままであるが、今後もさらに計画的な調査を実施していくことが、この地域を解明していくためにも必要となってくるものと思われる。今後の調査による資料の蓄積を待って検討することにしたい。　（赤岩　操）

Ⅳ．第108次調査

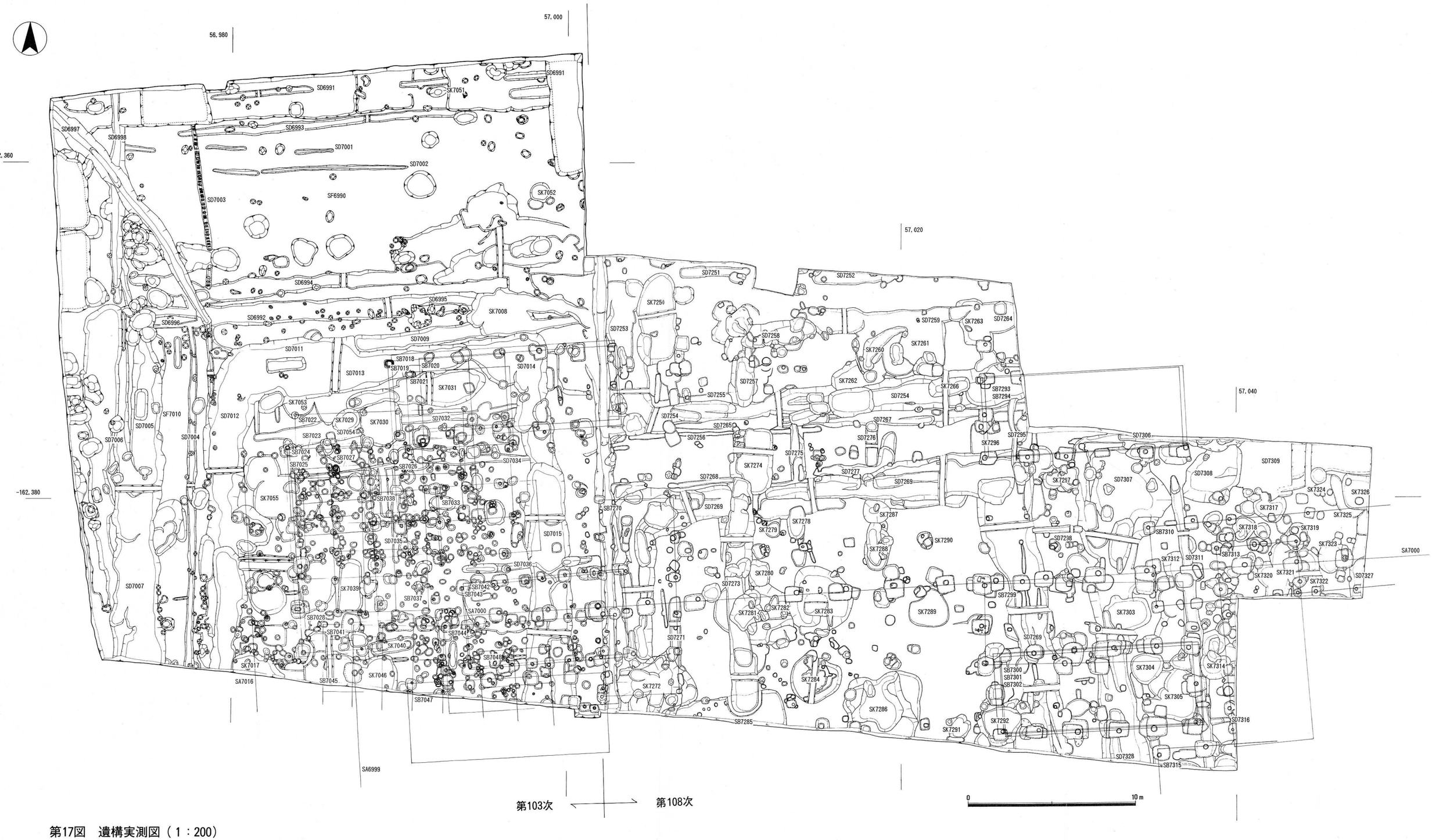
（６ＡＥＱ－Ｃ　柳原地区）

１．はじめに　平成６年度最後の計画調査は、昨年度に実施した第103次調査の東に続けて調査区を設定した。史跡東半に想定される一辺約120mの方形区画を基調とする平安時代前半の方格地割において、その中心部分と想定される地域には大規模な柵列（板塀？）によりさらに内側が画される区画が存する事が明らかとなってきている。その中でも第44次・第98次・第105次調査などによって明らかになりつつある鍛冶山地区の区画（鍛冶山西ブロック）では他に例をみない平安時代初期前後の東西で約165mの規模の柵列、さらにそれを建て替えて造られた東西約118mの柵列の区画が発見され、その内部では規則的な配置を持ち、斎宮跡のこれまでの調査で最大級のものも含む大型の掘立柱建物がみられるなど、斎宮跡25年の調査の中でも極めて重要な区画であり、平安時代前半の斎宮内院の一画である可能性が考えられている。

それに対して、この西に隣接する牛葉東ブロックでも第44次調査の成果を受けた第103次調査で、やはり大型の柵列の北西隅の部分が発見され、第10次調査の成果とも合わせて東西107m×南北95m（360尺×320尺　１尺＝29.6cm～29.7cm）の柵列区画が現在の竹神社の社殿地を囲むように巡ると推定されるようになった。これは鍛冶山西ブロックに次ぐ規模のものであり、また明治44年に合祀された式内社竹神社あるいは近世以前に溯っても参宮街道沿いにあって山林として残されてきた特殊性を窺わせる区画である事から、この区画もまた平安時代の斎宮を考える上で極めて重要なポイントであると考えられる。



第16図　調査区位置図（１：2,000）



第17図　遺構実測図（１：200）

今回の第108次調査は、この時検出された柵列ＳＡ7000の東の延長を確認するとともに、想定されるＳＡ7000の東西正中線付近の状況を明らかにする事を目的としている。調査期間は平成６年10月11日から平成７年３月３日にかけて約1,100㎡を対象とした。調査前は樹木の閑散な荒地で、特に調査区西半には笹類が緊密に繁茂しており、樹木根と相まって人力による掘削が困難であるため、表土部分を重機により除去したのち調査作業に入った。調査区は隣地境界に沿った鍵手状で、現況は若干の起伏はあるものの標高約11.5m前後のほぼ平坦な地形で、西に向かってごく緩やかに傾斜している。包含層は調査区東半で厚く、遺構面は地表から約0.5m～1.0m下で検出される礫をわずかに含む明赤褐色～黄色の重粘性の基盤土（地山）で捉えた。基本的な層序は上から１：黒色砂壌土（山林表土）、２：地山構成土を含む黒色系シルト質壌土と褐色系砂質壌土（包含層）、３：地山となる。この包含層下に調査区東半では土器片を含み上部撹乱の著しい黒褐色砂質壌土が30cm～40cmの厚さで堆積しており、包含層Ⅱとして分離している。ある時期の造成層である可能性があるが、上面では遺構を確認する事はできなかった。

２．遺　構

遺構は奈良時代後期から平安時代末期まで及び掘立柱建物14棟、竪穴住居１棟、柵列１条、溝28条、土坑39基を検出した。なお、調査区東端には多数のピットが分布しており、より多数の建物が存するとみられるが、この確定は今後の調査に拠りたい。遺構は調査区西端と東半部に密で、中央部で疎である。遺構検出面の標高は10.2m～10.5mで南半は概ね平坦だが、北半は北東に向かって緩やかに傾斜している。

(1)　奈良時代後期の遺構

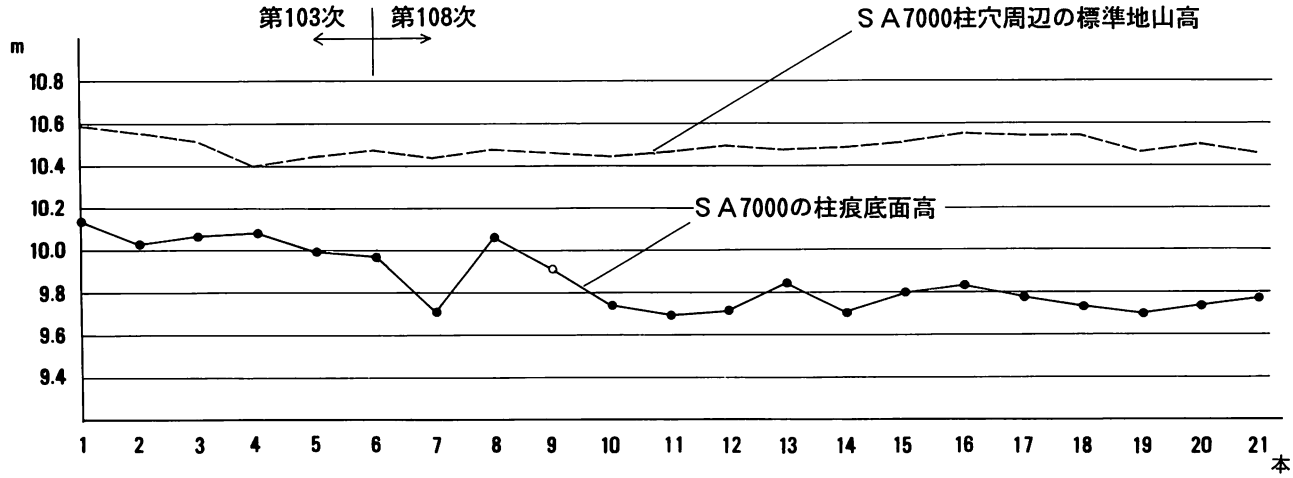
竪穴住居１棟を検出したのみである。

ＳＢ7285　調査区南西端で検出したＳＢ7285は、南３分の２以上が調査区外に延びていくが、一辺約7.0mの規模のものと考えられる。

柱穴やカマドなどの施設は確認されず、貼床構造も認められなかった。出土遺物に

		遺構の種別			
		ＳＢ	ＳＤ	ＳＫ	ＳＡ
奈良時代後期		7285			
平安時代	初期	7302　7315	7252	7260　7261	7000
	前Ⅰ期	7047　7293 7294　7300 7301	7251　7257　7258 7259　7273　7275 7276　7298　7316	7296	
	前Ⅱ期	7299	7253　7264　7271 7295	7250　7262　7263 7274　7278　7279 7280　7287　7288 7290　7325	
	中期	7270　7310		7319　7320　7321 7322　7323	
	後Ⅰ期	7042　7043 7044　7313	7254　7269　7307 7308　7309　7327	7272　7281　7282 7283　7284　7286 7291　7292　7297 7317　7328	
	後Ⅱ期			7289　7312　7314 7318　7324	
	末期		7255　7256　7265 7268　7277　7311	7303　7304　7305 7326	
時期不明			7267　7306		

第５表　時期別遺構分類表



第６表　ＳＡ7000の柱痕底面高と地山の相関

は土師器椀・皿・鉢・甕や須恵器長頸瓶・杯・甕などがあり、土師器皿にはｂ手法による調整をもつものがある。平面の規模は第103次調査のＳＢ7045よりやや大型だが、ほぼ同時期のものであろう。

(2)　平安時代初期～前Ⅰ期の遺構　　掘立柱建物７棟、溝10条、土坑３基、柵列（板塀）１条がある。

ＳＡ7000　　当地区においてこの時期最も早く成立すると考えられる遺構は第103次調査区から延び、牛葉東ブロックの北辺を画するＳＡ7000である。今回15間分検出し、合計20間分を検出した事になる。柱穴の重複はなく、建て替えられた痕跡は認められない。この間柵列に切れ目はなく、門遺構は明確ではない。柱穴は一辺1.1m～1.3mの掘形に直径約30cmの柱痕跡を持つ大型のものである。検出分の長さから柱間寸法の平均を取ると約2.97mになり10尺等間である。第６表はＳＡ7000の柱痕跡底部の標高と柱掘形周辺の平均的な地山高の相関を表したものである。これによると地山高でも東へ向かってやや低くなっていくが、北西隅の柱穴が最も浅く、第108次調査区に入るものからやや深くなっていき、地山面との高低差は70cm～80cmある事が分かる。ＳＡ7000の延長である第10次調査区では柱穴底面高約9.6m、地山との差約50cm、柵列北東隅の第44次調査区では柱穴底面高約9.3m、高低差約50cmである事から、東西長36間、約107mとみられる長大な柵列の辺中程では柱を深く埋設していることが窺われる。また途中ＳＫ7281に撹乱されているものの、東より７本目から８本目の柱穴底面高に変化がみられる。この部分に接して当該期の建物はないため、確定的ではないが冠木門あるいは棟門などがあった可能性もあろう。

ＳＢ7315　　このＳＡ7000に伴うようにして建てられたとみられるものとして、調査区東南隅のＳＢ7315がある。一辺1.0m～1.2mの大型の柱穴を持つもので、一間分のみの検出である。東隣部の調査の成果に期待したいが、柱間９尺、東西４間の建物と推定すると、ＳＡ7000の中央にあたる柱穴と東西正中線を共有する可能性がある。

ＳＢ7302　　５間×２間の東西棟で柱間８尺の大型建物である。この西妻柱筋は、やはりＳＡ7000の西から13間目の柱穴と筋を揃えており、以後ここでＳＢ7301→ＳＢ7300の順で３回の建て替えが行われている。その度に極わずかに柱穴の位置が移動するが、この３回の建て替えのうちに建物の配置の段階的な変化が窺われる。

建物の変遷　①　ＳＢ7302がＳＡ7000の内側に単独で建てられる。

②　ＳＢ7302がＳＢ7301に建て替えられ、この北側にＳＡ7000を挟んで西妻柱筋を揃えてＳＢ7294が同一規模で建てられる。

③　ＳＢ7301がＳＢ7300に、ＳＢ7294がＳＢ7293に建て替えられ、ＳＢ7300の西側にややずれるものの、概ね北桁行筋を揃えてＳＢ7047がやや柱穴の小さい５間×２間の規模で建てられ、３棟が並立する。

以上の変遷が平安時代初期から前Ⅰ期の間にあったとみられる。その間ＳＡ7000は途中までは存在していたと考えられるが、③の段階にあたる頃に後述の理由により、廃絶していたとみられる。

ＳＤ7252　溝には初期のＳＤ7252がある。短く断続しているが、第103次調査のＳＤ6992に続き、方格地割の東西道路ＳＦ6990の南側溝となるものである。折戸10号窯式に相当する須恵器の台付杯が２個体出土している。

逆Ｌ字形を呈する溝群　次に前Ⅰ期の後半に掘削されたとみられる逆Ｌ字形を呈する一連の溝、ＳＤ7257・7258・7259・7273があげられる。幅1.3m～1.8m、深さは最深部およそ60cmで、南端は調査区内で止まっており、東端は前Ⅱ期のＳＤ7263、ＳＫ7264が重複しているが、浅くなりつつもさらに調査区外へ延びていくものとみられる。その形状から区画溝と考えられるが、先述の③の段階に掘削されたとみられ、ＳＢ7300・7293を囲むようになっている。このうちＳＤ7273はＳＡ7000と重なっており、ＳＫ7281のため重複関係は明らかではないが、ＳＡ7000の廃絶に伴って掘削されたとみる事ができる。前Ⅰ期～前Ⅱ期の土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、前Ⅱ期の古段階を主体としている。前Ⅱ期の終わりには埋没したものとみられる。

ＳＤ7298・7316　ＳＤ7298・7316は出土遺物がほとんど無いが、埋土が黒色土でＳＡ7000柱穴埋土に近く、前Ⅰ期頃にはあったものと考える。幅約40cm、深さ30cm～40cmの逆台形状で、ＳＤ7298は第103次調査のＳＤ7036と対応する可能性がある。

ＳＤ7251・7275・7276　他にＳＦ6990の南側溝の一部とみられるＳＤ7251や溝心々間約4.5mを隔てて平行するＳＤ7275・7276がある。小規模な溝で性格は不明だが、土師器、須恵器が比較的多量に出土している。

ＳＫ7260・7261　土坑では初期のＳＫ7260・7261がある。いずれも直径３m、深さ30cm～40cm程の不整形でＳＫ7261が先行する。両者から土師器杯類を中心に当該期の多量の遺物が完形品も混えて出土しており、祭祀的な性格の薄い廃棄土坑とみられる。

ＳＫ7296　調査区中央付近の一辺約3.5mの方形土坑で、深さ20cm程と浅い。遺物は多くないが、埋土に多量の破砕した炭化材が混入していた。

(3)　平安時代前Ⅱ期の遺構　掘立柱建物１棟、溝４条、土坑11基がある。

ＳＢ7299　前代のＳＢ7300を引き継ぐもので、同一規模だが、ＳＡ7000の柱穴跡と重複し、棟方向もＥ１°Ｎとこれまでのものと変化がみられる。柱掘形の規模は斎宮跡のこれまでの調査でも最大級で、最も大きいもので一辺1.3m×1.4mを測り、柱痕跡は直径30cm強である。

ＳＤ7253・7264・7271・7295　溝は４条あるが、いずれも性格は不明である。

ＳＤ7264は前Ⅰ期のＳＤ7259の延長上にあり、同一の機能のものかもしれない。また、ＳＤ7271はその埋土と上部に多量の土器片を包含しており、遺構検出面の上部に

まで達していた。土器類は全て小片となっており、この溝が廃絶する際に溝内やその上部に廃棄がなされたものとみられる。遺物は土師器杯・皿類、須恵器、灰釉陶器や土錘、製塩土器、炭化材などで、前Ⅱ期を中心とする。

土　　坑　調査区北東のＳＫ7250、調査区中央部のＳＫ7288・7290から比較的多量の遺物が出土している。ＳＫ7250は長径5.4ｍ、短径2.2ｍの長楕円形土坑である。遺物は土師器杯・皿・高杯・把手付鍋・甕・竈片、黒色土器片、須恵器杯・甕片、緑釉陶器片の他に漆の付着土器、須恵器転用硯、製塩土器片、土錘や炭化材がある。ＳＫ7290からは直径１ｍ弱の小土坑ながら杯Ｂや甕・鍋を中心とする土師器類、須恵器壺片、製塩土器片、土錘、炭化材、人為的とみられる擦痕が残る大小の円礫数個が出土している。これらは前Ｉ期の遺物も若干含み、土坑の時期としては前Ⅱ期古段階のものと考えられる。当該期の多量の土器類や製塩土器、炭化材を含む土坑は第103次調査でもＳＫ7017があり、土師器類の中に小型～中型の甕、鍋などの煮沸形態を含むという共通点もある。この他特筆できるものとしてはＳＫ7274から斎宮跡２例目とみられる銅製鉈尾が出土している。

(4)　平安時代中期の遺構　掘立柱建物２棟、土坑５基がある。

ＳＢ7270･7310　調査区西端のＳＢ7270は５間×２間の南北棟で、柱掘形はおよそ50㎝前後と小振りで、Ｎ２°Ｗの棟方向をとる。また調査区東端のＳＫ7310は柱掘形が約80㎝とやや大きく、Ｅ５°Ｎの棟方向をとる。ＳＢ7310は東側の妻柱を検出できなかった事から、東西方向は５間以上延びている可能性を残す。この棟方向の差異と、ＳＢ7270が後Ｉ期に掘削されたとみられるＳＤ7269に、ＳＢ7310は中期後半の土坑に重複されている事からＳＢ7270が中期後半、ＳＢ7310が中期前半に属するものと考えられる。

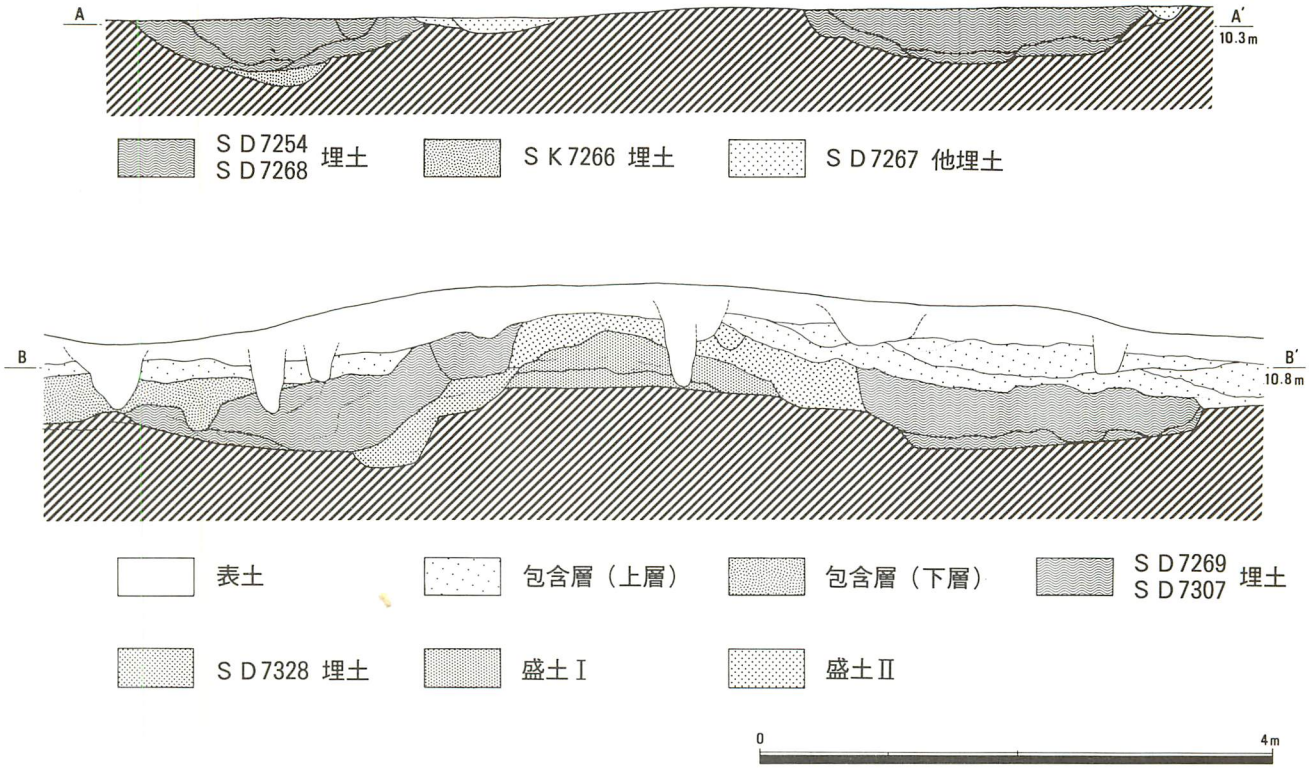
調査区東端の土坑群　土坑は調査区の東端部に集中する。いずれも長径２ｍ以下の小型のもので、土師器を中心とし、完形も含む多量の土器が出土がしている。このうちＳＫ7321からは斎宮跡では最古に属する玉縁口縁の白磁碗片が出土している。この他中期後半を中心に一部後Ｉ期にかけての土師器杯・皿が大半で煮沸形態のものは少ない。わずかに灰釉陶器片や須恵器片も含まれ、炭化材もみられる。これらの土坑は一部重なりあっており、ＳＫ7221→ＳＫ7320・7322の先後関係があるものの、ＳＢ7310の柱穴に重複しており、後述のＳＢ7313が建てられるまでの短期間のうちに集中的に掘削されたものであろう。

(5)　平安時代後Ｉ期の遺構　掘立柱建物４棟、溝６条、土坑10基がある。

ＳＢ7042～7044　これらは第103次調査区から続くもので、前二者が４間×２間、後者が５間×２間の規模であることが判明した。この３棟はいずれも梁行柱間寸法が桁行よりも長いものである。なお、この３棟は後Ｉ期のうちに含めているが、若干時期的に遡って中期にかかる可能性もある。

ＳＢ7313　今回新たに検出した５間×２間の南北棟で、中期のＳＢ7310に直交する方向で建てられている。このＳＢ7313の周辺にはなお多数のピットがあり、数次の建て替えもあったようだが、今後の調査成果により確定したい。

溝　後Ｉ期に属する溝のうち、ＳＤ7254・7269・7307・7308・7309・7328は、第103次調査で「コ」の字状配置を呈するＳＤ7012・7013・7014・7015と対応するものである。ＳＤ7269の西辺・北辺・東辺は各々ＳＤ7015・7254・7307にそれぞれ平行して幅３ｍ



第18図　ＳＤ7254・7268・7269・7307埋土断面図（１：30）

前後の空閑地をつくる。またこの結果から第103次調査でもＳＤ7013にＳＤ6994が対応していると考えられる。これらの溝は幅およそ３ｍ～4.5m、深さは遺構検出面から30cm～50cmと浅いもので、断面は弱い逆アーチ状である。出土遺物は時期的に平安時代初期～末期と幅広いが前Ⅱ期～中期のものが最も多く、また中期～後Ⅰ期とみているＳＢ7042・7043・7044の柱穴に重複する事から後Ⅰ期の中程の段階で掘削されたものと考えられる。また、ＳＤ7328はＳＤ7307の底で検出された溝で、これらの溝が数次にわたり再掘削されている可能性もある。

区画溝の性格　これらの溝が新たに発見された事で「コ」の字状の区画配置は３箇所以上になる事が判明したが、いずれも平行あるいは直交するなどしてその方向に規則性があり、幅３m前後の空閑地をつくる点で共通するが、これらの埋土断面のいくつかを示したのが第18図である。特にＳＤ7269・7307の調査区南壁断面に注意すると、調査前は旧地形の弱い起伏かと考えていた盛り上がりがＳＤ7269・7307の間隙部によく対応し、そこが山林表土とはやや異なる黒ボク状土や地山崩壊土の混土が盛られており、特に図で盛土ⅡとしたものがＳＤ7328埋没後盛土され、それを切る形でＳＤ7269の埋土が入っている事が窺われる。この事から少なくとも二次にわたる盛土は版築などは認められないものの幅1.5m程度の土塁あるいは築垣であったのではないかと考える。そのように考えるとＳＤ7307～7309の北側現況地形も緩やかに盛り上がっており、さらに東へ続いている。これにより方格地割の区画に沿った形で土塁に画された一辺20m程度の区画群が想定される事になるが、斎宮跡のこれまでの調査でこのような施設や区画

は確認されておらず、その評価には大きな問題があろう。

土坑群　ＳＫ7272・7281・7282・7283・7284・7286・7291・7292は径およそ1.5m～4.5mの不整円形の土坑で、底部の形状も凹凸があり、深さも60cm～90cmと幅があるが、いずれも埋土が地山崩壊土ブロックを多量に含む人為的な撹乱状になっているという共通点があり、埋土断面は地山土を含んだ様々な土種が層理状に堆積している（ＰＬ19参照）。分布についても先述の区画溝ＳＤ7269の内側に集中する傾向が窺われる。これらの土坑の性格は推定ではあるが、以上の内容から樹木の根の痕跡ではないかと考える。後Ⅰ期あるいはそれ以前の段階からＳＤ7269の内側にあたる部分には建物や溝などの遺構はみられず空閑地となっている。少なくとも後Ⅰ期の土塁（築垣）の区画が成立する段階で立木が存在し、以後に除去されたと考える。厳密に「遺構」とできるか問題はあるが、当該期の各区画の土地利用を考えさせるものである。

(5) 平安時代後Ⅱ期の遺構　この段階から調査区内では建物がみられなくなる。検出した遺構は土坑５基のみで、ＳＫ7289が調査区の中央に位置し、他は調査区東端付近に集中する。

ＳＫ7289　直径約2.5mの不整円形で、深さ20cm程度にも関わらず、ロクロ土師器台付杯の完形品や椀の他、土師器台付杯や須恵器片など比較的多量の遺物が出土している。調査区東端の土坑群もそれぞれ直径1.5m程度の小規模な土坑で、土師器やロクロ土師器などを出土し、時期的に末期にまでかかるものもあるかもしれない。

(6) 平安時代末期の遺構　溝６条、土坑４基がある。

土塁側溝肩部の溝　ＳＤ7255・7256・7265・7268・7277は後Ⅰ期のＳＤ7254･7269の肩部に掘削された幅30cm～40cmの細い溝である。土塁（築垣）の両側溝と考えられるこれらの溝の補修に伴うものであろうか。なお類似する溝にＳＤ7267があるが、遺物はなく、上面から「洪武通寶」が出土しており、明確にこの時期に伴うものかどうか判断できない。また時期の不明なＳＤ7306も同様のものかもしれない。

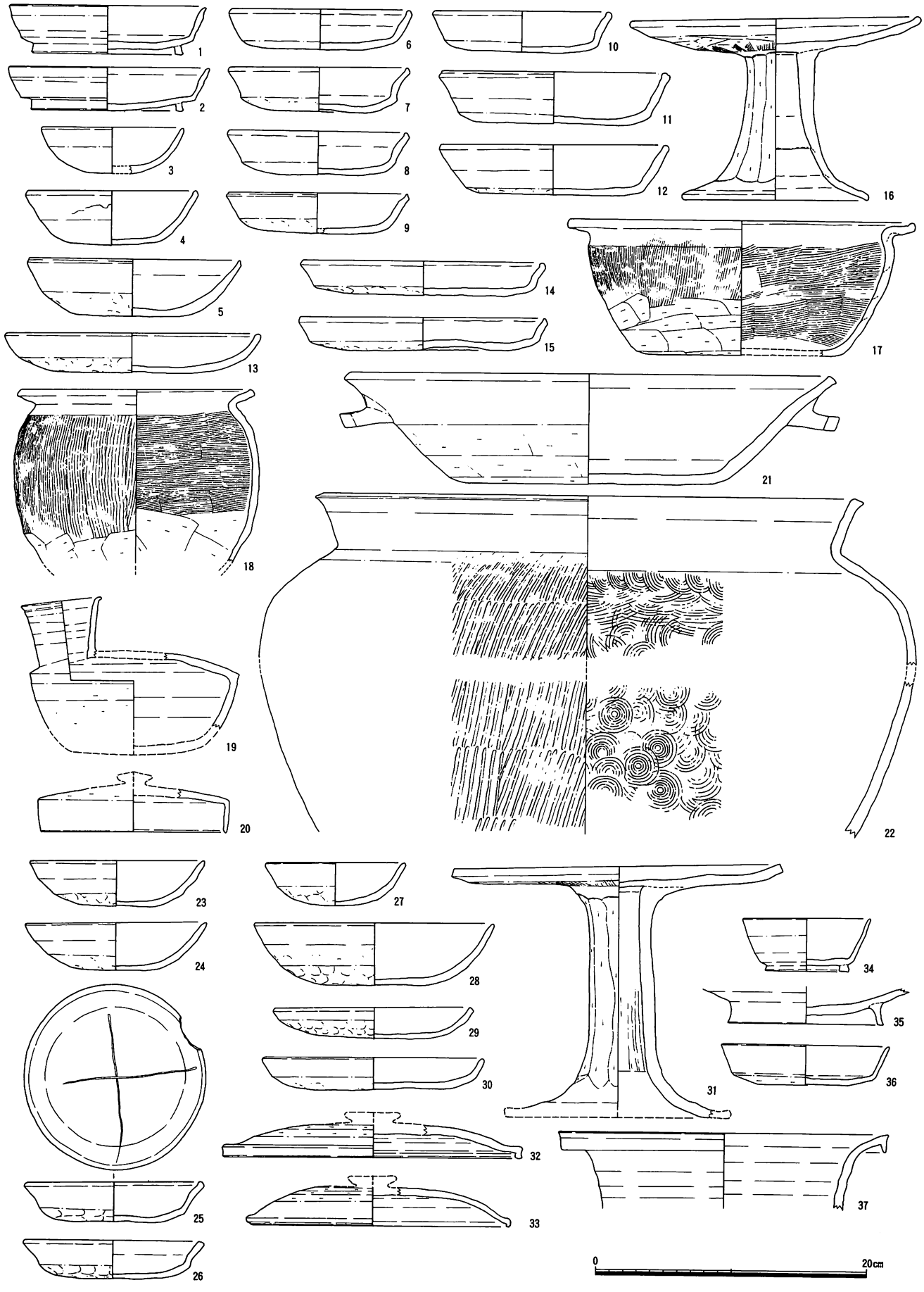
ＳＤ7311　Ｎ５°Ｅほどの方向で延びる南北溝で、幅約80cm、深さ30cm～40cmの断面逆台形を呈する。底部高にはほとんど高低差はなく、埋土に平安時代末期の遺物を含むもののＳＫ7305が重複しており、掘削は若干遡るかもしれない。

土　坑　土坑は全て調査区東部に集中し、ＳＤ7303の内側にのみみられる。先述のＳＤ7255等からも、後Ⅰ期の土塁区画はこの段階では存続していたものとみられる。これらの土坑のうちＳＫ7304・7305からは多量の土器の出土があり、遺構内と認定できたものの他、黒褐色を呈する包含層の下部にも当該期の遺物が多量に含まれており、これを包含層Ⅱとして分離して遺物を取り上げている。特にＳＫ7305からは多量の土師器皿・小皿・高杯、ロクロ土師器杯・台付杯・高台付杯や須恵器片の他、判読できないが仮名習書したとみられる土師器皿類や調度品の一部と考えられる金銅製のＬ字形金具が出土している。時期的には平安時代末期でも前半のものと考えられる。

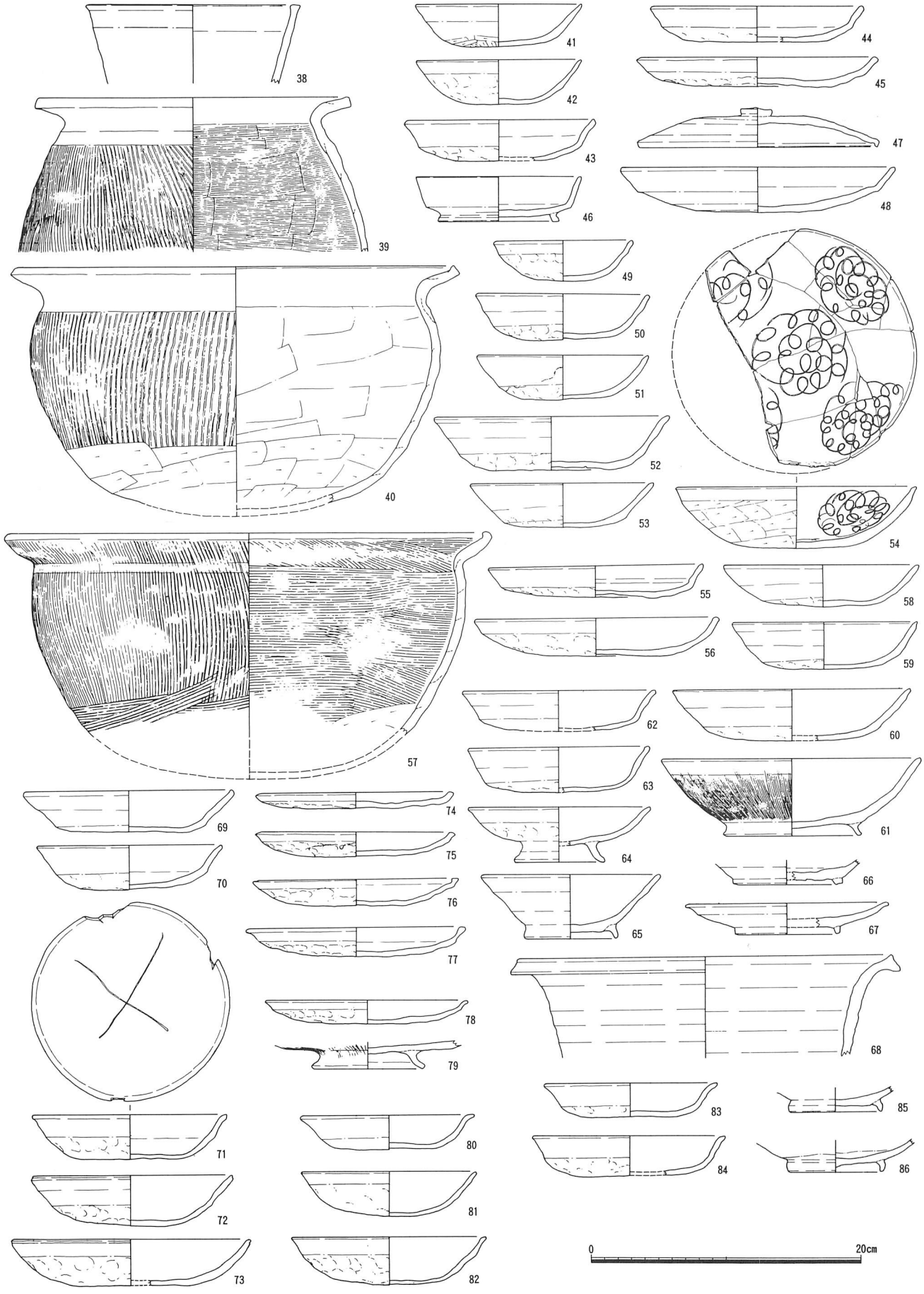
３．遺　物

第108次調査の出土遺物は整理箱で、約160箱になる。調査面積との割合ではやや多い方といえる。大半は土師器を中心とする土器類で、時期的には平安時代全期に及んでいるが、奈良時代のものは少なく、鎌倉時代以降のもので斎宮に関わるものは皆無といっていい状況である。これらの遺物について概述したい。

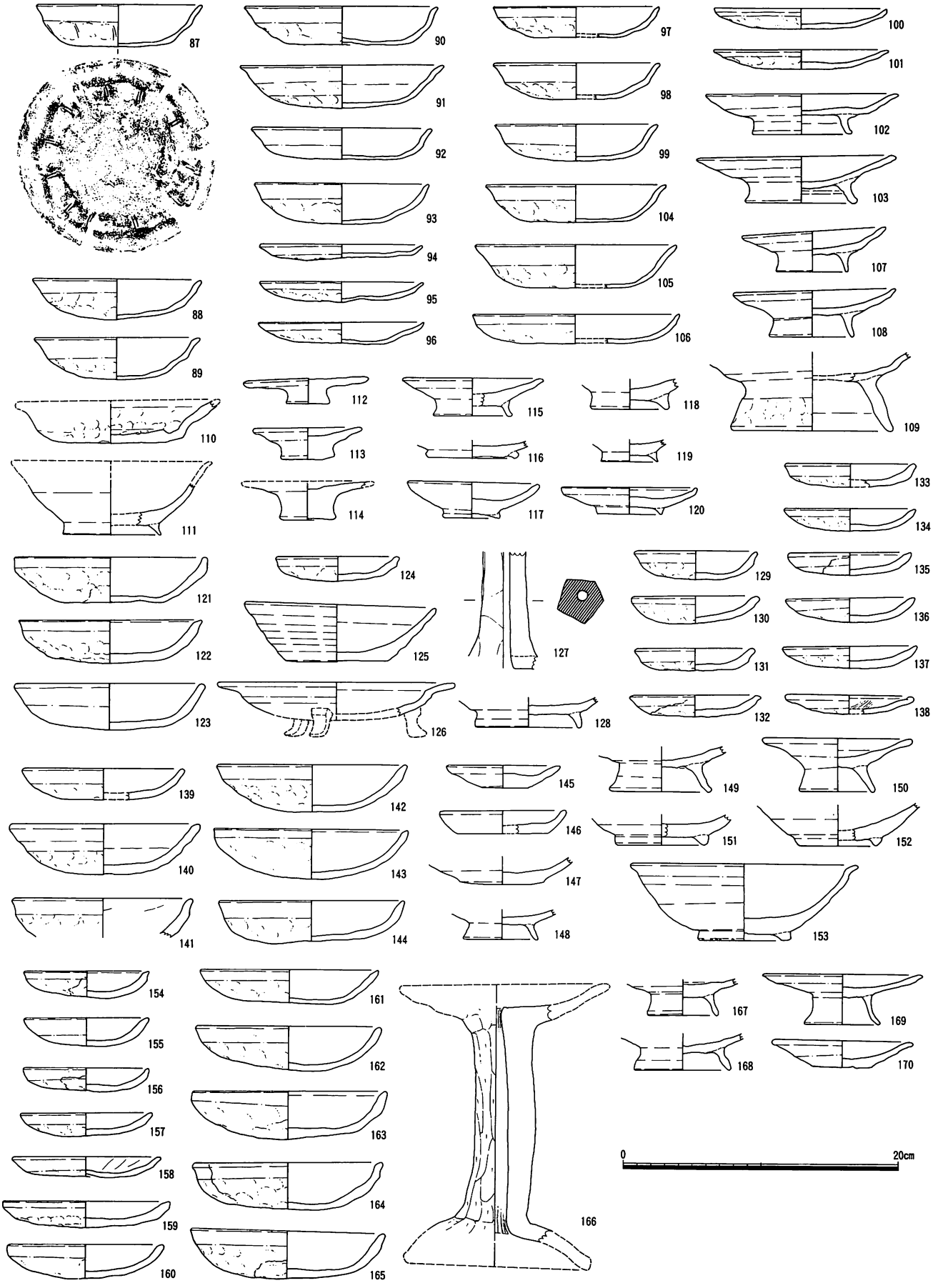
(1) 平安時代初期～前期の遺物　平安時代初期のＳＫ7260・7261では前者から７箱、後者から11箱の遺物が出土している。詳細については今後整理したいが、これらの土坑からは残存



第19図　出土遺物実測図　ＳＤ7252：１・２、ＳＫ7261：３～22、SK7260：23～37



第20図　出土遺物実測図　ＳＫ7260：38～40、ＳＫ7288：41～48、ＳＫ7290：49～57、ＳＤ7258：58
ＳＤ7275：59～61、ＳＤ7273：62～68、ＳＫ7250：69～77、ＳＫ7262：78・79
ＳＫ7317：80～82、ＳＫ7326：83～86



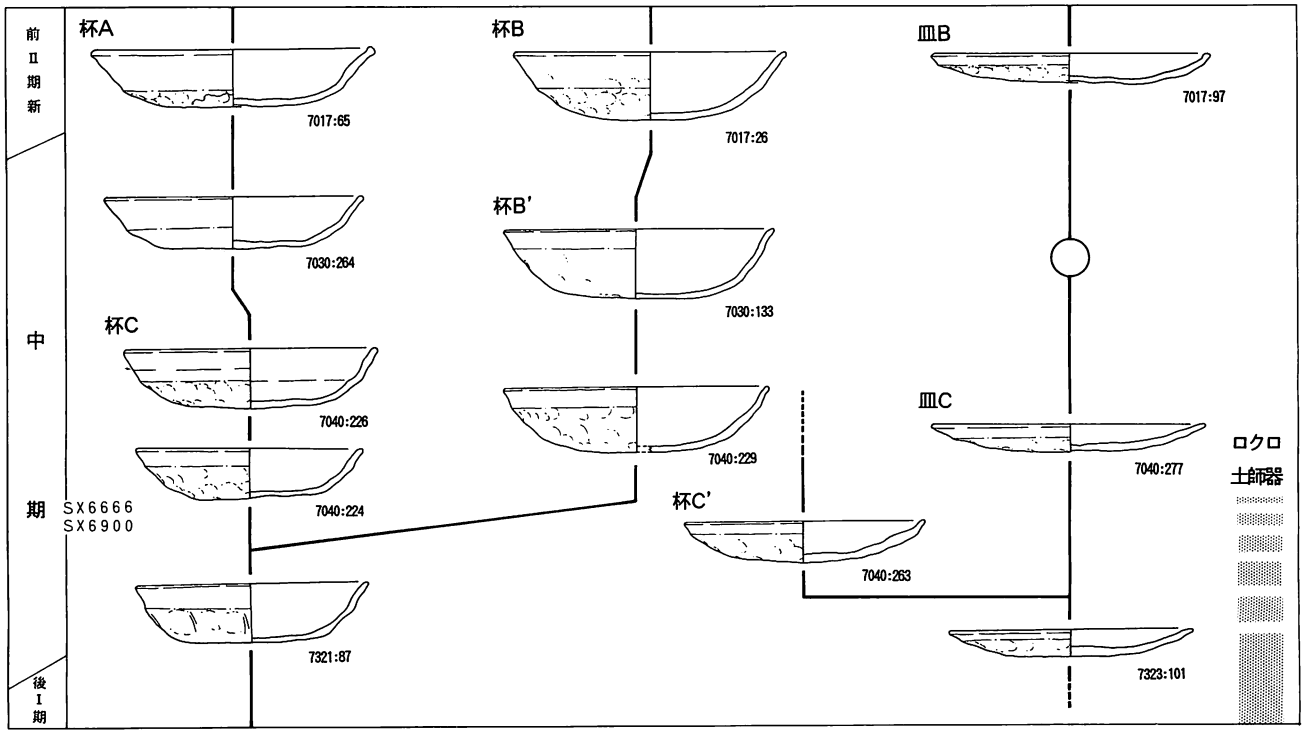
第21図　出土遺物実測図　ＳＫ7321：87～96、　ＳＫ7323：97～103、ＳＫ7322：104～106、ＳＫ7289：107～109
ＳＫ7324：110・111、ＳＤ7309：112～117、ＳＤ7308：118～120、ＳＤ7269：121～128
ＳＤ7307：129～153、ＳＫ7305：154～170

状況の良好な土師器杯や皿・鍋・高杯、須恵器杯・平瓶・甕・盤、製塩土器などの土器類の他、土錘や鉄製雁股鏃・刀子が出土しており、土師器供膳形態の割合が高いものの、内容的には多岐にわたっている。

前Ⅰ期の資料については混入を除き良好な資料が無く、第103次調査と共通した傾向を示すが、前Ⅰ期の終わりから前Ⅱ期の前半の資料としてはＳＫ7250・7290などの資料がある。前者は土師器供膳形態を中心とした構成を示し、後者は小規模な土坑ながら土師器甕類の他、擦痕を持つおよそ７㎝～30㎝の一部被熱した礫が５個程出土するが、第103次調査のＳＫ7017も含めて共通した性格を持つとみられる。

(2) **平安時代中期の土器**　ＳＫ7321・7322・7323出土の土器がある。この土坑の資料は大半は薄く丸みのある体部からやや外反する口縁部を持つ杯Ｃで、杯Ｂ′や皿Ｃなどが共伴している。灰釉陶器片や須恵器片の混入はほとんどなく、橙色かにぶい黄橙色で、微細な砂粒を含む事があるが、胎土は概ね緊密で焼成もよい。基本的に均質な内容を持ち、土坑の規模からもほぼ一括で投棄されたものと考えられる。杯Ｃの口径は平均で13㎝弱であり、小型化が進み中期でも新相のものである。なお、(87) は底部を型で押し出したようにゆがみが無く外面に成形時の爪状の圧痕が残る。

前Ⅱ期から中期の土師器の変遷については第103次調査の中でもふれているが、今回の出土資料によっても方格地割中枢部での在り方として一定の方向性が出たのではないかと考えられ、主な器種の変遷を第22図に示した。大きく杯Ａと杯Ｂとして平安時代前Ⅱ期まで続いた流れは、杯Ｂから派生した、薄手で丸みを帯びた底部に幅の狭いヨコナデを施し、やや外反する口縁部を持つ杯Ｂ′と杯Ｃの中に止揚され、この間口径の縮小化が進み、後期の大・中・小の皿器形に分化する母体となる。一方、単純口縁かあるいは端部を面取りして口縁が内弯気味になる皿Ｂが中期中葉には円盤状の



第22図　方格地割中枢部における平安時代中期土師器の変遷（１：４）
土器の下の番号は遺構と概報での遺物番号を示す

皿Ｃにまで単純化が進み、中期から後Ⅰ期の画期の中で綿々と続いた平安型の皿の系譜を終焉させる。胎土が主に橙色を呈し、「延喜通寶」を共伴した第95次調査のＳＸ6666や第99次調査のＳＸ6900は中期中葉から後葉にかけて位置づけられ、平安時代中期とされる土器は概ね10世紀初めから中葉前後に位置づけられるのではないかと考える。なお、斎宮跡における平安時代後期様式の重要な構成要素であるロクロ土師器は中期末葉に出現すると予想され、手びねりの供膳形態土師器の再編成と深く関連するものと考えられる。

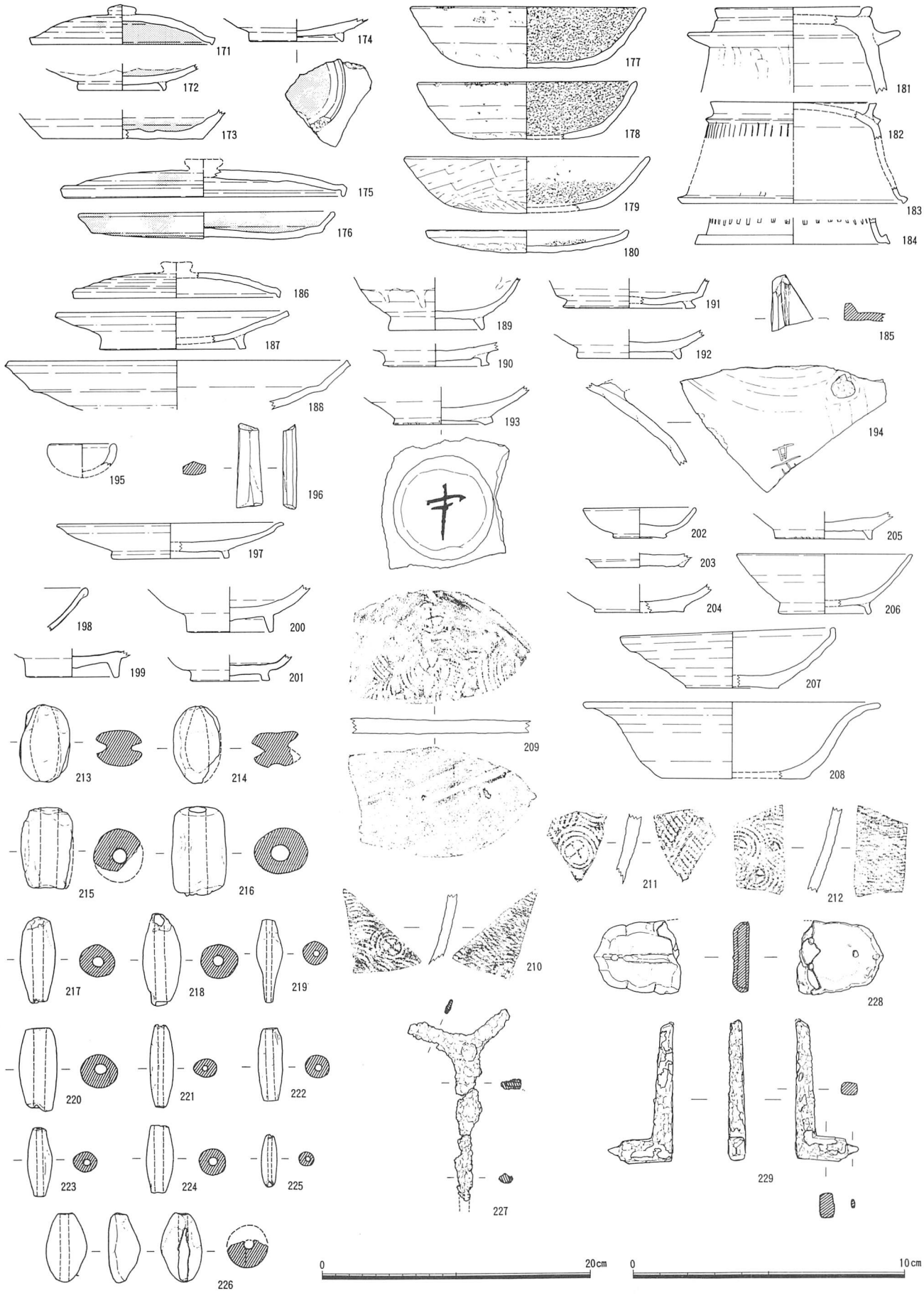
(3) 平安時代後期～末期の遺物　平安時代後Ⅰ期～後Ⅱ期には良好な一括資料がないが、末期は調査区東部に数基の土坑があり、特にＳＫ7305からは周辺を含め多量の土器が出土しているため、方格地割中枢部のひとつの在り方として内容を検討してみた。器種が判別できたものだけで土師器皿144片（15.3%）、同小皿724片（76.6%）、ロクロ土師器杯類65片（6.9%）でその他混入と考えられる灰釉陶器片、須恵器片がある。土師器の供膳形態だけで91.9%を占めており、ロクロ土師器を入れると98.8%にも及ぶ。煮沸形態は甕１片のみであった。こうした土師器供膳形態のみでセットを成す遺構は、方格地割全体の中でも今のところ牛葉東ブロックと鍛冶山西・中ブロックでのみ顕著であり、陶磁器類をほとんど含まないという点でも斎宮全体の中で特異な存在である。また、このような遺構が平安時代を通じて末期まで残るという点も他のブロックとの相違点である。10世紀以降のもので仮名習書土器を含むものが、この２地区にはみられるという点もこれらの遺構、ブロックの性格を示唆するのではなかろうか。

(4) 特筆される遺物　第108次調査で出土した遺物には多量の土師器類などの他に特殊遺物とされるものが多種多様に出土している。主な内訳では緑釉陶器25片、輸入陶磁器９片、製塩土器522片、円面硯や転用硯など硯類が42片、朱付着土器27片、漆付着土器88片、ミニチュア土器の他、墨書土器、「某？」線刻土器、鉈尾や多数の大型角釘などの金属製品や土錘131個、フイゴ羽口100片以上などがみられる。

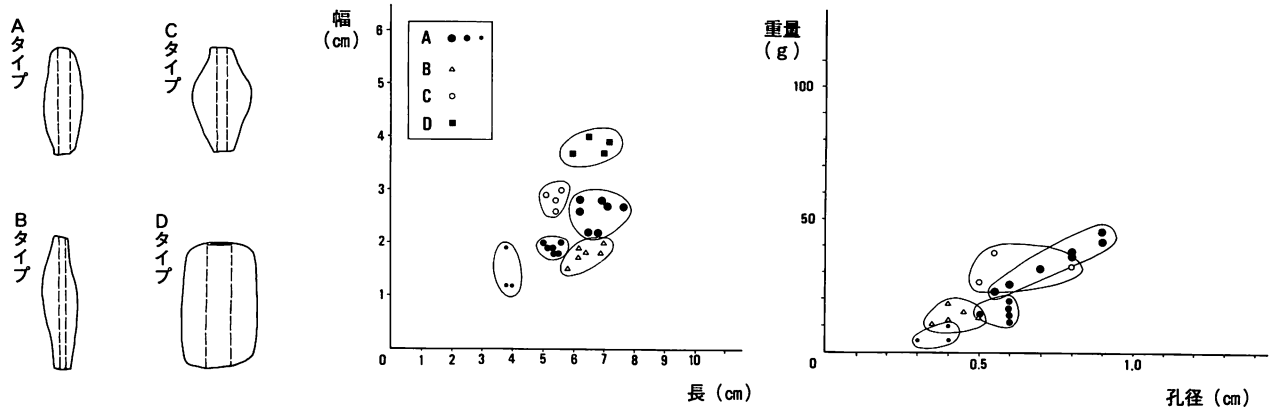
緑釉陶器　その中で緑釉陶器は調査面積に比して多くなく、第103次調査の成果とも一致する。大半は前Ⅱ期に相当する時期の猿投産のものであるが、(196) のような東濃産ではないかとみられる把手付水注の把手部が出土している。群馬県山王廃寺、長野県平出遺跡など東日本で出土している器形となるものであろう。

輸入陶磁器　輸入陶磁器も量的には多くないが、ＳＫ7321出土の白磁碗（198）は外面に火を受けたような跡が斑状にみられるが、均質で透明な明るい釉調で、10世紀中葉の遺構に伴っており、斎宮跡では第103次調査で出土している白磁碗Ⅰ類とともに初期輸入陶磁器に含まれる白磁である。近年確認されつつある越州窯系青磁とともに注目すべき資料である。他に図示していないが白磁壺底部が出土している。

金属製品　金属製品では、ＳＫ7274出土の銅製鉈尾が明確な金属製の銙帯飾具としては斎宮跡では初出である。３箇所の鋲留部があり、外面中央に葉脈状に突帯を付け、外縁は花弁状につくる。ＳＫ7305出土の金銅製金具（229）は調度品の一部と考えられるが、厨子や衣架などが想起されるものの確定できない。ＳＫ7260の鉄製雁股鏃（227）も初出であり、斎宮存続期の弓矢具としては第86次調査の奈良時代後期の土坑から出土した鉄鏃に続く２例目である。近隣の良好な出土資料としては平安京法住殿跡の12世紀中葉～13世紀初頭の武家層の土坑墓例があるが、これと比較しても保存処理後に判



第23図　出土遺物実測図　朱付着土器：171～176、漆付着土器：177～180、硯・転用硯：181～192、墨書土器：193
文字線刻土器：194、ミニチュア土器：195、緑釉陶器：196･197、輸入陶磁器：198～201
陶器類：202～208、「十」刻印須恵器：209～212、土錘：213～226、金属製品：227～229



第24図　管状土錘の法量（幅／長、重量／孔径）相関

明した残存長は14.4cmで大型の部類に入るものとみられる。中茎は長く股部は大きく広がる特徴もある。鳴鏑の装着痕跡は明確ではない。

朱付着土器や漆付着土器、フイゴ羽口など工房的な性格のものも多く、第103次調査の結果と一致し、さらにブロック東部の調査の進展にあわせて遺構との関連性などが究明される必要がある。

多種多様な土錘　土錘は調査面積に対して出土量も多く、形態・法量上のバリエーションもある。変型工字形土錘と管状土錘があり、前者は第51次調査で有溝土錘が報告されているが斎宮跡では希少な資料である。県下においても鳥羽市贄遺跡、志摩町阿津里貝塚など伊勢湾口部での出土例はあるが平野部での出土例はない。管状土錘も第24図に示したように各種タイプがあり、やや中膨らみで細身のものをA類、その両端が強く絞られるものをB類、算盤玉状に中程で膨らむものをC類、大型で全体が均等な太さのものをD類とした。特にA類は大・中・小の3タイプに分かれるのをはじめ、重量や、網の繊維の太さに関わる孔径に様々なものがある。これらは斎宮において比較的多量に出土したとはいえ、漁網一刺を構成するには少なく、またタイプやサイズにバラつきが大きすぎる。しかし、(226) のように片面のみが著しく磨耗する例や両端部が同一方向に欠ける例は、実際の使用状況を示す可能性がある。

類例の乏しい須恵器　(202～208) に斎宮では主体的ではない須恵器の一群がまとまって出土しているので図示した。平安時代後Ⅰ期～末期の遺構に伴い、産地等不明である。

4．まとめ

これまで述べてきたように第108次調査においても平安時代の斎宮、わけても方格地割の中枢をなすとみられる部分について多くの知見をもたらした。次にこれらの成果について若干の検討を加えてまとめとしたい。

(1)　平安時代前半の計画的配置　牛葉東ブロック北東の土地利用状況を俯瞰しやすいように第26図で第103次・第108次調査区内の主要遺構の変遷を示した。遺構は奈良時代後期から平安時代末期まで分布するが、以下の4つの画期による5段階の変遷が考えられる。

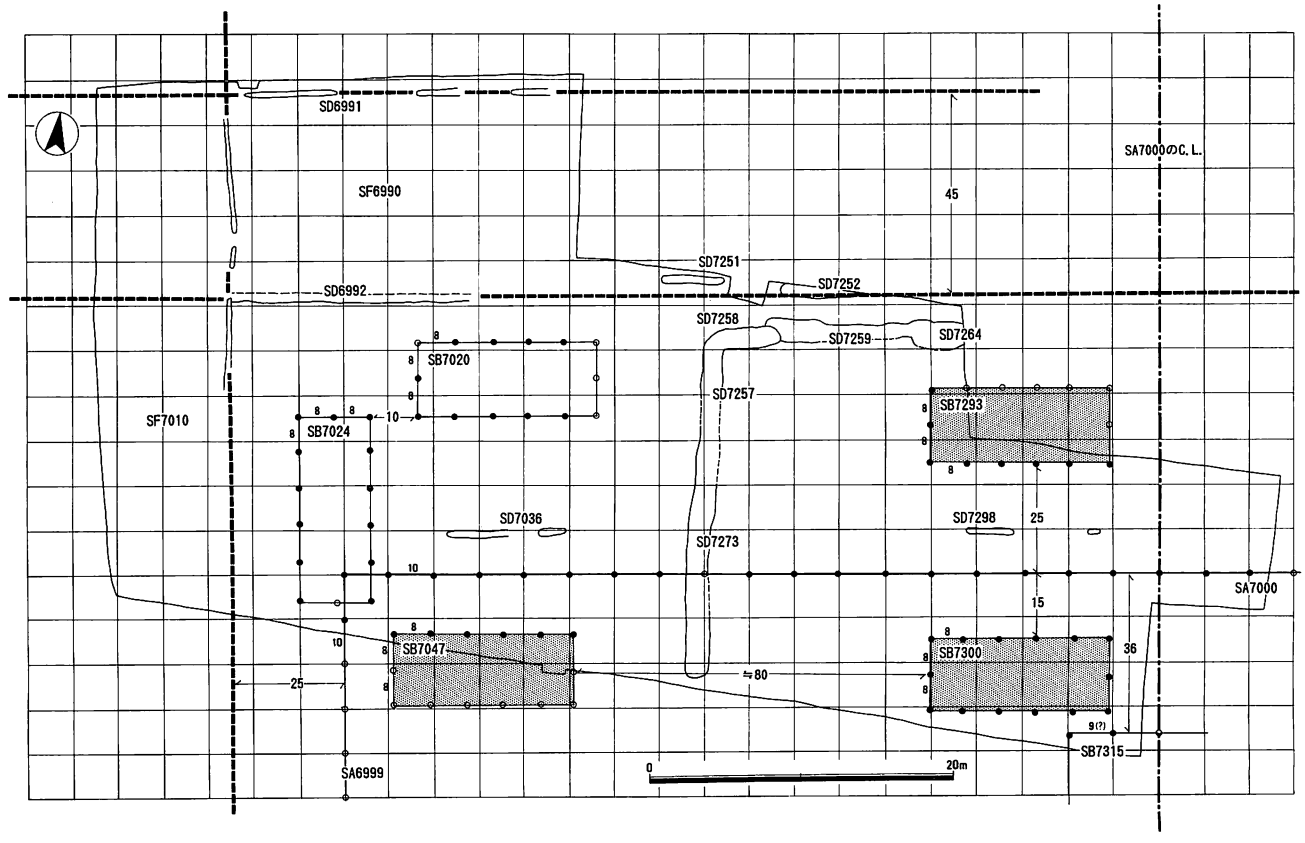
土地利用の変遷
①方格地割が構成され、ＳＡ6999・7000に内側が画される平安時代初期。
②柵列が廃絶し、建物配置の規制に変化があらわれる平安時代前Ⅰ期後半から前Ⅱ期初め。
③土塁（築垣）で小区画が構成される後Ⅰ期後半。
④この一帯での遺構の分布が認められなくなる末期後葉以降。

このうち、①の段階で調査区北方を通る奈良時代の古道が廃絶し、鍛冶山西・中ブロックにまたがる柵列区画が構成された後、方格地割を基調とする区画が成立し、それを受けてＳＡ7000などによる区画が牛葉東ブロックにも成立したと考えられる。

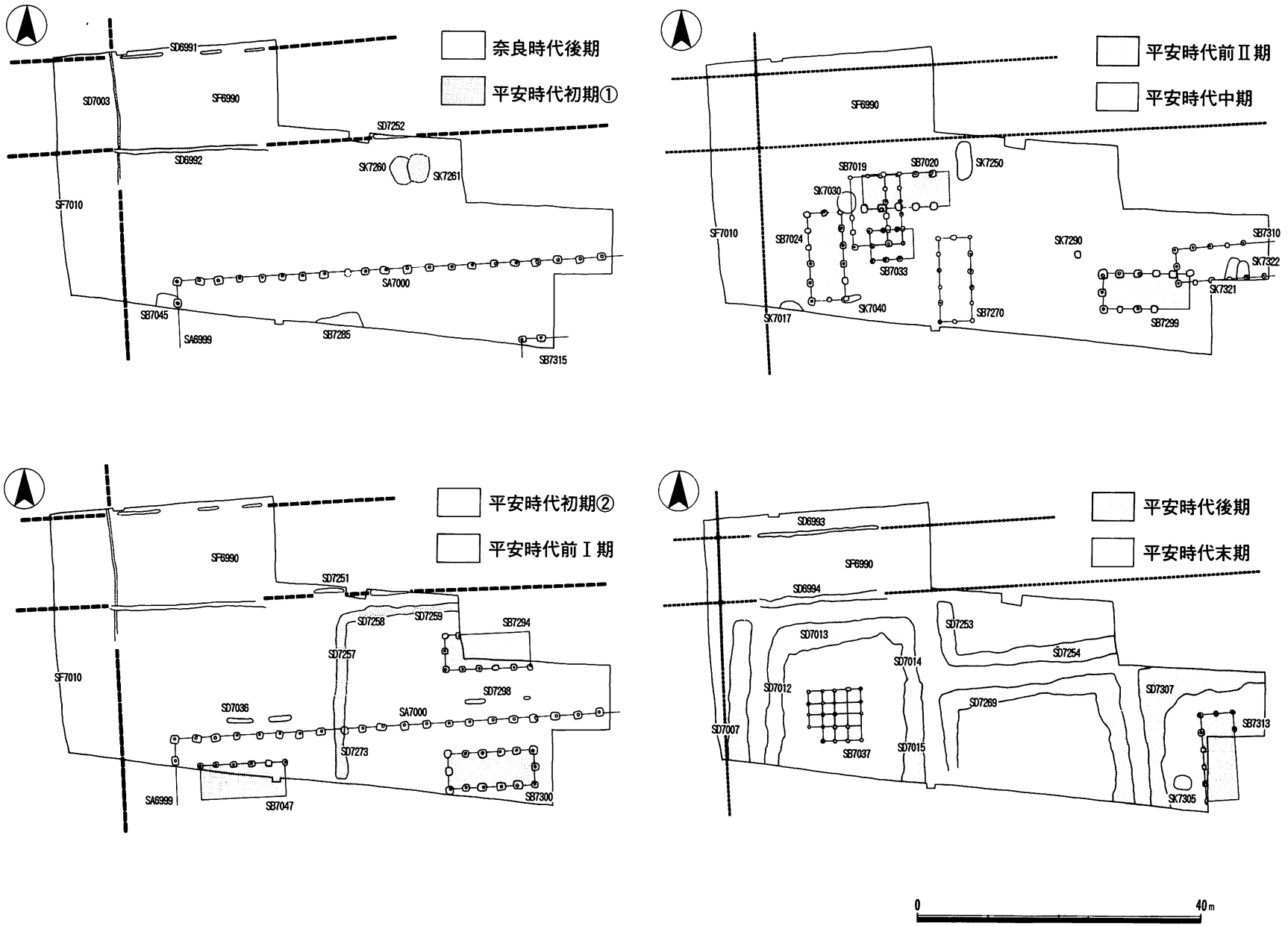
ＳＡ7000はその北側東西道路のＳＦ6990の南側溝から、ＳＤ6992・7252の溝底の形状が不安定ではあるが約19mの距離にあり、１尺をおよそ29.6cm～29.7cmとみると64尺前後となる。また西側のＳＦ7010の東側溝ＳＤ7003からは同様に25尺とみることができる。この時調査区東南隅で柱穴２個のみ検出したＳＢ7315はＳＡ7000からおよそ36尺の距離にあるとみられる事から、ＳＢ7315は区画道路側溝から南に約100尺という数値が求められる。また東西４間とみると、ＳＡ7000の東西正中線と同軸になる可能性も高く、この区画に沿った建物では最も古いものである可能性がある。今後の規模の確定を期待する（第25図参照）。

平安時代初期後半から前Ⅰ期にかけての５間×２間の３棟の建物の変遷については先述したが、これらの間にも規則的な配置が認められる。３期の建て替えがあるＳＢ7302は最も古く、ＳＡ7000の北西隅から13本目の柱穴、距離にして130尺のところで西妻柱筋を揃え、ＳＡ7000から15尺の距離をおいて建てられる。これをＳＢ7301に建て替えるに及び、西妻柱筋を揃えてＳＡ7000の北25尺のところにＳＢ7294が建てられる。この２棟の間隔は40尺となる。これらがＳＢ7300・7293に建て替えられる頃にＳＢ7300の西およそ80尺のところに東妻柱筋をおいてＳＢ7047が建てられる。これは前二者の距離の２倍である。また前Ⅰ期頃にはＳＡ7000の北側10尺のところに断続的ながらＳＤ7036・7298があり、柵列に関連があるものとみられる。

前Ⅱ期の逆Ｌ字形の配置をとる建物もＳＢ7024の西桁行筋は柵列から10尺の距離を



第25図　規則的配置の主要建物（１：500　数字は尺）

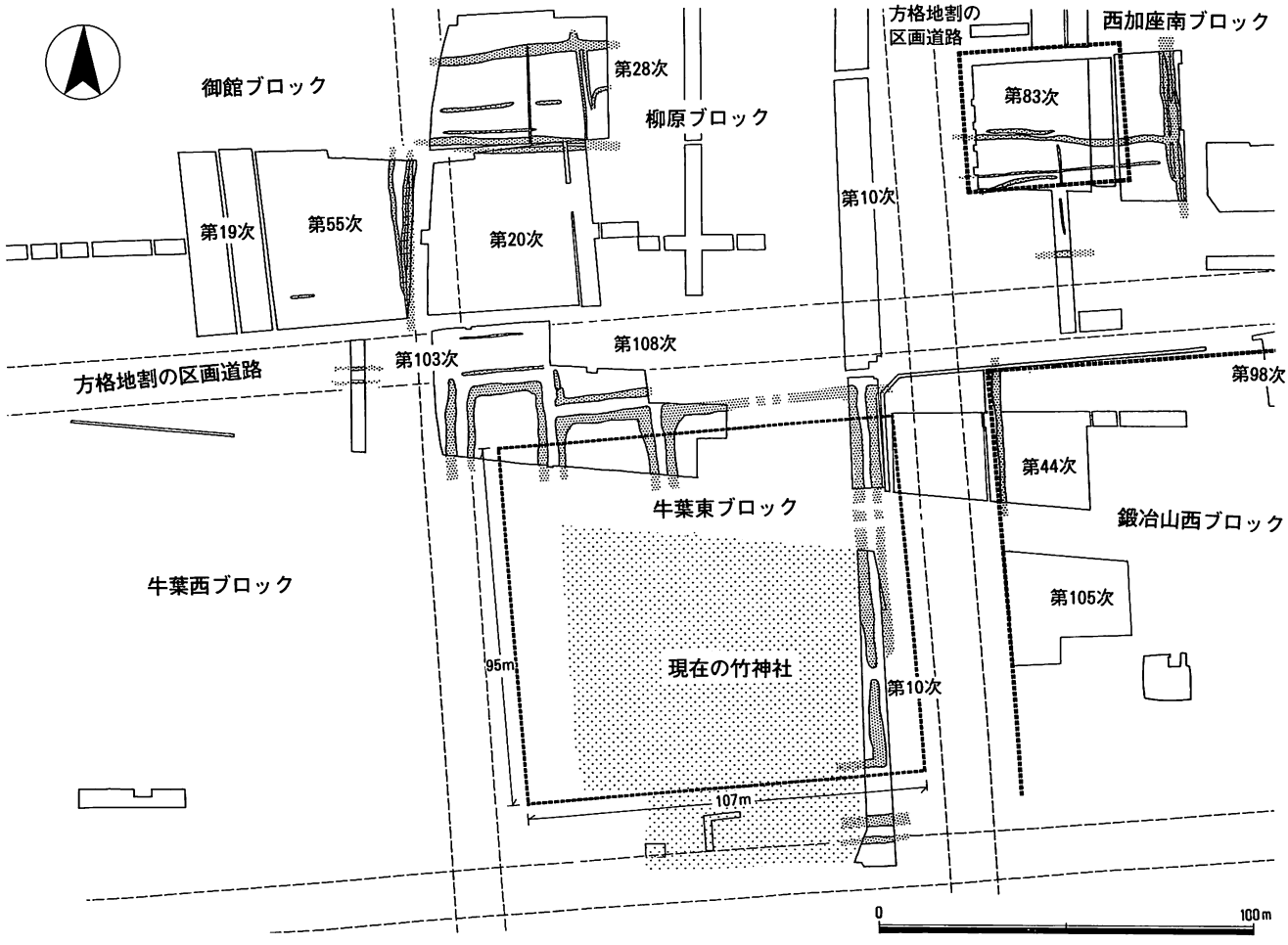


第26図　主要遺構変遷図（1：800）

とるなど柵列の廃絶に伴って、その基準を踏襲したものである事が分かる。

このように平安時代初期～前Ⅱ期にかけては極めて計画的な構成が継続されている事が窺われるのである。

(2) **土塁状遺構について**　第103次調査で平安時代後期以降、幅３m弱の浅い溝により一辺20mほどの「コ」の字状区画が発見されたのに次いで、今回その東でさらに２区画分は発見された事になる。溝底のレベルの高低はあるがほぼ同一規模であり、時期も後Ⅰ期に成立するものとみられる。同様の遺構を周辺に求めると、第10次調査で竹神社の東側にこの南北方向に一致する同規模の溝が、やはり幅２m強の間隔を開けて併走している（第27図）。第10次調査区内ではこの北端と南端と考えられる部分がみられ、南隅から約24mのところに通路あるいは門跡と考えられる溝の切れ目がある。周辺に視点を広げてみると牛葉東ブロック以外には同時期の類似する遺構は全くみられず、この土塁（築垣？）状の区画構成は平安時代前半までのＳＡ7000やＳＡ2655などによる柵列の区画によく対応したものである事が窺える。これは鍛冶山地区の区画が平安時代中期以降衰退する点と極めて対照的である。同様の遺構としては昭和53年度に実施された度会郡小俣町離宮院跡の発掘調査の際に平安時代前半期の八脚門に直交する幅３m程の土塁（築垣？）が調査され、現存する土塁の分布も示されている。これによると離宮院にも平安時代後期に一辺70m程度の土塁による区画構成があったと考えられ、今回の第108次調査区周辺の成果と一致する点が多い。特に近鉄線以南の区画に依然不明な点が多いとはいえ、当区画が平安時代を通して他の区画とは際立った囲繞施設



第27図　平安時代後期～末期主要溝遺構分布図（１：2,000）

網目部分は主要溝遺構、太い破線は平安時代初期の柵列遺構、細い破線は方格地割の道路側溝を示す

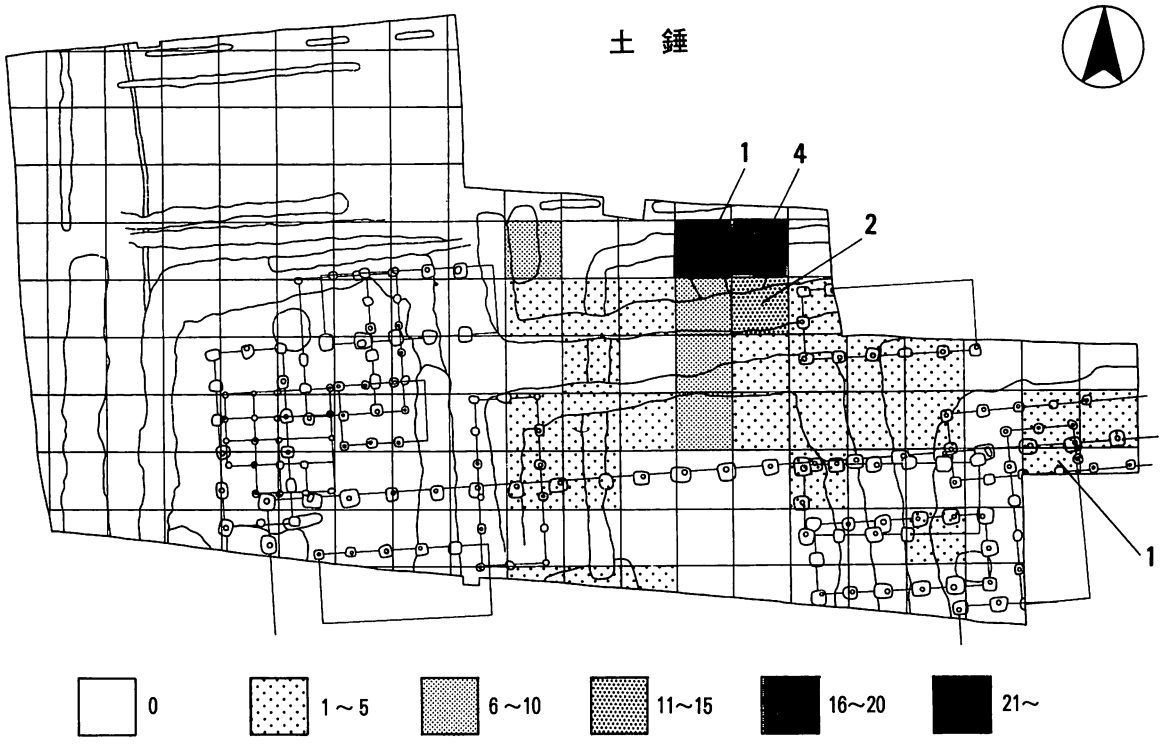
を維持していく事は、後代様々な経過を経て竹神社社殿地として生きている事と合わせ、当区画の重要性ひいては内院など斎宮中枢部としての機能が古代末期から中世初期にかけても維持されていたとみるのは過言であろうか。

(3) 土錘・製塩土器について　これまで述べてきたように、今回の調査では方格地割の中心部での調査としては異例といえる量の土錘が出土している。これまで土錘は各調査で概略数点は出土するが、斎宮との関連性が不明な遺物でありながら詳細な報告はなされてきておらず、出土の量や種類などを把握する術はない。また比較的多量に出土する製塩土器は、斎宮の祭祀との関連性が想定されてはきたものの、出土の状況などは細かく分析された事はない。今回はこれらの特殊遺物とされるものの出土の関連性や意味づけを考える基礎資料を提示するためにそれぞれの個数や破片数について第103次と第108次の調査区について分布図を作成してみた（第28図）。

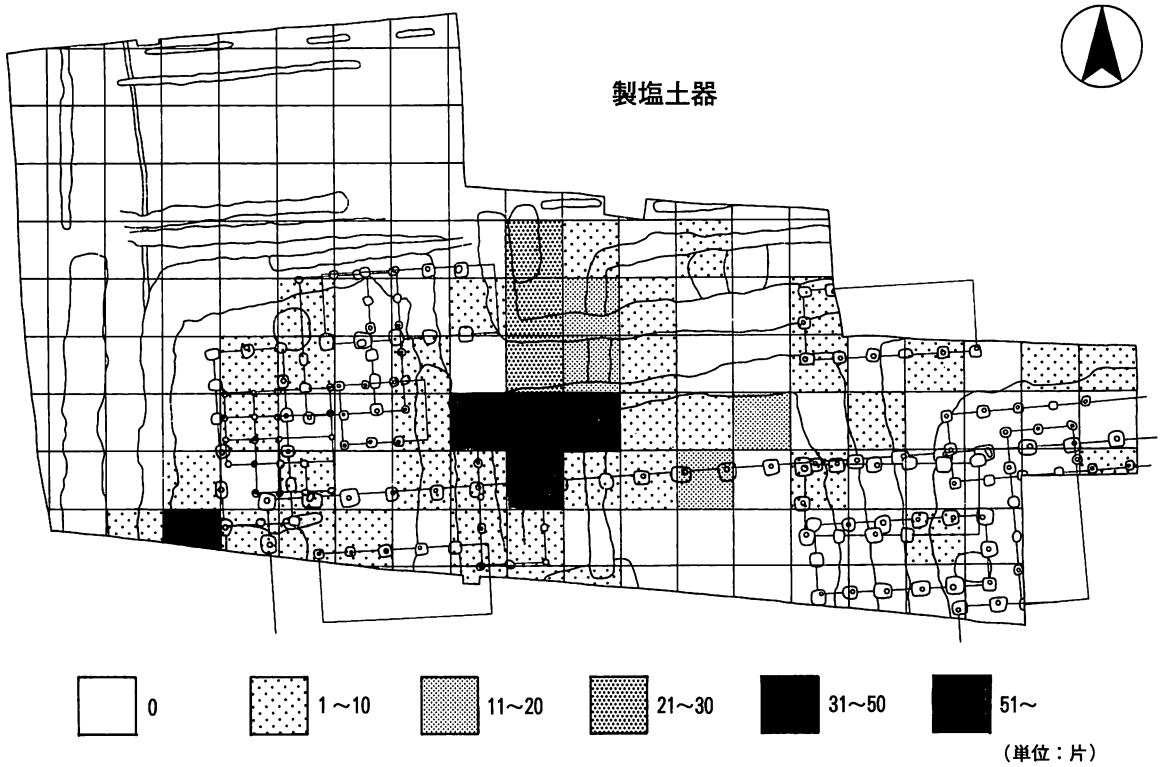
まず土錘についてみると第108次調査区で比較的多量の出土をみながら、西接し同一区画内の第103次調査区内では全く出土していない点が注目される。また第108次調査区内でもＳＫ7260･7261に分布の中心がある事が分かる。これらは平安時代初期のものであり、今回調査区では最も古い段階の遺構に属するため、他の出土資料はここからの拡散とも考えられる。ＳＫ7260・7261では各種の土器片や鉄製品が散在する形で出土しており、祭祀的な傾向は窺われず、単なる廃棄の性格が強いと考えられる。土錘も多様な種のものがまとまりなく出土している点からも周辺からの一過性の投棄と考えたい。

それに対して製塩土器は第103次・第108次両調査区から一定量出土している。分布の中心はＳＫ7017とＳＤ7269のコーナーの内側付近にみられ、土錘とは一致しない。この２地点はそれぞれ平安時代前Ⅱ期から中期にかけての土師器類が炭化材片などをともなって多量に出土した土器溜まりであり、土師器杯・皿類を主体とする事や時期的な一致、およびいずれも区画溝脇という一定区画内の隅の部分にあたる箇所であるという共通点が認められる。土器溜まりとしては規模も大きくなく、斎宮の中心区画の中であるという事から毎月朔日の忌火、庭火祭などに関わるものである可能性もある。斎宮でも製塩土器の量的なピークは平安時代前Ⅰ期から前Ⅱ期頃にかけてと考えられるが、同様に、炭化材などを包含する土師器杯・皿類の単相の土器溜まりは方格地割中心部付近でも平安時代初期からはじまり前Ⅱ期をピークとして収束していく。今後の資料の増加にあたってその内容の詳細な把握がなされる事が望まれる。

(4) 斎宮中枢部の微地形について　これまでの斎宮跡25年の調査の中で最大の成果といえる方格地割の発見後も区画道路やその側溝、交差点がみつかり、その内部の構造も柵列による区画、八脚門、生垣また柵列等に対して規則的に配置された掘立柱建物群や、区画の性格を示す可能性のある墨書土器の出土などの着実な調査成果の蓄積により、平面的な構造の解明は一層精緻なものになりつつある。近年は通称中町地区の調査率は史跡全体の中でも進んできており、こうした方格地割の構造とともに、地形的な測量データも集積しつつある。ここでは第108次調査の実施を契機として調査区周辺の地山面高のデータをプロットし、これを10㎝オーダーの等高線で結び、平安時代前半の斎宮の中心部北辺一帯の微地形を提示してみた（第29図）。しかし未だなお調査の及ばない部分も多く、各調査次ごとの測量データの詳細な比較には及んでいないため、細部

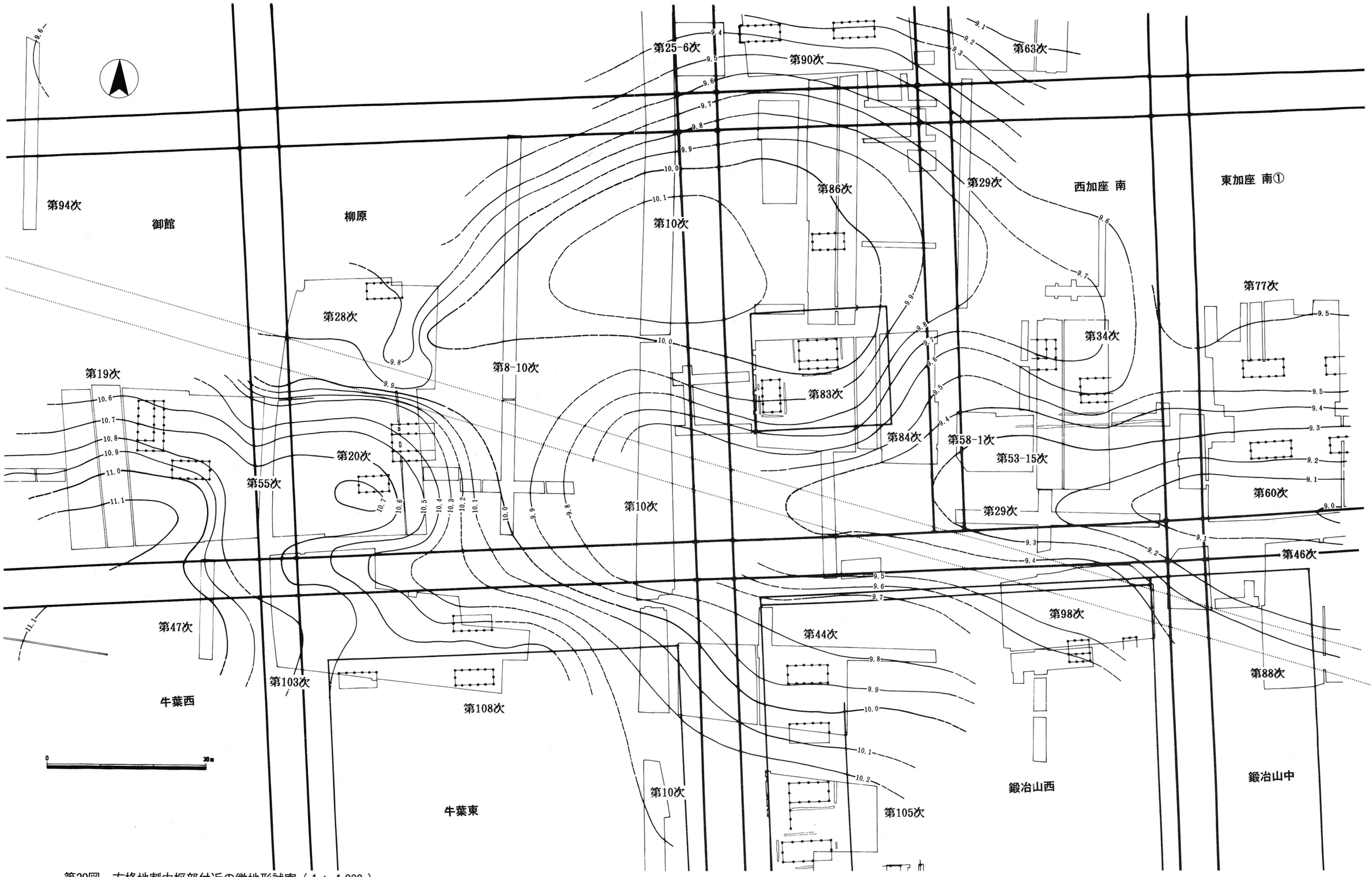


（単位：個，図中の数字は変型工字形土錘の個数）



（単位：片）

第28図　土錘・製塩土器出土分布図（１：500）



第29図　方格地割中枢部付近の微地形試案（１： 1,000 ）

については推定の部分も多く、現在では試案の段階である。

まず、等高線の主曲線が10㎝であるため、極めて複雑な地形にみえるが、今回の地形図の最高点は約11.1m、最低点は約9.0mであり、傾斜率は全体で約５‰であるため基本的にはほとんど起伏のない平坦な地形であるといえる。しかし牛葉東～鍛冶山中ブロックの北を画する東西道路のやや北に沿うようにして幅30m～50mほどの弱い谷状地形が東に向かって延びており、奈良時代の古道もこの部分に向かって延びている。この谷の中では少なくとも第29次・第46次・第60次・第98次調査においていわゆる黒ボク土が分布しており、これを地山面として遺構が形成されている事が判明している。この黒ボク土は当地に斎宮が造営される以前に堆積しているものであり、遺物が全く混入していないため、方格地割の造営画期の鍵となるものとみられる。黒ボク土は第90次調査区の北半でも分布する事が知られており、方格地割中央部での低位部の基盤面として広がっているようであり、この低位部に向かう緩傾斜面に西加座地区の５間×２間の建物群による倉庫地区が立地するものとみられる。

この東西の谷状地形の南側は今回の第108次調査区も含めて緩やかな北東下がりの傾斜となっており、旧参宮街道付近と考えられる尾根筋のピークに続く。竹神社地内など近鉄線以南の調査例がほとんどないため、不分明な部分もあるが、この尾根筋上は極めて平坦で、斎宮中枢部の造営には安定した地形であるとともに、この北側の谷筋があるため排水面でも有利な立地となっていたものと想像できる。この反対の北側には柳原ブロックから西加座南ブロックにかけて上面の平坦な尾根が派生しているが、この南斜面に第83次･第84次調査で発見された柵列区画が配置されており、中心建物が緩やかに傾斜する方向に南面している事がわかり、古代官衙プランのセオリーに則っているとみられようか。またこの尾根の延長には鞍部状の平坦部があり、第34次調査区の大型建物等が南北道を挟んで類似した立地条件にある。この派生尾根はそのまま東加座南①ブロックの北東方向に向かって傾斜し消失していく。

御館・柳原地区には若干の疑問は残るが弱い尾根とその鞍部が想定され、北の現況水田地帯に向かって落ちていく。この２箇所の頂部付近には平安時代初期から前Ⅱ期頃にかけて極めて密集した建物の建て替え状況が示される。ここに現れる地形状況はその整地あるいは造成の結果も含むであろう。

以上方格地割中枢部付近の微地形概況をみてきたが、牛葉や鍛冶山の区画の北側の小谷は地割の東西道路（幅約45尺の基幹区画道路のひとつと考えられる）と方向を揃えており、この部分が奈良時代の古道とも交差することからＥ４°Ｎを基軸とする方格地割への転換にあたって大きく関与するものであった可能性は高い。今後この小谷の延長部を含め、方格地割が展開する範囲全体の微地形の分析と検証を重ねていく事は、斎宮全体の構造を検討していく上で大きな意義があるといえるだろう。

（大川勝宏）

《参考文献》　・寺島孝一・片岡肇他『法住殿跡』財團法人古代學協会會　1984
・御村清治・榎本義譲『離宮院跡発掘調査報告』小俣町教育委員会　1980
・田中禎子『漁の技術史―木曽川から伊勢湾へ―』一宮市博物館　1994

掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規　模	棟方向	桁　行（m）	梁　行（m）	柱間寸法（m）		時　期	備　考
					桁　行	梁　行		
第105次調査（６ＡＦＮ）								
ＳＡ1411	(10)	Ｎ 4° Ｗ	(29.5)		2.95		奈良後～平安初	10間分検出、ＳＡ2675より古
ＳＡ7150	(6)	Ｎ 4° Ｗ	(17.7)		2.95		〃	6 間分検出
ＳＡ7151	3	Ｎ 4° Ｗ	7.8		不揃い		〃	ＳＢ7155の西妻柱筋の南側延長上（柱間2.1m＋2.7m＋3.0m）
ＳＢ7155	4 × 2	Ｅ 4° Ｎ	12.0	6.0	3.0	3.0	〃	ＳＢ7190より古
ＳＢ7160	5 × 2	Ｅ 4° Ｎ	15.0	6.0	3.0	3.0	〃	
ＳＢ7165	(1)×－	Ｎ 4° Ｗ	(3.0)	－	3.0	－	〃	
ＳＢ7175	(2)× 2	Ｅ 4° Ｎ	(4.2)	4.2	2.1	2.1	〃	ＳＢ7185より古
ＳＢ7180	(2)×(1)	Ｎ 4° Ｗ	(4.8)	(2.4)	2.4	2.4	〃	ＳＢ7195より古
ＳＢ7185	3 ×－	Ｎ 4° Ｗ	6.3	－	2.1	－	〃	
ＳＡ2675	(10)	Ｎ 4° Ｗ	(29.5)		2.95		平安前Ⅰ～前Ⅱ	10間分検出
ＳＡ7170	(6)	Ｎ 4° Ｗ	(17.7)		2.95		〃	6 間分検出
ＳＢ7190	5 × 2	Ｅ 4° Ｎ	12.0	5.4	2.4	2.7	〃	ＳＢ7191より古
ＳＢ7191	5 × 2	Ｅ 4° Ｎ	12.0	5.4	2.4	2.7	〃	ＳＢ7197より古
ＳＢ7195	－× 2	Ｅ 4° Ｎ	－	6.0	－	3.0	〃	ＳＢ7196より古
ＳＢ7196	3 ×－	Ｎ 4° Ｗ	7.2	－	2.4	－	〃	
ＳＡ7171	(6)	Ｎ 4° Ｗ	(17.7)		2.95		時期不明	6 間分検出
ＳＡ7172	(5)	Ｎ 4° Ｗ	(15.0)		3.0		〃	5 間分検出
ＳＢ7197	5 × 2	Ｅ 7° Ｎ	10.0	4.0	2.0	2.0	〃	ＳＢ7191より新
第107次調査（６ＡＢⅠ－Ｏ）								
ＳＢ7205	5 × 2	Ｎ 5° Ｅ	8.5	5.2	1.7	2.6	奈　良　中	南庇出1.8m、ＳＢ7208より古
ＳＢ7208	(2)×－	Ｎ 0° Ｓ	(4.2)	－	2.1	－	〃	北庇出1.6m、ＳＢ7207より古
ＳＡ7209	4	Ｎ 0° Ｓ	6.8		1.7		〃	
ＳＢ7210	3 × 3	Ｎ 17° Ｅ	4.8	4.2	1.6	1.4	〃	総柱、ＳＢ7205より古
ＳＢ7215	3 × 2	Ｎ 7° Ｅ	3.9	3.6	1.3	1.8	〃	
ＳＢ7219	4 ×－	Ｅ 0° Ｗ	5.6	－	1.4	－	〃	
ＳＢ7222	(1)× 2	Ｎ 0° Ｓ	(1.2)	2.0	1.2	1.0	〃	ＳＢ7221より古
ＳＢ7225	(2)× 2	Ｅ 21° Ｓ	(3.8)	4.2	1.9	2.1	〃	南庇出1.5m、ＳＢ7226より古
ＳＢ7226	(1)× 2	Ｅ 7° Ｓ	(2.2)	4.4	2.2	2.2	〃	ＳＢ7231より古
ＳＢ7231	3 × 2	Ｅ 7° Ｓ	3.9	3.8	1.3	1.9	〃	
ＳＢ7233	(2)×(1)	Ｅ 7° Ｓ	(4.2)	(2.2)	2.1	2.2	〃	ＳＢ7232より古
ＳＢ7234	(2)×(1)	Ｅ 0° Ｗ	(3.6)	(1.9)	1.8	1.9	〃	
ＳＢ7207	(3)× 2	Ｎ 25° Ｅ	(5.4)	3.6	1.8	1.8	鎌倉時代	
ＳＢ7221	(2)×(1)	Ｅ 25° Ｓ	(5.4)	(2.7)	2.7	2.7	〃	
ＳＢ7235	(1)× 2	Ｎ 34° Ｅ	(1.8)	4.2	1.8	2.1	時期不明	

第108次調査（ 6ＡＥＱ－Ｃ ）

ＳＢ7302	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安初～前Ⅰ	ＳＢ7301より古
ＳＢ7315	(1)×－	E 4° N	(2.7)	－	(2.7)	－	〃	
ＳＡ7000	(15)	E 4° N	(44.55)		2.97		〃	第103次調査を含め20間分検出
ＳＢ7047	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前Ⅰ	第103次調査のＳＢ7349は抹消
ＳＢ7293	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
ＳＢ7294	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	ＳＢ7293より古
ＳＢ7300	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
ＳＢ7301	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	ＳＢ7300より古
ＳＢ7299	5×2	E 1° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前Ⅱ	
ＳＢ7020	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
ＳＢ7270	5×2	N 2° W	11.75	4.5	2.35	2.25	平安中	
ＳＢ7310	(5)×2	E 5° N	(12.0)	4.8	2.4	2.4	〃	
ＳＢ7018	5×2	E 4° N	13.5	4.8	2.7	2.4	〃	
ＳＢ7042	4×2	E 4° N	9.6	5.0	2.4	2.5	平安後Ⅰ	
ＳＢ7043	4×2	E 4° N	9.6	5.0	2.4	2.5	〃	ＳＢ7242より古
ＳＢ7044	5×2	E 4° N	10.0	5.2	2.0	2.6	〃	
ＳＢ7313	5×2	N 5° W	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	

竪穴住居一覧表

遺構番号	規　模（m）	長軸方向	深さ（cm）	柱　穴	カマド	時　期	備　考

第107次調査（ 6ＡＢＩ－Ｏ）

ＳＢ7216	3.5×3.3	E 6° S	20	－		奈良中	
ＳＢ7227	3.2×－	N 14° E	20	－		〃	ＳＢ7228より古
ＳＢ7228	3.4×3.4	N 15° E	25	－		〃	
ＳＢ7229	5.4×－	E 14° S	10	－	東　壁	〃	ＳＢ7227より古
ＳＢ7230	3.7×－	N 22° S	20	－	東　壁	奈良時代	
ＳＢ7232	4.9×－	E 12° S	10	－	東　壁	〃	

第108次調査（ 6ＡＥＱ－Ｃ ）

ＳＢ7285	(7.0)×－	E 10° S	45			奈良後	

遺物（土器）観察表

第105次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	SK 7179	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 7／8 外：〃 〃	約40%	器表面の剝離ややすすむ	R 6
2	SK 7179	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 6／8 外：〃 〃	約90%	器表面の剝離著しい	R 5
3	SK 7179	土師器 皿	(口径) 13.0cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、底部外面ケズリ	密	良好	内：橙 5YR 6／6 外：〃 5YR 6／8	約30%		R 4
4	SK 7179	土師器 皿	(口径) 18.2cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 6／8 外：〃 〃	約50%		R 3
5	SK 7179	須恵器 杯蓋	(口径) 22.0cm (器高) 4.2cm	天井部1／2ロクロケズリ、内外面ロクロナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内：浅黄 5Y 7／3 ～ 灰5Y 6／1 外：オリーブ灰 2.5GY 6／1	約50%		R 1
6	SK 7179	須恵器 杯	(口径) 27.0cm (台径) 24.0cm (器高) 5.1cm	内外面ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	密	良好	内：灰白 10Y 7／1 外：〃 N 7／1	約30%		R 2
7	SK 7156	土師器 皿	(口径) 15.6cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	約30%		R 25
8	SK 7156	土師器 皿	(口径) 15.6cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 7／6 外：〃 〃	約60%		R 27
9	SK 7156	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 6／8 外：浅黄橙 7.5YR 8／6	約20%		R 28
10	SK 7156	土師器 杯	(口径) 14.3cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 6／8 外：〃 7.5YR 6／6	約40%		R 29
11	SK 7156	土師器 杯	(口径) 18.0cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：黄橙 7.5YR 7／8 外：〃 〃	約40%		R 26
12	SK 7157	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 6／3 外：〃 〃	約70%		R 32
13	SK 7157	土師器 杯	(口径) 13.3cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	約40%		R 30
14	SK 7157	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	約50%		R 31
15	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.1cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 6／8 外：〃 〃	約50%		R 17
16	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.3cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／4 外：〃 〃	約20%		R 22
17	SD 7154	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR 8 ／6 外：〃 〃	約40%		R 14
18	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：黄橙 10YR 8／6 外：〃 〃	約60%		R 21
19	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	やや甘い	内：浅黄橙 10YR 8／3 外：〃 〃	約50%		R 18
20	SD 7154	土師器 杯	(口径) 18.5cm (器高) 4.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	約40%		R 23
21	SD 7154	土師器 杯	(口径) 16.7cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	約40%		R 15
22	SD 7154	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	約30%		R 16
23	SD 7154	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい橙 7.5YR 7／4 外：〃 〃	約20%		R 19
24	SD 7181	陶器 小皿	(口径) 9.1cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、内外面ロクロナデ、底部回転糸切り痕	密	良好	内：橙 7.5YR 7／6～橙 5YR 7／6 外：〃	完形	ロクロ土師器に器形類似、ゆがみが大	R 12
25	SD 7181	土師器 小皿	(口径) 11.4cm (器高) 2.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	やや甘い	内：浅黄橙 5YR 8／3 外：〃 〃	約80%	器表面の磨耗すすむ	R 8
26	SD 7181	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内：浅黄橙 7.5YR 8／6 外：橙 7.5YR 7／6	約80%	器表面の磨耗すすむ ゆがみが大	R 11
27	SD 7181	土師器 台付皿	(口径) 8.4cm (台径) 3.8cm (器高) 2.4cm	内外面ナデ、貼付高台	砂粒をやや含み粗	やや甘い	内：黄橙 10YR 8／6 外：〃 〃	ほぼ完形	器表面の磨耗著しい	R 9
28	SD 7181	土師器 台付皿	(口径) 9.9cm (台径) 3.8cm (器高) 2.5cm	内外面ナデ、貼付高台	砂粒を含みやや粗	良好	内：浅黄橙 10YR 8／4 外：〃 〃	約80%		R 10
29	SD 7181	須恵器 鉢	(口径) 26.6cm (台径) 11.0cm (器高) 13.3cm	内外面ロクロナデ、底部ロクロケズリ、貼付高台	砂粒を含みやや粗	良好	内：灰オリーブ 5Y 6／2 外：灰 5Y 6／1	約40%	底部のほぼ中央に径約2.7cmの穿孔あり	R 7
30	SD 7154	緑釉陶器 唾壺	(体部径)9.3cm (残高) 4.7cm	外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	密	やや軟質	釉：淡緑 胎土：にぶい黄橙 10YR 7／3	－		R 35
31	F －10 Pit －5	陶棺	(残幅) 23.2cm (残高) 16.5cm	外面ナデ・オサエ、内面ナデ、貼付突帯	石粒含みやや粗	良好	内：オリーブ灰 2.5GY 6／1 外：〃 5GY 6／1	－	陶棺身上部角か？	R 33
32	包含層	陶棺	(残幅) 9.4cm (残高) 7.5cm	外面ナデ、内面ナデ・オサエ	石粒含みやや粗	良好	内：オリーブ灰 5GY 6／1 外：〃 〃	－	陶棺底部か？	R 34

第107次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	SK 7240	土師器 小皿	(口径) 8.1cm (器高) 1.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良好	内：浅黄橙 7.5YR 8／4 外：橙 7.5YR 7／6	完存		R 79
2	SX 7240	土師器 皿	(口径) 15.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂粒含む	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	完存	内外面磨耗がすすみ、器形のゆがみ大きい	R 80
3	SX 7240	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 16.6cm (器高) 6.3cm (台径) 6.8cm	体部ロクロナデ、内面ナデ、底部糸切り痕残る、貼付高台	密	良好	内：浅黄橙 10YR 8／3 外：〃 〃	約80%	高台底に籾殻圧痕	R 81
5	SX 7201	弥生土器 壺	(口径) — cm (残高) 21.4cm (胴部最大径)20.2cm	体部上半に簾状文、櫛描横線文・波状文、下半ヘラミガキ、内面ハケ、ナデ	密	良好	内：灰オリーブ 5Y 5／2 外：にぶい黄橙 10YR 7／4	約90%	体部に黒斑あり	R 4
6	SX 7201	弥生土器 壺	(口径) — cm (残高) 31.0cm (胴部最大径)27.2cm	体部上半に簾状文、櫛描横線文・波状文、竹管文、下半ヘラミガキ、内面ハケ	径1㎜前後の砂粒含むが密	良好	内：橙 5YR 6／6 外：〃 〃	約90%	体部下半に外面からの焼成後穿孔	R 5
7	SX 7201	弥生土器 壺	(口径) 14.6cm (器高) 33.7cm (胴部最大径)27.6cm	口縁部櫛描列点文・波状文、体部上半に簾状文、櫛描横線文・波状文、下半ヘラミガキ、内面ハケ、ナデ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内：淡橙 10YR 7／6 外：〃 〃	ほぼ完存	体部に黒斑あり	R 3
8	SK 7202	弥生土器 壺	(口径) 10.6cm (器高) 33.8cm (胴部最大径)27.6cm	口縁部凹線文、体部上半ハケ目、下半ヘラミガキ、ケズリ、内面ハケ、ケズリ	金雲母片等微細な砂粒含むが精緻	良好	内：黒褐 2.5Y 3／1 外：橙 7.5YR 7／6	完存		R 6
9	SX 7200	弥生土器 壺	(口径) 12.9cm (残高) 25.3cm (胴部最大径)24.9cm	口縁部凹線文、体部上半ハケ目、簾状文、内面ナデ	砂粒を多量に含みやや粗い	ややあまい	内：褐灰 10YR 5／1 外：にぶい黄橙 10YR 7／4	約60%		R 2
10	SX 7200	弥生土器 壺	(口径) 15.5cm (器高) 34.0cm (胴部最大径)28.4cm	口縁部櫛描列点文・波状文、体部上半に簾状文、櫛描横線文・波状文、下半ヘラミガキ、内面ハケ?、ナデ	長石等径1㎜前後の砂粒含むが密	良好	内：明黄褐 10YR 7／6 外：〃 〃	完存	体部の対称位置に黒斑	R 1
11	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	口唇部に櫛状工具のキザミ、内外面ハケ目	砂粒を多量に含みやや粗い	ややあまい	内：黒褐 10YR 3／1 外：にぶい橙 7.5YR 7／4	—		R 22
12	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面横方向のハケ目、渦巻き波状の連続スタンプ文	微細な雲母片含みやや粗い	あまい	内：橙 7.5YR 6／8 外：〃 〃	—	全面に磨耗すすむ	R 12
13	L-12 Pit-6	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	口縁部外面凹線文、ナデ、内面ハケ	金雲母片多量に含むが精緻	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	—		R 11
14	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に櫛描横線文・波状文、内面ナデ・シボリ	やや粗い	良好	内：にぶい黄橙 10YR 6／3 外：〃 〃	—		R 42
15	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に竹管文、簾状文、櫛描横線文・波状文、内面ナデ	概ね精緻	良好	内：明黄褐 10YR 7／6 外：〃 〃	—		R 23
16	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に櫛描横線文・波状文、内面ナデ	微細な黒雲母片含む	良好	内：褐灰 10YR 4／1 外：明黄褐 10YR 7／6	—		R 37
17	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に櫛描横線文、連続圧痕をもつ突帯、内面ナデ	雲母片やや多量に含み、やや粗い	良好	内：黄灰 2.5Y 4／1 外：明赤褐 5YR 5／6	—		R 35
18	包含層	弥生土器 短頸壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面条痕状の粗いハケ目、肩部に列点状のキザミ、内面ナデ	砂質やや多い	あまい	内：にぶい黄橙 10YR 6／4 外：黒 10YR 2／1	—		R 32
19	I－11 Pit－8	弥生土器 壺	(口径) 12.6cm (残高) 34.5cm (胴部最大径)29.2cm	口縁部凹線文、体部上半ハケ目、下半ヘラミガキ、内面ナデ、ハケ	微細な砂質を多量に含むが密	良好	内：にぶい褐 7.5YR 5／3 外：〃 〃	約90%		R 24
20	包含層	弥生土器 甕	(口径) 25.4cm (残高) 12.5cm	口縁端部にキザミ、体部外面ハケ、内面ハケ、ナデ	金雲母片等2.0㎜程度の砂粒を多量に含む	ややあまい	内：にぶい橙 7.5YR 7／4 外：にぶい黄褐 10YR 7／4	約20%		R 39
21	I－11 Pit－5・8	弥生土器 甕	(口径) 14.8cm (器高) 12.9cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、底部付近ケズリ、内面ナデ	砂粒多く粗い	不良	内：にぶい褐 7.5YR 6／3 外：黒褐 10YR 3／1	約70%		R 41
22	包含層	弥生土器 壺	(口径) 13.5cm (残高) 27.4cm (胴部最大径)20.8cm	口縁端部にキザミ、体部上半櫛描横線文・波状文、内面ナデ	金雲母片等1.0㎜～2.0㎜の砂粒を多量に含む	ややあまい	内：淡橙褐 7.5YR 7／4 外：橙褐 7.5YR 7／6	完存		R 26
23	SK 7220	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に櫛描横線文と斜格子文、内面ナデ	雲母片含むが精緻	良好	内：橙 7.5YR 7／6 外：〃 〃	—		R 10
24	SB 7210	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面上半に櫛描横線文・波状文・斜格子文、下半ヘラミガキ、内面ナデ	雲母片含むが精緻	良好	内：灰黄褐 10YR 5／2 外：〃 〃	—		R 7
25	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に線刻、ナデ、ハケ、内面ナデ	精緻	良好	内：黄橙 7.5YR 7／8 外：〃 〃	—	線刻絵画か？ 内面に粘土紐接合痕残る	R 29
26	SB 7210	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に櫛描斜格子文、横線文、内面ハケ	黒雲母片含みやや粗い	良好	内：黒褐 10YR 3／1 外：にぶい黄橙 10YR 7／4	—		R 19
27	SB 7210	弥生土器 壺?	(口径) — cm (器高) — cm	外面2段の竹管文、ナデ、内面ナデ	砂粒を多量に含む	あまい	内：にぶい橙 7.5YR 5／3 外：〃 〃	—		R 17
28	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	口縁端部波状文、上部波状文と扇形文、頸部外面櫛描横線文、内面ナデ	砂粒を含むが精緻	ややあまい	内：にぶい黄橙 10YR 7／4 外：〃 〃	—		R 30
29	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	口縁端部上面に扇形文、頸部外面に櫛描横線文、内面ナデ	微細な雲母片含みやや粗い	良好	内：橙 7.5YR 6／6 外：〃 〃	—		R 44・45
30	H－13 Pit－3	弥生土器 甕	(口径) — cm (器高) — cm	口縁端部キザミ、内外面ハケ	微細な砂粒を多量に含みやや粗い	ややあまい	内：明黄橙 10YR 7／6 外：〃 〃	—		R 15
31	SB 7210	弥生土器 壺	(口径) — cm (台径) — cm	外面櫛描横線文・波状文・斜格子文	微細な砂質含みやや粗い	良好	内：橙 7.5YR 6／6 外：明黄褐 10YR 7／6	—	外面の一部に黒斑	R 18
32	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に櫛描横線文と擬似流水文、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	ややあまい	内：黄灰 2.5Y 5／1 外：にぶい黄橙 10YR 7／4	—		R 36

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
33	SB 7215	弥生土器 壺	(口径) － cm (器高) － cm	外面に櫛描横線文と擬似流水文、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内：灰赤 2.5 YR 4／2 外：〃 〃	－		R 14
34	包含層	弥生土器 壺	(口径) － cm (器高) － cm	外面に櫛描き横線文、斜格子文、弧線文、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	ややあまい	内：橙 7.5 YR 7／6 外：にぶい黄橙 10 YR 6／3	－		R 38
35	包含層	弥生土器 壺	(口径) － cm (器高) － cm	外面に棒状工具による平行沈線文、斜行文と弧線文、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	－		R 20
36	SK 7220	土師器 長胴甕	(口径) 27.4cm (残高) 17.2cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ハケのち縦方向ケズリ	微細な砂粒含みやや粗い	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	口縁の約1／8		R 57
37	SK 7220	土師器 長胴甕	(口径) 23.0cm (残高) 21.4cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ハケのち縦方向ケズリ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	約50%		R 54
38	SK 7220	土師器 長胴甕	(口径) 21.0cm (器高) 38.2cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、底部不定方向のハケ、内面ハケのちケズリ	砂粒を含みやや粗い	あまい	内：暗灰黄 2.5 Y 5／2 外：にぶい黄 2.5 Y 6／4	約80%		R 53
39	SK 7220	土師器 鍋	(口径) 34.3cm (残高) 16.9cm	口縁部ヨコナデ、外面上半タテハケ、下半ヨコハケ、内面ハケのちナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：浅黄橙 10 YR 8／4	約50%		R 59
40	SK 7220	土師器 把手付鍋	(口径) 38.6cm (残高) 15.6cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ハケのちケズリと指頭圧痕	黒色粒子を多量に含むが密	ややあまい	内：明黄褐 10 YR 7／6 外：浅黄 2.5 Y 7／4	約50%		R 52
41	SK 7220	土師器 把手付鍋	(口径) 35.6cm (器高) 23.8cm	外面タテハケと不定方向のハケ、内面ヨコハケとケズリ	密	良好	内：橙褐 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	約60%		R 65
42	SK 7220	土師器 甕	(口径) 25.2cm (残高) 12.2cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ、ケズリ	微細な蛇母片等含むが精緻	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：黄橙 7.5 YR 7／8	約10%		R 55
43	SK 7220	土師器 椀	(口径) 10.8cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：橙 7.5 YR 7／6	約30%	粘土紐巻き上げ痕残る	R 50
44	SK 7220	土師器 椀	(口径) 11.4cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	約90%	粘土紐巻き上げ痕残る	R 49
45	SK 7220	土師器 椀	(口径) 11.6cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良好	内：にぶい橙 7.5 YR 7／4 外：浅黄橙 10 YR 8／3	約90%	底部外面に4条の沈線	R 48
46	SK 7220	土師器 椀	(口径) 11.6cm (器高) 4.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	良好	内：橙 5 YR 7／6 外：〃 〃	約50%	粘土紐巻き上げ痕残る	R 74
47	SK 7220	土師器 台付椀	(口径) 16.8cm (器高) 6.8cm (台径) 12.0cm	外面ヘラミガキ、内面ナデのち放射状と螺旋状の暗文、貼付高台	密	良好	内：橙 5 YR 7／8 外：〃 〃	約80%		R 47
48	SK 7220	土師器 高杯	(台径) 11.2cm (残高) 7.9cm	外面ナデと弱いハケ、内面ナデ	密	ややあまい	内：橙 5 YR 7／8 外：〃 5 YR 7／6	脚部のみ残存	内面ヘラキザミ痕残る	R 72
49	SK 7220	土師器 高杯	(口径) 16.2cm (残高) 3.8cm	口縁部ヨコナデ、下半ヘラケズリ、内面放射状暗文	密	良好	内：浅黄橙 7.5 YR 8／6 外：〃 〃	杯部の約60%		R 51
50	SK 7220	須恵器 杯	(口径) 10.6cm (器高) 3.6cm	体部ロクロナデ、内面ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	密	良好	内：灰 7.5 Y 5／1 外：〃 N 4／	約60%		R 68
51	SK 7220	須恵器 盌？	(口径) 8.3cm (器高) 3.9cm	体部ロクロナデ、内面ナデ、頂部ロクロケズリ後ナデ	微細な長石粒等含む	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：灰 5 Y 6／1	ほぼ完存	杯か？ ロクロ右回転	R 61
52	SK 7220	須恵器 平瓶	(残高) 7.3cm (胴部最大径) 12.3cm	体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密	良好	内：暗オリーブ灰 2.5 GY 4／1 外：灰 N 5／	口頸部のみ欠損	上面ら降下灰による自然釉、ロクロ右回転	R 70
53	SK 7220	須恵器 蓋	(口径) 10.6cm (器高) 2.9cm	体部ロクロナデ、頂部ロクロケズリ、貼付宝珠つまみ	密	良好	内：灰 7.5 Y 4／1 外：灰白 5 Y 7／1	ほぼ完存	上面に降下灰がゴマメ状に付着、ロクロ右回転	R 69
54	SK 7220	須恵器 蓋	(口径) 13.3cm (器高) 3.4cm	体部ロクロナデ、頂部ロクロケズリ、貼付宝珠つまみ	径2㎜～3㎜の小礫含むが密	良好	内：灰オリーブ 5 Y 6／2 外：〃 〃	約50%	ロクロ右回転	R 63
55	SK 7220	須恵器 蓋	(口径) 14.0cm (器高) 4.3cm	体部ロクロナデ、頂部ロクロケズリ、貼付宝珠つまみ	密	良好	内：暗灰 N 3／ 外：灰白 7.5 Y 6／1	完存	器形のゆがみ大 ロクロ右回転	R 64
56	SK 7220	須恵器 蓋	(口径) 16.9cm (器高) 3.7cm	体部ロクロナデ、頂部ロクロケズリ、貼付宝珠つまみ	径1㎜～5㎜の小礫含むが密	良好	内：灰 5 Y 4／1 外：灰白 5 Y 7／1	約70%	ロクロ左回転	R 62
57	SK 7220	土師器 甕	(口径) 23.6cm (残高) 7.9cm	口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面板ナデ	微細な砂質を多量に含むが密	ややあまい	内：灰黄褐 10 YR 6／2 外：にぶい黄橙 10 YR 7／4	口縁の約1／4	器表面の磨耗すすむ	R 56
58	SK 7220	土師器 甕	(口径) 13.8cm (残高) 5.2cm	口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ハケ後ナデ	黒色粒含むが精緻	ややあまい	内：にぶい黄橙 10 YR 7／3 外：黄灰 2.5 Y 6／1	約25%		R 58
59	SK 7220	土師器 把手付甕	(口径) 12.8cm (器高) 13.0cm	外面ハケ、内面ヘラケズリ口縁部内面ハケ	密	良好	内：橙 2.5 YR 7／6 外：淡黄 2.5 Y 8／3	約70%	外面に二次焼成による赤変みられる	R 71
60	SK 7220	土師器 甕	(口径) 15.9cm (器高) 17.2cm	口縁部ヨコナデ、体上部ナデ、下部ハケ、内面上部板ナデ、下半ヘラケズリ	極微細な砂粒含む	ややあまい	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	約90%	器表面の磨耗すすむ	R 67
61	SK 7220	土師器 甕	(口径) 14.4cm (器高) 16.2cm	外面ハケ、内面粗いハケとヘラケズリ	砂質多いが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	ほぼ完存	底部に焼成後穿孔？	R 66
62	SK 7220	土師器 甕	(口径) 14.9cm (台径) 16.7cm	外面ハケ、内面ハケのちヘラケズリ	砂質多いが密	ややあまい	内：浅黄橙 10 YR 8／3 外：橙 2.5 YR 7／6	約60%	外面に三角形のヘラ記号、頸部内面にヘラ当たり痕	R 73
63	SK 7220	須恵器 広口壺	(口径) 29.0cm (残高) 17.0cm	体部ロクロナデ、胴部外面平行タタキ目、内面同心円タタキ目、頸部に波状文	精緻	良好	内：灰白 10 Y 7／1 外：〃 〃	口縁の約1／3	口縁部内側に文字線刻とみられるものがある（判読不能）	R 60
64	SK 7220	須恵器 円面硯	(口径) 25.0cm (硯面径) 18.4cm (残高) 5.8cm	体部ロクロナデ、内面ナデ、硯面ロクロケズリ、17方向の方形透かし	精緻	良好	硯面：灰 N 6／2 内面：灰 5 Y 6／1 海　：灰オリーブ 5 Y 6／2	約30% 硯部のみ	硯面に墨痕あり	R 82

第108次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	SD 7252	須恵器 杯	(口径) 14.6cm (台径) 11.1cm (器高) 3.6cm	体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	微細な砂質含むが密	良好	内：灰 5Y 5/1 外：暗灰 N 3/	約60%	底部外面に「一」のヘラ線刻あり ロクロ左回転	R 116
2	SD 7252	須恵器 杯	(口径) 14.9cm (台径) 11.2cm (器高) 3.3cm	体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	微細な砂粒含むが密	良好	内：灰 5Y 5/1 外：〃	約70%	ロクロ左回転	R 117
3	SK 7261	土師器 杯	(口径) 10.5cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂質含む	良好	内：にぶい黄橙 10YR 7/4 外：〃	約40%		R 33
4	SK 7261	土師器 杯	(口径) 12.6cm (器高) 4.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	良好	内：明赤褐 5YR 5/6 外：〃	約40%	粘土接合痕残る	R 29
5	SK 7261	土師器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 4.2cm	口縁部ヨコナデ（内面二段）、体部ナデ	緻密	堅緻	内：橙 5YR 6/6 外：〃	約80%	内面に油煙の付着あり	R 32
6	SK 7261	土師器 杯	(口径) 13.2cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	堅緻	内：橙 5YR 6/6 外：〃	約70%		R 25
7	SK 7261	土師器 杯	(口径) 13.2cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	堅緻	内：橙 7.5YR 6/6 外：〃	ほぼ完存		R 26
8	SK 7261	土師器 杯	(口径) 13.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	堅緻	内：橙 5YR 7/8 外：〃	ほぼ完存		R 24
9	SK 7261	土師器 杯	(口径) 13.2cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	堅緻	内：明赤褐 2.5YR 5/6 外：〃	約70%		R 35
10	SK 7261	土師器 杯	(口径) 12.9cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	堅緻	内：橙 5YR 7/6 外：〃	ほぼ完存		R 23
11	SK 7261	土師器 杯	(口径) 16.5cm (器高) 3.9cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ	緻密	良好	内：橙 5YR 6/6 外：〃	約70%		R 30
12	SK 7261	土師器 杯	(口径) 16.6cm (器高) 3.8cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ	緻密	良好	内：橙 5YR 6/6 外：〃	約70%		R 31
12	SK 7261	土師器 皿	(口径) 18.8cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 5YR 6/6 外：〃	約50%		R 28
14	SK 7261	土師器 皿	(口径) 18.0cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 6/8 外：〃	約90%		R 26
15	SK 7261	土師器 皿	(口径) 18.3cm (器高) 2.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 6/8 外：〃	約90%		R 27
16	SK 7261	土師器 高杯	(口径) 21.2cm (脚径) 13.6cm (器高) 13.6cm	口縁・脚端部ヨコナデ、杯部外面ハケ・ヘラケズリ、脚部外面ケズリ	緻密	堅緻	内：橙 2.5YR 6/6 外：〃	約60%	杯部接合面にハケ目施す	R 34
17	SK 7261	土師器 鍋	(口径) 25.2cm (底径) 13.6cm (器高) 10.0cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・ケズリ、内面ハケ	緻密	堅緻	内：橙 5YR 6/6 外：〃	約50%		R 36
18	SK 7261	土師器 甕	(口径) 17.2cm (残高) 13.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ハケ・ケズリ	径2～3㎜の砂粒・小石含む	良好	内：橙 7.5YR 6/6 外：〃	約30%		R 37
19	SK 7261	須恵器 平瓶	(口径) 5.9cm (最大径) 15.6cm (残高) 9.8cm	口縁部・体部上半ロクロナデ、体部下半ロクロケズリ、内面ロクロナデ	密	良好	内：灰黄褐 10YR 5/2 外：〃	約40%	体部上面に灰オリーブ色の自然降灰釉あり ロクロ左回転	R 9
20	SK 7261	須恵器 甕	(口径) 13.7cm (残高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	密	良好	内：灰黄 2.5Y 7/2 外：〃	約30%	ロクロ右回転	R 8
21	SK 7261	須恵器 把手付盤	(口径) 35.6cm (底径) 18.2cm (器高) 8.3cm	口縁部ヨコナデ、外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ、底部外面無調整	微細な砂質多量にふくむが密	不良、極めて軟質	内：灰白 2.5Y 8/2 外：〃	約70%	ロクロ右回転 器表面の磨耗は極めて著しい	R 10
22	SK 7261	須恵器 甕	(口径) 39.2cm (残高) 25.2cm	口縁部ヨコナデ、体部外面平行タタキ目、内面ハケのち同心円タタキ目	密	あまく、軟調の焼上がり	内：灰白 5Y 8/2 外：〃	約30%	器表面の磨耗は極めて著しい	R 11
23	SK 7260	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 3.5cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 7.5YR 7/6 外：〃	ほぼ完存		R 13
24	SK 7260	土師器 杯	(口径) 13.4cm (器高) 3.7cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 7.5YR 7/6 外：〃	ほぼ完存		R 14
25	SK 7260	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 5YR 6/6 外：〃	ほぼ完存	内面に線刻による「＋」記号	R 19
26	SK 7260	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	良好	内：橙 5YR 6/8 外：〃	約90%		R 20
27	SK 7260	土師器 杯	(口径) 10.4cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 5YR 7/6 外：〃	約50%		R 15
28	SK 7260	土師器 杯	(口径) 17.8cm (器高) 4.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5YR 6/8 外：〃	約60%		R 21
29	SK 7260	土師器 皿	(口径) 14.5cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 5YR 6/8 外：〃	約90%		R 16
30	SK 7260	土師器 皿	(口径) 16.2cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	ややあまい	内：黄褐 7.5YR 7/8 外：〃	約70%	器表面の磨耗著しい	R 22
31	SK 7260	土師器 高杯	(口径) 24.2cm (残高) 18.8cm	口縁・脚端部ヨコナデ、杯部外面ハケ、脚部外面ケズリ、内面ナデ	緻密	堅緻	内：明赤褐 5YR 5/8 外：〃	約70%	杯部接合面にハケ目施す	R 12
32	SK 7260	須恵器 蓋	(口径) 21.8cm (残高) 2.4cm	口縁部ヨコナデ、体部上面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	微細な砂粒含むが密	やや軟調	内：灰 N 6/ 外：〃 7.5Y 6/1	約40%	ロクロ左回転	R 6

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
33	SK 7260	須恵器 蓋	(口径) 19.0cm (残高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部上面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	径1㎜以下の白色粒わずかに含む	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	約80%	ロクロ右回転	R 4
34	SK 7260	須恵器 杯	(口径) 9.3cm (台径) 6.0cm (器高) 3.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	密	良好	内：浅黄 2.5 YR 7／3 外：〃 〃	ほぼ完存	体部外面下半に布目と思われる痕跡がある ロクロ左回転	R 1
35	SK 7260	須恵器 杯	(台径) 11.5cm (残高) 2.8cm	体部ロクロナデ、貼付高台	密	良好	内：灰白 2.5 Y 8／2 外：〃 〃	約40%	ロクロ右回転	R 3
36	SK 7260	須恵器 杯	(口径) 12.4cm (器高) 3.0cm	体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	約70%	ロクロ左回転 口縁内面に自然釉がゴマ目状に付着	R 2
37	SK 7260	須恵器 広口壺	(口径) 24.4cm (残高) 5.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	緻密、長石粒をわずかに含む	良好	内：暗灰黄 2.5 Y 4／2 外：オリーブ黒 5 Y 3／2	口縁の約1／4	ロクロ左回転 火がかりや降灰による自然釉が付着	R 5
38	SK 7260	須恵器 平瓶？	(口径) 15.0cm (残高) 5.9cm	口縁部ヨコナデ、頸部ロクロナデ	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃	口縁の約1／4		R 7
39	SK 7260	土師器 甕	(口径) 22.8cm (残高) 11.5cm	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内：明黄褐 7.5 YR 6／6 外：橙 10 YR 7／6	口縁の約1／4	外面にスス付着	R 18
40	SK 7260	土師器 鍋	(口径) 32.8cm (残高) 17.6cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・ケズリ、内面ケズリ	微細な砂粒含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃 外下半：褐灰 10 YR 5／1	約60%		R 17
41	SK 7288	土師器 杯	(口径) 12.4cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ外面ヘラケズリ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／6 外：〃 〃	約70%		R 51
42	SK 7288	土師器 杯	(口径) 12.3cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約60%		R 50
43	SK 7288	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／6 外：〃 〃	約30%		R 52
44	SK 7288	土師器 皿	(口径) 15.4cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5 YR 6／8 外：〃 〃	約40%		R 54
45	SK 7288	土師器 皿	(口径) 17.1cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約90%		R 53
46	SK 7288	須恵器 杯	(口径) 12.3cm (台径) 8.9cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底面外面ヘラケズリ	密	良好	内：浅黄 2.5 YR 7／3 外：〃 〃	約40%	ロクロ右回転	R 49
47	SK 7288	須恵器 蓋	(口径) 17.5cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、上半ロクロケズリ	微細な砂粒含むが密	良好	内：灰黄 2.5 YR 6／2 外：〃 〃	約60%	ロクロ左回転	R 47
48	SK 7288	須恵器 盤	(口径) 20.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	約50%	ロクロ右回転	R 48
49	SK 7290	土師器 杯	(口径) 10.1cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5 ／6 外：〃 〃	約70%		R 107
50	SK 7290	土師器 杯	(口径) 12.7cm (器高) 3.5cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約70%		R 113
51	SK 7290	土師器 杯	(口径) 12.6cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／6 外：〃 〃	約50%		R 115
52	SK 7290	土師器 杯	(口径) 17.3cm (器高) 17.3cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約40%		R 114
53	SK 7290	土師器 杯	(口径) 13.5cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5 ／8 外：〃 〃	約90%		R 108
54	SK 7290	土師器 杯	(口径) 17.6cm (器高) 4.6cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ	緻密	堅緻	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約60%	内面に5単位の螺旋状暗文	R 112
55	SK 7290	土師器 皿	(口径) 15.8cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約60%		R 111
56	SK 7290	土師器 皿	(口径) 17.8cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約70%		R 109
57	SK 7290	土師器 鍋	(口径) 35.4cm (器高) 15.1cm	口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ、内面下半ヘラケズリ	密	良好	内：にぶい橙 7.5 YR 6／4 外：〃 〃	口縁の約1／2	外面に二次焼成の赤変がある	R 106
58	SK 7258	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5 ／8 外：〃 〃	ほぼ完存		R 121
59	SK 7275	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.6cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5 YR 6／8 外：〃 〃	約90%		R 118
60	SK 7275	土師器 杯	(口径) 17.5cm (器高) 3.8cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5 YR 6／8 外：〃 〃	約30%		R 119
61	SK 7275	土師器 台付鉢	(口径) 19.0cm (台径) 9.8cm (器高) 5.8cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ、貼付高台	密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約40%		R 120
62	SD 7273	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	約30%		R 128
63	SD 7273	土師器 杯	(口径) 13.4cm (器高) 3.4cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5 YR 7 ／6 外：〃 〃	約30%	底部外面に明瞭に掌痕残る	R 126
64	SD 7273	土師器 台付杯	(口径) 13.5cm (台径) 6.5cm (器高) 4.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ、貼付高台	やや砂質多いが密	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	約40%	器表面の磨耗著しい	R 124
65	SD 7273	須恵器 椀	(口径) 13.2cm (台径) 6.6cm (器高) 4.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、貼付高台、底部外面糸切り後ナデ	密	良好	内：にぶい黄 2.5 Y 6／3 外：灰 7.5 Y 4／1	約50%	内面に灰かぶりの痕跡がある	R 122

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
66	SD 7273	須恵器 杯？	(台径) 7.2cm (残高) 1.9cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底面外面ナデ	密	ややあまい	内：灰 7.5 Y 6／1 外：〃 〃	高台の約1／3	ロクロ左回転	R 127
67	SD 7273	灰釉陶器 皿	(口径) 14.4cm (台径) 7.3cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、貼付高台、底部外面ナデ、灰釉刷毛塗	密	良好	内：灰黄 2.5 YR 7／2 外：〃 〃 釉：オリーブ黄 5 Y 6／3	約30%	内面見込み部に三叉トチ痕残る ロクロ右回転か？	R 125
68	SD 7273	須恵器 広口壺	(口径) 27.4cm (残高) 7.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良好	内：にぶい黄 2.5 Y 6／3 外：灰 5 Y 4／1	口縁の約1／8	内面に降灰によるゴマメ状の自然釉付着	R 123
69	SK 7250	土師器 杯	(口径) 15.3cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	ほぼ完存	底部外面に籾圧痕が僅かに残る	R 41
70	SK 7250	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	完存		R 38
71	SK 7250	土師器 杯	(口径) 14.3cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	ほぼ完存	内面に線刻による「十」記号	R 40
72	SK 7250	土師器 杯	(口径) 14.7cm (器高) 3.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	ほぼ完存		R 39
73	SK 7250	土師器 杯	(口径) 17.6cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約50%		R 42
74	SK 7250	土師器 皿	(口径) 14.0cm (器高) 1.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	完存		R 44
75	SK 7250	土師器 皿	(口径) 14.2cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約90%	粘土接合痕残る	R 46
76	SK 7250	土師器 皿	(口径) 14.6cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約70%		R 45
77	SK 7250	土師器 皿	(口径) 16.2cm (器高) 2.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	緻密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	完存		R 43
78	SK 7262	土師器 皿	(口径) 14.9cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	約60%		R 99
79	SK 7262	土師器 台付皿	(台径) 8.1cm (残高) 2.1cm	体部外面ハケ、内面ナデ貼付高台	密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約50%	皿部接合部にハケ目施す	R 98
80	SK 7317	土師器 杯	(口径) 12.8cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／3 外：〃 〃	ほぼ完存	外面の剝離著しい	R 66
81	SK 7317	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	完存	器表面の剝離著しい	R 67
82	SK 7317	土師器 杯	(口径) 14.5cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約70%		R 68
83	SK 7326	土師器 杯	(口径) 12.6cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 6／3 外：〃 〃	約40%		R 104
84	SK 7326	土師器 杯	(口径) 14.2cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	約50%		R 105
85	SK 7326	灰釉陶器 椀	(台径) 6.6cm (残高) 1.8cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕、貼付高台	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃	約40%	ロクロ右回転	R 103
86	SK 7326	灰釉陶器 椀	(台径) 6.6cm (残高) 2.6cm	体部ロクロナデ、底部ヘラケズリ、貼付高台	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃	約30%	ロクロ右回転	R 102
87	SK 7321	土師器 杯	(口径) 12.1cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質含むが良	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	ほぼ完存	爪あるいは工具の連続圧痕（型作りの痕跡か？）	R 69
88	SK 7321	土師器 杯	(口径) 12.3cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質含むが良	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	ほぼ完存		R 70
89	SK 7321	土師器 杯	(口径) 12.0cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	ほぼ完存		R 72
90	SK 7321	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	約70%		R 73
91	SK 7321	土師器 杯	(口径) 14.8cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約80%		R 74
92	SK 7321	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが密	良好	内：橙 5 YR 7／6 外：〃 〃	約70%	器表面の磨耗著しい	R 71
93	SK 7321	土師器 杯	(口径) 12.6cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが密	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	完存		R 75
94	SK 7321	土師器 皿	(口径) 11.2cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／3 外：〃 〃	ほぼ完存		R 78
95	SK 7321	土師器 皿	(口径) 12.0cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい橙 7.5 YR 7／4 外：〃 〃	ほぼ完存		R 77
96	SK 7321	土師器 皿	(口径) 12.1cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい橙 7.5 YR 7／4 外：〃 〃	完存		R 76
97	SK 7323	土師器 杯	(口径) 12.1cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約30%		R 61
98	SK 7323	土師器 杯	(口径) 12.0cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：灰 5 Y 6／1 外：〃 〃	約50%		R 60

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
99	SK 7323	土師器 杯	(口径) 11.8cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	約70%		R 62
100	SK 7323	土師器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 1.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	約40%	器形のゆがみ大	R 63
101	SK 7323	土師器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約30%		R 64
102	SK 7323	土師器 台付皿	(口径) 13.8cm (台径) 7.0cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ、貼付高台	やや砂質多いが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約70%		R 59
103	SK 7323	土師器 台付皿	(口径) 14.0cm (台径) 7.8cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ、貼付高台	密	良好	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	約80%		R 58
104	SK 7322	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／3 外：〃 〃	約60%	器形のゆがみ大	R 56
105	SK 7322	土師器 杯	(口径) 14.7cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい橙 7.5 YR 6／4 外：〃 〃	約30%		R 55
106	SK 7322	土師器 皿	(口径) 15.0cm (器高) 2.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／3 外：〃 〃	約30%		R 57
107	SK 7289	土師器 台付小皿	(口径) 10.4cm (台径) 5.1cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、貼付高台、底部外面ナデ	微細な砂質(金雲母片等)含むが密	良好	内：にぶい褐 7.5 YR 5／4 外：〃 〃	完存		R 264
108	SK 7289	土師器 台付小皿	(口径) 11.6cm (台径) 6.0cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、貼付高台、底部外面ナデ	微細な砂質(金雲母片等)含むが密	良好	内：にぶい褐 7.5 YR 5／4 外：〃 〃	完存		R 65
109	SK 7289	土師器 台付杯	(台径) 11.4cm (残高) 5.8cm	体部ナデ、貼付高台	微細な砂質多量に含む	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	脚台部のみ残存		R 63
110	SK 7324	土師器 粗製盤	(残高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ、底部無調整	微細な砂粒多量に含むが密	ややあまい	内：にぶい黄橙 10 YR 6／3 外：〃 〃	約80%	内面いびつで、整形不充分	R 101
111	SK 7324	灰釉陶器 椀	(台径) 7.0cm (残高) 3.8cm	体部ロクロナデ、底部外面ロクロナデ、貼付高台	緻密	堅緻	内：浅黄 2.5 Y 7／3 外：〃 〃	約30%	灰釉不鮮明	R 100
112	SD 7309	ロクロ土師器 杯	(口径) 8.6cm (台径) 3.0cm (器高) 2.0cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕	砂質多いが密	やや軟質	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	約50%	ロクロ右回転 あるいは蓋か？	R 171
113	SD 7309	ロクロ土師器 杯	(口径) 7.7cm (台径) 4.0cm (器高) 2.5cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕	微細な砂質多量に含むが密	あまい	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	約60%	器表面の磨耗著しい	R 173
114	SD 7309	ロクロ土師器 杯	(底径) 4.1cm (残高) 2.8cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕	微細な砂質含むが密	やや軟質	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	約70%		R 175
115	SD 7309	ロクロ土師器 杯	(口径) 9.9cm (台径) 5.5cm (器高) 2.8cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕、貼付高台	微細な砂質多量に含むが密	やや軟質	内：橙 7.5 YR 7／6 外：〃 〃	約30%	ロクロ右回転	R 172
116	SD 7309	灰釉陶器 椀	(台径) 6.4cm (残高) 1.3cm	体部ロクロナデ、底部外面糸切痕、貼付高台	密	良好	内：浅黄 2.5 Y 7／3 外：〃 〃	高台の約1／2	ロクロ左回転	R 174
117	SD 7309	陶器 杯	(口径) 9.4cm (台径) 4.0cm (器高) 2.7cm	体部ロクロナデ、体部外面ナデ、よわい貼付高台	微細な砂質多量に含むが密	ややあまい	内：にぶい黄褐 10 YR 7／4 外：〃 〃	約70%	ロクロ右回転	R 170
118	SD 7309	ロクロ土師器 杯	(台径) 5.4cm (残高) 2.3cm	体部ロクロナデ、底部外面ナデ、貼付高台	密	ややあまい	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	高台部のみ残存		R 169
119	SD 7308	陶器 小椀	(台径) 4.0cm (残高) 1.6cm	体部ロクロナデ、底部外面ナデ、貼付高台	多量に砂質含むが密	良好	内：灰褐 7.5 YR 4／2 外：〃 〃	高台部のみ残存	ロクロ右回転	R 168
120	SD 7308	陶器 皿	(口径) 9.7cm (台径) 4.7cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面ロクロナデ、貼付高台	砂質多いが密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃 釉：淡灰緑	約70%	ロクロ左回転 口縁部外面から内面にかけて自然釉付着	R 167
121	SD 7269	土師器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質を多量に含む	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	約70%	粘土接合痕残る 口縁端部によわい面取り	R 130
122	SD 7269	土師器 皿	(口径) 13.4cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質を多量に含むが密	良好	内：明黄褐 10 YR 7／6 外：〃 〃	約90%		R 132
123	SD 7269	土師器 皿	(口径) 13.8cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂質を多量に含む	あまい	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	約60%	白色系 器表面の磨耗著しい	R 131
124	SD 7269	土師器 小皿	(口径) 8.7cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質を多量に含む	良好	内：暗灰黄 1.5 Y 5／2 外：〃 〃	約60%		R 138
125	SD 7269	ロクロ土師器 椀	(口径) 13.9cm (底径) 7.5cm (器高) 4.5cm	体部ロクロナデ、底部糸切痕	微細な砂質多いが密	良好	内：橙 5 YR 6／8 外：〃 〃	約70%		R 133
126	SD 7269	灰釉陶器 三足盤	(口径) 17.2cm (残高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、灰釉刷毛塗	密	良好	内：オリーブ黄 5 Y 6／3 外：〃 〃	口縁の約1／7		R 180
127	SD 7269	土師器 高杯	(残高) 8.5cm	外面ヘラケズリ、内面ナデ	径2～3mmの砂粒含むが密	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	脚部のみ残存		R 135
128	SD 7269	灰釉陶器 椀	(台径) 7.6cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、底部外面糸切痕、貼付高台	微細な砂粒含むが密	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	高台部のみ残存	ロクロ左回転	R 134
129	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.7cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約50%		R 156
130	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	砂質多量に含むが密	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	約90%		R 150
131	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／3 外：〃 〃	約40%		R 159

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
132	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 9.0cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	約50%	粘土接合痕残る	R 157
133	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 9.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／3 外：〃 〃	約30%		R 158
134	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 9.4cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	砂質を多量に含む	ややあまい	内：明黄褐 10 YR 6／6 外：浅黄橙 10 YR 8／4	完存	器表面の磨耗著しい	R 155
135	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	完存	粘土接合痕残る	R 153
136	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 9.2cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含む	ややあまい	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	完存		R 154
137	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 9.7cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含む	良好	内：淡黄 2.7 Y 8／3 外：〃 〃	約70%		R 143
138	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (器高) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケのちナデ、外面ナデ	緻密	良好	内：色 5 YR 6／6 外：〃 〃	約30%	京都系「て」の字口縁 内面に薄くカキ目痕が残る	R 145
139	SD 7307	土師器 皿	(口径) 8.8mm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	完存	粘土接合痕残る	R 153
140	SD 7307	土師器 皿	(口径) 13.8 m (器高) 3.8cm	口縁部二段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質を多量に含むが密	やや軟調	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	約40%		R 163
141	SD 7307	土師器 皿	(口径) 13.0cm (残高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	約20%	内面にヘラ状工具の当たり痕が残る	R 162
142	SD 7307	土師器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 6／4 外：〃 〃	約60%		R 161
143	SD 7307	土師器 皿	(口径) 14.0cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄 2.5 Y 7／3 外：黒褐 10 YR 3／2	約70%		R 160
144	SD 7307	土師器 皿	(口径) 13.5cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	約60%		R 165
145	SD 7307	ロクロ土師器 杯	(口径) 8.1cm (底径) 3.4cm (器高) 1.7cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	密	あまい	内：浅黄橙 10 YR 8／3 外：〃 〃	ほぼ完存	ロクロ右回転	R 147
146	SD 7307	ロクロ土師器 小皿	(口径) 9.2cm (底径) 6.6cm (器高) 1.7cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	密	やや軟質	内：浅黄橙 7.5 YR 8／4 外：〃 〃	約40%	ロクロ左回転	R 146
147	SD 7307	ロクロ土師器 杯	(底径) 6.2cm (残高) 2.0cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	密	やや軟質	内：灰白 2.5 Y 8／2 外：〃 〃	約50%	ロクロ右回転	R 164
148	SD 7307	土師器 台付皿	(台径) 5.4cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台	密	ややあまい	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約50%		R 166
149	SD 7307	土師器 台付皿	(台径) 7.0cm (残高) 3.3cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部外面糸切痕	密	堅緻	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	脚台部のみ残存	ロクロ左回転	R 151
150	SD 7307	ロクロ土師器 台付杯	(口径) 10.5cm (台径) 5.2cm (器高) 3.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、貼付高台	密	堅緻	内：橙 5 YR 6／6 外：〃 〃	約80%	ロクロ右回転	R 144
151	SD 7307	陶器 椀 (山茶椀)	(台径) 6.3cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、底部外面糸切痕、貼付高台	微細な砂粒を多量に含むが密	良好	内：灰白 5 Y 8／1 外：〃 〃	高台の約1／2	ロクロ右回転	R 148
152	SD 7307	陶器 椀 (山茶椀)	(台径) 5.5cm (残高) 3.1cm	体部ロクロナデ、底部外面ナデ、貼付高台	密	やや軟質	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	高台の約1／4	ロクロ左回転	R 149
153	SD 7307	陶器 椀 (山茶椀)	(口径) 16.3cm (台径) 6.2cm (器高) 5.6cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ロクロナデ、内面ナデ底部外面ナデ、貼付高台	微細な砂質多量に含む	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	約90%	ロクロ右回転、高台畳付に籾圧痕、体部内面1／2に自然降灰釉	R 142
154	SK 7305	土師器 小皿	(口径) 9.1cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	完存		R 85
155	SK 7305	土師器 小皿	(口径) 9.1cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	完存	底部外面にかすかに黒斑がある	R 84
156	SK 7305	土師器 小皿	(口径) 9.1cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄 2.5 Y 7／3 外：〃 〃	完存	粘土接合痕あり	R 86
157	SK 7305	土師器 小皿	(口径) 9.6cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	完存		R 87
158	SK 7305	土師器 小皿	(口径) 10.8cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含む	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	完存	内面にヘラ状工具の当たり痕残る	R 88
159	SK 7305	土師器 皿	(口径) 12.4cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄 2.5 Y 7／3 外：〃 〃	約40%		R 91
160	SK 7305	土師器 皿	(口径) 11.2cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	完存		R 82
161	SK 7305	土師器 皿	(口径) 12.9cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含む	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	完存	口縁端部に油煙付着	R 80
162	SK 7305	土師器 皿	(口径) 13.4cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：明黄褐 10 YR 6／6 外：〃 〃	ほぼ完存	器表面の磨耗著しい	R 81
163	SK 7305	土師器 皿	(口径) 14.0cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃	約70%		R 89
164	SK 7305	土師器 皿	(口径) 13.7cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含む	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	ほぼ完存	粘土接合痕残る	R 79

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
165	SK 7305	土師器 皿	(口径) 14.1cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／4 外：〃 〃	完存	粘土接合痕残る	R 90
166	SK 7305	土師器 器台	(残高) 17.5cm	脚柱部外面ヘラケズリ、台部・脚底部ナデ	径1㎜～2㎜の砂粒多量に含む	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	脚柱部のみ残存	白色系	R 94
167	SK 7305	ロクロ土師器 台付杯	(台径) 4.9cm (残高) 2.7cm	体部ロクロナデ、底部外面糸切後ナデ、貼付高台	密	良好	内：淡黄 2.5 Y 8／3 外：〃 〃	約50%	ロクロ右回転	R 92
168	SK 7305	ロクロ土師器 台付杯	(台径) 6.9cm (残高) 2.7cm	体部ロクロナデ、底部外面ロクロナデ、貼付高台	砂質を多量に含むが密	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	約50%	ロクロ左回転	R 93
169	SK 7305	ロクロ土師器 台付杯	(口径) 11.2cm (台径) 5.4cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面糸切痕、貼付高台	密	良好	内：橙 7.5 YR 6／6 外：〃 〃	約70%	ロクロ右回転	R 95
170	SK 7305	ロクロ土師器 杯	(口径) 9.8cm (底径) 4.4cm (器高) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：浅黄橙 10 YR 8／4 外：〃 〃	完存	ロクロ右回転	R 83
171	SB 7300	須恵器 蓋	(口径) 13.3cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、体部上面3／5ロクロケズリ	径1㎜程度の砂粒含むが密	良好	内：灰 5 Y 5／1 外：〃 〃	約40%	朱付着土器、ロクロ右回転やや磨耗する	R 199
172	SK 7317	灰釉陶器 皿	(台径) 6.2cm (残高) 1.9cm	体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	緻密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃 釉：灰白 2.5 Y 8／2	高台部のみ残存	朱付着土器、磨耗著しいロクロ左回転、底部に墨痕あるが判読不可能	R 198
173	包含層	須恵器 盤	(底径) 11.9cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、底部外面無調整	密だが、やや砂質多い	良好	内：浅黄 2.5 Y 5／3 外：灰白 5 Y 7／1	底部の約1／3	朱付着土器、やや磨耗、ロクロ右回転	R 203
174	包含層	灰釉陶器 椀	(台径) 6.8cm (残高) 1.7cm	体部ロクロナデ、底部外面軽いナデ、貼付高台	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	高台の約1／4	朱付着土器、ほとんど磨耗なし	R 204
175	SK 7261	須恵器 蓋	(口径) 20.8cm (器高) 2.0cm	口縁部ロクロナデ、体部上面1／2ロクロケズリ	密	良好	内：灰オリーブ 5 Y 6／2 外：灰白 7.5 Y 7／1	約30%	朱付着土器、破断面にも朱付着、ロクロ右回転	R 200
176	SD 7276	須恵器 盤	(口径) 18.8cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：灰白 5 Y 7／1 外：〃 〃	約50%	朱付着土器、内外面付着内面やや磨耗すすむ、ロクロ右回転	R 205
177	SK 7260	土師器 杯	(口径) 17.4cm (器高) 4.5cm	口縁部多段ヨコナデ、体部ていねいなナデ	密	良好	内：明赤褐 5 YR 5／6 外：〃 〃	約60%	漆付着土器、内面全体に付着	R 254
178	SK 7288	土師器 杯	(口径) 16.2cm (器高) 4.3cm	口縁部多段ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂質をやや含むが密	良好	内：明赤褐 2.5 YR 5／8 外：〃 〃	約40%	漆付着土器、内面全体に付着	R 212
179	SK 7288	土師器 杯	(口径) 18.1cm (器高) 4.0cm	体部内面ナデ、外面ヘラケズリ	密	良好	内：灰褐 7.5 YR 4／2 外：明赤褐 2.5 YR 5／6	約40%	漆付着土器、内面下半に付着	R 213
180	SK 7250	土師器 皿	(口径) 14.8cm (器高) 1.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良好	内：橙 5 YR 6／8 外：〃 〃	約40%	漆（油煙？）付着土器、内面にわずかに付着	R 211
181	包含層	須恵器 円面硯	(硯面径) 11.4cm (残高) 6.4cm	体部ロクロナデ、縁部ヨコナデ	密	良好	内：灰白 7.5 Y 7／1 外：〃 〃	硯面の約1／4	脚部外面に自然釉が上に向かって垂れる、内面に自然釉ゴマメ状に付着	R 189
182	G－15 Pit－10	須恵器 円面硯	(硯面径) 12.2cm (残高) 2.8cm	体部ロクロナデ、縁部ヨコナデ	密	良好	内：淡黄 2.5 Y 7／3 外：灰白 5 Y 7／3	硯面の約1／8	183と同一個体か？脚部に2本一組の線刻	R 190
183	SK 7288	須恵器 円面硯	(台径) 16.4cm (残高) 1.4cm	脚端部ヨコナデ	密	良好	内：淡黄 2.5 Y 7／3 外：灰白 5 Y 7／3	脚台の約1／8	183と同一個体か？脚部に2本一組の線刻	R 191
184	SK 7261	須恵器 円面硯	(台径) 14.4cm (残高) 1.9cm	脚端部ヨコナデ	密	良好	内：にぶい黄褐 10 YR 5／3 外：にぶい赤褐 5 YR 4／3	脚台の約1／3	脚部に幅3㎜程度の透かしをいれる	R 192
185	SD 7269	灰釉陶器 風字硯	－	全面ヘラケズリで成形	密	良好	内：浅黄 2.5 Y 7／3 外：〃 〃	－		R 193
186	SB 7285	須恵器 蓋	(口径) 15.2cm (器高) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、体部上面1／2ロクロケズリ	密	良好	灰 5 Y 5／1 外：暗灰黄 2.5 Y 5／1	約30%	転用硯、内面に墨痕、磨耗すすむ、ロクロ右回転	R 185
187	包含層	須恵器 盤	(口径) 17.0cm (台高) 10.8cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	密	ややあまい	内：灰 7.5 Y 6／1 外：〃 〃	約20%	転用硯、内面に墨痕、磨耗すすむ	R 183
188	SK 7260	須恵器 盤	(口径) 25.0cm (残高) 3.7cm	口縁部・体部内面ロクロナデ、底部外面下半ロクロケズリ	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 6／2 外：〃 〃	口縁の約1／8	転用硯、内面に墨痕はあるが、磨耗は少ない	R 186
189	SD 7311	灰釉陶器 椀	(台径) 7.0cm (器高) 3.9cm	体部ロクロナデ、底部糸切後ナデ、貼付高台、灰釉浸けかけ	密	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃	約60%	転用硯、内面に墨痕があり、やや磨耗、ロクロ右回転	R 181
190	SD 7257	須恵器	(台径) 7.9cm (残高) 1.7cm	体部ロクロナデ、底部外面ナデ、貼付高台	密	良好	内：灰 5 Y 6／1 外：〃 〃	高台部のみ残存	転用硯、内面に墨痕、磨耗すすむ、ロクロ右回転	R 184
191	包含層	須恵器 杯	(台径) 9.7cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、底部外面ナデ、貼付高台	密	良好	内：灰白 7.5 Y 7／1 外：〃 〃	高台の約1／2	転用硯、底部に墨痕、磨耗は少ない	R 187
192	SK 7250	陶器 椀 (山茶椀)	(台径) 7.4cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕、貼付高台	砂質多いが密、淡黒色の斑点が混じる	良好	内：灰黄 2.5 Y 7／2 外：〃 〃	約40%	転用硯、内面に墨痕、磨耗すすむ、ロクロ右回転	R 182
193	包含層	陶器 椀 (山茶椀)	(台径) 7.5cm (残高) 2.8cm	体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕、貼付高台	微細な砂質多く、径1㎜ほどの黒点含む	良好	内：灰白 5 Y 7／2 外：〃 〃	底部のみ残存	底部外面に「中」の墨書、高台に籾圧痕	R 196
194	包含層	陶器 把手付壺	－	外面ロクロヘラケズリ、内面ロクロナデ	密	良好	内：緑灰色の灰釉 外：浅黄 2.5 Y 7／3	肩部片のみ残存	外面に「某（?）」の線刻	**R 194**
195	包含層	ミニチュア 土器 盤	(口径) 4.8cm (残高) 1.7cm	体部ナデ	微細な砂質多量に含むが密	良好	内：にぶい黄橙 10 YR 7／3 外：〃 〃	口縁の約1／2	土師器	R 206
196	SK 7272	緑釉陶器 把手付瓶	－	外面ヘラケズリ	緻密	軟質	釉：苔色（ダル・イエロー・グリーン） 胎土：灰白 10 Y 7／1	把手部のみ残存	5方向の面取り	R 215
197	包含層	緑釉陶器 皿	(口径) 16.6cm (台径) 8.7cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラミガキ、底部外面ヘラミガキ、貼付高台	緻密	硬質 堅緻	釉：抹茶色(グレイッシュ・イウロー・グリーン) 胎土：灰黄褐 10 YR 6／2	約30%		R 214

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
198	SK 7321	白磁 碗	(残高) 3.1cm	外面ケズリ、内面ナデの上に薄く均質な白色釉	緻密	堅緻	釉：灰白 7.5Y 8/1 胎土：にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁の一部のみ残存	玉縁口縁、外面に火をうけたよう な斑文	R 207
199	SD 7254	白磁 碗	(台径) 6.9cm (器高) 2.0cm	内面ロクロナデ、削り出しの輪高台	密	良好	釉：灰白 5Y 8/2 胎土：灰黄 2.5Y 7/2	高台部の約1/2	釉垂れがあり、わずかに気泡を含む	R 209
200	SK 7305	白磁 碗	(台径) 6.4cm (器高) 3.4cm	体部ロクロナデ、削り出し輪高台	緻密だが、微細な気孔みられる	堅緻	釉：灰オリーブ 7.5Y 6/2 胎土：灰白 5Y 8/1	高台部の約1/2	見込み部の釉に細かな気泡がみられる	R 208
201	SK 7305	青磁 碗	(台径) 5.5cm (器高) 1.9cm	体部のロクロケズリ？削り出し輪高台	緻密	良好	釉：オリーブ灰 2.5GY 6/1 胎土：灰白 5Y 7/2	高台部の約1/2	見込み部に亀裂 龍泉窯系	R 210
202	包含層	陶器 小皿	(口径) 8.2cm (底径) 2.3cm (器高) 3.8cm	体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕	密	良好	内：灰黄 2.5Y 6/2 外：〃 〃	約60%	須恵器質、外部半面に火がかり痕 ロクロ右回転	R 255
203	包含層	陶器 椀？	(口径) 6.4cm (残高) 1.0cm	体部ロクロナデ、底部外面ナデ、僅かな貼付高台	砂質多量に含むが密	良好	内：灰白 2.5Y 8/2 外：〃 〃	高台部の約1/2	山茶椀質 ロクロ右回転	R 258
204	包含層	陶器 椀	(口径) 6.6cm (残高) 2.0cm	体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕	密	良好	内：灰白 5Y 7/1 外：灰 N 5/	底部の約1/2	須恵器質 ロクロ右回転	R 261
205	包含層	陶器 椀	(口径) 7.1cm (残高) 2.1cm	体部ロクロナデ、底部外面糸切後軽いナデ、貼付高台	径2㎜程度の小石含むが密	堅緻	内：灰黄 2.5Y 6/2 外：〃 〃	高台部のみ残存	須恵器質、高台に籾圧痕内底面に高台に沿って凹線、ロクロ右回転	R 256
206	包含層	灰釉陶器 椀	(口径) 12.8cm (台径) 6.5cm (器高) 4.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、体部外面ナデ貼付高台	密	堅緻	内：灰黄 2.5Y 7/2 外：〃 〃	約30%	須恵器質？灰釉すべてとぶ、内面にゴマメ状の自然降灰釉、ロクロ右回転	R 257
207	包含層	陶器 椀	(口径) 15.6cm (底径) 6.8cm (器高) 4.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部外面回転糸切痕、見込み部にカキ目が残る	微細な砂質多量に含むが密	あまい	内：灰オリーブ 5Y 6/2 外：〃 〃	約30%	SK 7350か？ 須恵器質、ロクロ右回転	R 260
208	包含層	陶器 鉢	(口径) 21.6cm (底径) 10.5cm (器高) 5.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、見込み部コテ当て、底部ヘラ起こしのみ	密	良好	内：黄褐 2.5Y 5/3 外：オリーブ黒 5Y 3/1	約20%	須恵器質、内面にゴマメ状の灰被り	R 259
209	SK 7314	須恵器 甕？	—	底部外面ナデ、内面同心円に「＋」字のタタキ目	密	軟調	内：灰オリーブ 5Y 6/2 外：〃 〃	底部片のみ	底部に板目状の当たり痕跡もある	R 176
210	SK 7269	須恵器 甕？	—	外面縄席状、内面同心円に「＋」字の叩き目	密	良好	内：灰オリーブ 5Y 6/1 外：〃 〃	—	212と同一固体？	R 178
211	SD 7314	須恵器 甕？	—	外面格子状、内面同心円に「＋」字の叩き目	密	良好	内：灰オリーブ 5Y 6/1 外：〃 〃	—		R 177
212	SK 7269	須恵器 甕？	—	外面縄席状、内面同心円に「＋」字の叩き目	密	良好	内：灰オリーブ 5Y 6/1 外：〃 〃	—	210と同一固体？	R 179

No.	出土遺構	器種	法量	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
213	SK 7261	土製品 土錘	(長) 5.7cm (孔径) — cm (幅) 3.7cm (残重) 56.6g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/4	ほぼ完存	変型工字形土錘 土師質	R 239
214	SK 7261	土製品 土錘	(長) 5.9cm (孔径) — cm (幅) 3.5cm (残重) 44.6g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/4 黒斑がある	約80%	変型工字形土錘 土師質	R 240
215	SK 7261	土製品 土錘	(長) 6.0cm (孔径) 1.3cm (幅) 3.7cm (残重) 67.4g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 6/4	約70%	管状土錘 土師質	R 248
216	SK 7261	土製品 土錘	(長) 6.5cm (孔径) 1.2cm (幅) 4.0cm (残重) 94.3g	密	良好	暗灰黄 2.5Y 5/2	完存	管状土錘 土師質	R 238
217	SK 7261	土製品 土錘	(長) 6.2cm (孔径) 0.7cm (幅) 2.6cm (残重) 31.9g	密	良好	灰黄 2.5Y 6/2	両端部欠損	管状土錘 土師質	R 247
218	SK 7261	土製品 土錘	(長) 6.9cm (孔径) 0.8cm (幅) 2.8cm (残重) 36.6g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/4	両端部欠損	管状土錘 土師質	R 246
219	SD 7254	土製品 土錘	(長) 6.2cm (孔径) 0.4cm (幅) 1.9cm (残重) 12.3g	密	良好	灰黄 2.5Y 6/2	完存	管状土錘、土師質 両端部面取りあり	R 253
220	SK 7261	土製品 土錘	(長) 6.2cm (孔径) 0.9cm (幅) 2.8cm (残重) 42.1g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/4	ほぼ完存	管状土錘、土師質 両端部面取りあり	R 249
221	SK 7261	土製品 土錘	(長) 6.2cm (孔径) 0.4cm (幅) 1.7cm (残重) 12.8g	密	良好	橙 5YR 6/6	両端部欠損	管状土錘 土師質	R 251
222	SK 7261	土製品 土錘	(長) 5.4cm (孔径) 0.6cm (幅) 1.8cm (残重) 19.5g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/3	完存	管状土錘、土師質 両端部面取りあり	R 245
223	SK 7261	土製品 土錘	(長) 5.3cm (孔径) 0.5cm (幅) 1.9cm (残重) 13.6g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/3	完存	管状土錘、土師質 両端部面取りあり	R 252
224	SK 7261	土製品 土錘	(長) 5.0cm (孔径) 0.6cm (幅) 2.0cm (残重) 19.5g	密	良好	にぶい黄橙 10YR 7/3	完存	管状土錘、土師質 両端部面取りあり	R 243
225	SK 7261	土製品 土錘	(長) 4.0cm (孔径) 0.3cm (幅) 1.2cm (残重) 4.3g	密	良好	浅黄 2.5Y 7/4	両端部欠損	管状土錘 土師質	R 244
226	SK 7250	土製品 土錘	(長) 5.1cm (孔径) 0.7cm (幅) 2.9cm (残重) 26.2g	密	良好	淡黄 2.5Y 8/4	片面磨耗	管状土錘、土師質、端部に面取りあり使用による消耗著しい	R 232

注○No.は本書遺物実測図の番号と一致する。
○器種の項では、それぞれ「～形土器」の表現を省略した。
○法量の「口径」は口縁端部の最高点を結んだ長さを示す。
○色調は農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帖』(1988年度版) を参照した。
○登録番号は遺物・図面の整理及び管理上の番号で、各調査次数ごとに実測された遺物すべてに通して付されている。

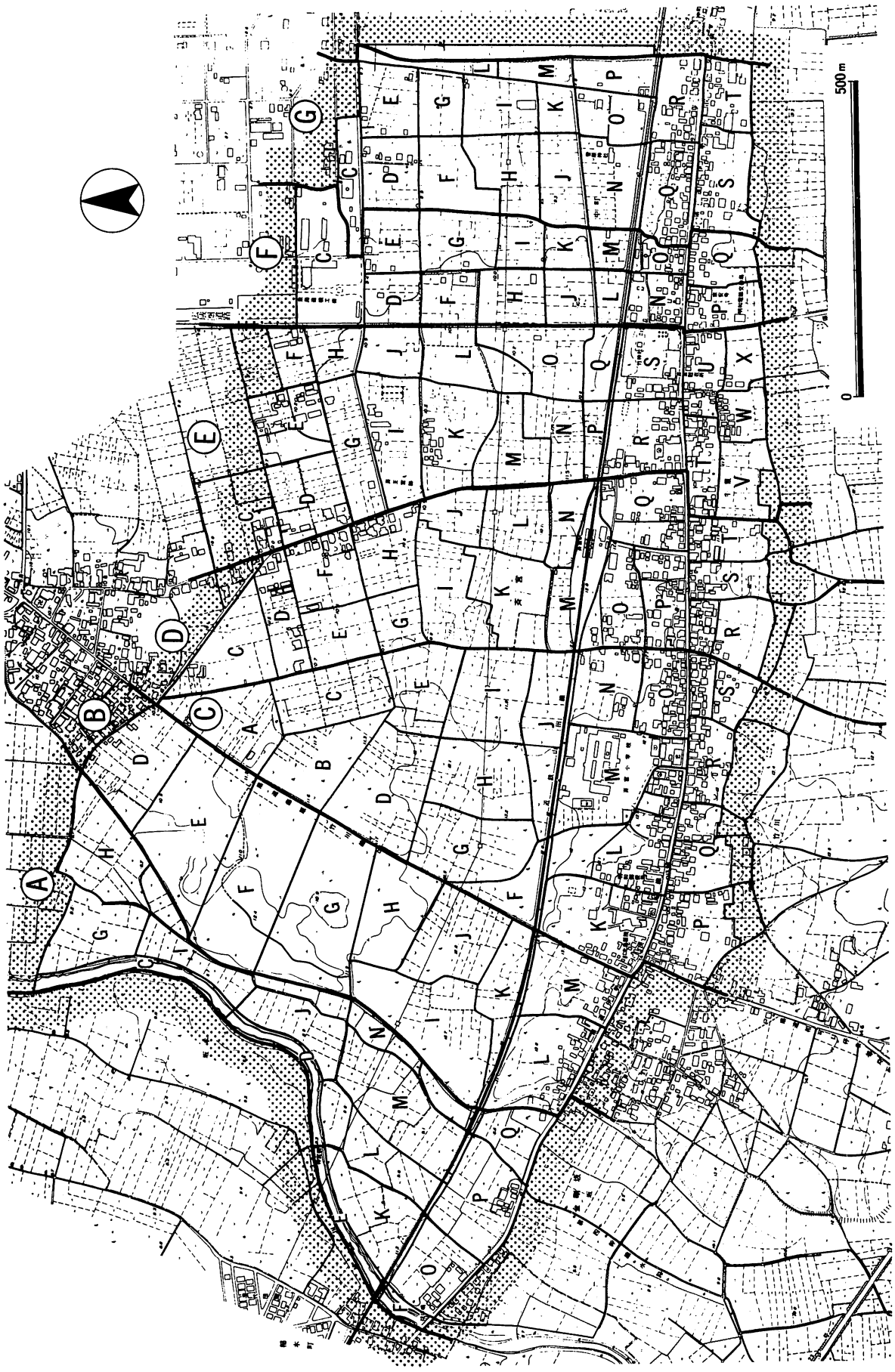
斎宮跡発掘調査次数一覧表

次	年度	調査地区
1	S45	試掘
2	46	古里A地区
3		〃 B地区
4	47	〃 C地区
5	48	〃 D地区
6－1		Aトレンチ
6－2		Bトレンチ
6－3		Cトレンチ
6－4		Dトレンチ
6－5		Eトレンチ
7	49	古里E地区
8－1		Fトレンチ
8－2		Gトレンチ
8－3		Hトレンチ
8－4		Iトレンチ
8－5		Jトレンチ
8－6		Kトレンチ
8－7		Lトレンチ
8－8		Mトレンチ
8－9		Nトレンチ
8－10		Oトレンチ
8－11		Pトレンチ
9－1	50	Qトレンチ
9－2		Rトレンチ
9－3		Sトレンチ
9－4		Tトレンチ
9－5		Uトレンチ
9－6		Vトレンチ
9－7		Wトレンチ
9－8		Xトレンチ
9－9		Yトレンチ
9－10		Zトレンチ
10		広域圏道路
11－1		西加座2661－1（山中）
11－2		〃 2681－1（山名）
11－3		東前沖2483－2（前田）
11－4		下 園2926－9（吉木）
12－1	51	2Aトレンチ
12－2		2Bトレンチ
12－3		2Cトレンチ
12－4		2Dトレンチ
13－1		東加座2436－7（浜口）
13－2		〃 2436－4（中村）
13－3		古 里3283（村上）
13－4		楽 殿2916～2917（松井）
13－5		御 館2974－1（川本）
13－6	51	中垣内375－1（南）
13－7		東 裏328（小川）
13－8		西加座2771－1（細井）
13－9		〃 2773（細井）
13－10		東 裏362－1（児島）
13－11		西加座2681－1（浮田）
13－12		〃 2721－3，2724－2（森川）
13－13		東前沖2506－2（宮下）
14－1	52	2Eトレンチ
14－2		2Fトレンチ
14－3		2Gトレンチ
14－4		2Hトレンチ
14－5		2Iトレンチ
15		斎宮小学校
16－1		竹川町道A
16－2		〃 B
16－3		〃 C
16－4		〃 D
16－5		〃 E
16－6		〃 F
17－1		竹神社社務所
17－2		竹神社防火用水
17－3		西加座2721－6（西沢）
17－4		楽 殿2894－1（中川）
17－5		〃 2895－1（西口）
17－6		出在家3237－3（吉川）
17－7		〃 3237－1（里中）
17－8		楽 殿2894－1（西村）
17－9		東海造機
18	53	6AEL－E・I（下園）
19		6AEN－M・N・O（御館）
20		6AEO－I・J（柳原）
21－1		6AGN－B（鍛冶山、北山）
21－2		6AEI－D（西加座2711－2，2717－4他、山路）
21－3		6AFD－D（西前沖2649－1、大西）
21－4		6AFH－F（西加座2678，2679－3、森下）
21－5		6AGD－K（東前沖、渡部）
21－6		6ACA－T（古里3269－2、中西）
21－7		6AFE－F（東前沖2631－1、鈴木）
21－8		6AEG－A（楽殿2909－3、大西）
21－9		6AED－R（篠林3218－3、宇田）
22－1		6AGU
22－2		6AGU
22－3		6AGW
23	54	6AEL－B（下園）
24		6AGF－D（西加座）

次	年度	調　　査　　地　　区
25－1	54	6ＡＤＰ－Ｋ（牛葉3029－1、三重土地ホーム）
25－2		6ＡＣＡ－Ｙ（古里3270、脇田）
25－3		6ＡＤＤ－Ｆ（篠林3139－3、池田）
25－4		6ＡＥＲ－Ｈ（牛葉3014、牛葉公民館）
25－5		6ＡＧＮ－Ｈ（鍛冶山2392、丸山）
25－6		6ＡＦＨ－Ａ（西加座2675－5、谷口）
25－7		6ＡＥＫ－Ｖ（下園2926－10、奥田）
25－8		6ＡＦＣ－Ｄ（西前沖2064－5、山本）
25－9		6ＡＣＮ－Ｃ（広頭3387－1、北出）
25－10		6ＡＥＶ－Ａ（鈴池339－1、永島）
25－11		6ＡＣＦ－Ｂ（東裏364－1、沢）
25－12		6ＡＥＥ－Ｙ（楽殿2892－3、山本）
25－13		6ＡＥＪ－Ｅ（西加座2766－1、山内）
26－1		6ＡＦＲ　（中西）
26－2		6ＡＥＸ～6ＡＣＱ（鈴池、木葉山、南裏）
26－3		6ＡＥＶ・Ｗ・Ｘ（鈴池）
26－4		6ＡＣＲ　（木葉山、南裏）
27		6ＡＣＧ－Ｓ・Ｔ（東裏）
28		6ＡＥＯ－Ｄ（柳原）
29		6AF1、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ－M・X・W（中垣内）
31－1		6ADO－M（内山3038－13、岩見）
31－2		6ACP－I（南裏227－2、鈴木）
31－3		6ABD－A（古里588－4、北薮）
31－4		6ADQ－T（牛葉3018－2、百五銀行）
31－5		6ACC－G（塚山3338－3、水谷）
31－6		6ABO－X（古里576－1、池田）
31－7		6AGI－L（東加座2427－1、竹内）
31－8		6ACN－G（広頭3388－1・5・8・9、森）
31－8		6ＡＧＤ－Ｌ（北野2487－1、中川）
31－10		6ＡＤＭ－Ｏ（内山3043-3、斎宮駅）
31－11		6ＡＤＴ－Ｉ（木葉山304－2、澄野）
31－12		6ＡＤＴ－Ｊ（木葉山304－7、宇田）
32		6ＡＣＥ－Ｄ・Ｅ・Ｆ（塚山）
33		6ＡＤＥ－Ｃ・Ｄ他（篠林）
34		6ＡＤＥ－Ｆ・Ｇ・Ｈ（西加座）
35		6ＡＰＥ他（西前沖）
36	56	6ＡＢＩ－Ｆ（中垣内）
37－1		6ＡＦＣ－Ｍ（西前沖2064、日本経木）
37－2		6ＡＤＱ－Ｒ（牛葉3021－2、野田）
37－3		6ＡＦＣ－Ｆ（西前沖2604－6、神田）
37－4		6ＡＦＣ－Ｍ（西前沖2604、日本経木）
37－5		6ＡＦＣ－Ｇ（西前沖2064－7、中村）
37－6		6ＡＢＤ－Ａ（古里588－2、北薮）
37－7		6ＡＥＣ－Ｍ（苅干2861－2、斎王公民館）
37－8		6ＡＤＲ－Ｐ（木葉山128－8・13・14、富山）
37－8		6ＡＧＫ－Ｅ（東加座2355－1、竹内）
37－10		6ＡＥＤ－Ｏ（楽殿3217－1、渡部）
37－11		6ＡＤＮ－Ｏ（内山3043－3、斎宮駅）
37－12	56	6ＡＦＨ－Ｊ（西加座2681－1・3・4、渋谷）
37－13		6ＡＧＫ－Ｆ（西加座2385－3、2386－3、竹内）
38		6ＡＣＤ－Ｓ（塚山）
39		6ＡＢＤ－Ｒ・Ｓ・Ｔ（古里）
40		6ＡＧＨ－Ｌ・Ｍ（東加座）
41		6ＡＧＪ－Ｊ他（斎宮地内）
42－1	57	6ＡＥＩ－Ｄ・Ｆ（楽殿）
42－2		6ＡＥＫ－Ａ・Ｂ（楽殿）
43－1		6ＡＤＣ－Ｃ（出在家3235－2、永田）
43－2		6ＡＤＴ－Ｂ（木葉山308－1、山本）
43－3		6ＡＣＰ－Ｔ（南裏241－1、辻）
43－4		6ＡＤＳ－Ｄ（牛葉123－3、西山）
43－5		6ＡＤＥ－Ｄ（篠林3220－3、澄野）
43－6		6ＡＧＥ（東前沖、町道側溝）
43－7		6ＡＢＤ－Ｆ（古里588－6、今西）
43－8		6ＡＤＱ－Ｈ（牛葉3025－2、大西）
44		6ＡＦＬ－Ａ・Ｂ（鍛冶山2759－1、他）
45		6ＡＥＧ－Ｐ・Ｑ（楽殿2904－2、他）
46		6ＡＧＮ－Ｃ・Ｄ（鍛冶山2737－1、他）
47		6ＡＤＪ－Ｄ・Ｇ他（西加座、御館、宮ノ前、上園）
48－1	58	6ＡＧＭ－Ｍ（広頭3385、斎宮小）
48－2		6ＡＤＰ－Ｑ（牛葉3033－1・2、吉田）
48－3		6ＡＢＬ－Ｍ（中垣内434－6、西川）
48－4		6ＡＧＬ－Ｂ（東前沖2480、倉田）
48－5		6ＡＧＤ～6ＡＦＥ（東前沖、町道側溝）
48－6		6ＡＧＣ－Ａ（西前沖3550－1、今西）
48－7		6ＡＤＴ－Ｈ（木葉山307、森西）
48－8		6ＡＣＬ－Ｅ・Ｆ・Ｇ（東裏334－15、他）
48－9		6ＡＥＶ－Ｊ（鈴池341－1、乾）
48－10		6ＡＧＴ（牛葉、町道側溝）
48－11		6ＡＤＰ－Ｅ（鍛冶山2351－1,2352－1、榊原）
48－12		6ＡＦＣ－Ｈ（西前沖2604－8・9、清水）
48－13		6ＡＣＭ－Ｏ（東裏、斎宮小）
48－14		6ＡＥＴ（牛葉、町道側溝）
49		6ＡＤＩ－Ｄ・Ｕ・Ｖ・Ｗ・Ｘ（上園3083、他）
50		6ＡＣＨ－Ｈ（東裏294,297、山本）
51		6ＡＦＦ－Ｄ（西加座2663－1・4,2664、森下）
52		6ＡＧＦ－Ｄ（西加座2703、他）
53－1	59	6ＡＣＭ－Ｐ（東裏284、体育館）
53－2		6ＡＣＡ－Ｍ（古里3280－2、中西）
53－3		6ＡＢＥ（古里573－2、永納）
53－4		6ＡＣＬ－Ｓ（東裏271－1、田所）
53－5		6ＡＣＲ（木葉山97－5、田中）
53－6		6ＡＧＯ（鍛冶山、町道側溝）
53－7		6ＡＤＤ－Ｕ（篠林3147－3、野呂）
53－8		6ＡＧＥ－Ｏ（東前沖2470－2、上田）
53－9		6ＡＣＳ－Ｏ（木葉山95－2、浅尾）
53－10		6ＡＣＡ－Ｒ（古里3267－1、西川）
53－11		6ＡＤＲ－Ｗ（木葉山131－7、西村）

次	年度	調　　査　　地　　区
53－12	59	6ＡＢＬ－Ｋ（中垣内464－２、沢）
53－13		6ＡＤＱ－Ｌ（牛葉3022、辻）
53－14		6ＡＣＭ－Ｏ（東裏287－３、体育庫）
53－15		6ＡＦＫ－Ｃ・Ｄ（西加座2721－１、鈴木）
54		6ＡＦＥ－Ｎ（西前沖2630、他）
55		6ＡＥＮ－Ｐ（柳原、御館2785－１、他）
56		6ＡＣＨ－Ｓ（東裏289－１、他）
57		6ＡＧＦ－Ｈ・Ｉ（東加座2441、他）
58－１	60	6ＡＦＫ－Ｃ・Ｄ（西加座2721－１、鈴木）
58－２		6ＡＦＨ－Ｎ（西加座2681－８、三村）
58－３		6ＡＣＭ－Ｎ（東裏3385－２、斎宮小）
58－４		6ＡＢＬ－Ａ（中垣内4731－１、小家）
58－５		6ＡＤＱ－Ｑ（牛葉、町道側溝）
58－６		6ＡＤＲ－Ｖ（木葉山131－３、西山）
58－７		6ＡＧＳ－Ｇ（中西611、山路）
58－８		6ＡＢＭ－Ａ（中垣内430－３他、近鉄）
59		6ＡＣＪ－Ｉ（広頭3379－１、他）
60		6ＡＧＪ－Ｂ・Ｄ・Ｇ（東加座2450－１、他）
61		6ＡＦＦ－Ｈ・Ｉ・Ｄ（西加座2663－１、他）
62		6ＡＧＩ－Ｊ・Ｋ（東加座2425、他）
63		6ＡＦＧ－Ｍ・Ｎ（西加座2659－１、他）
64－１	61	6ＡＣＯ－Ｈ（牛葉3395－１、トーカイ）
64－２		6ＡＧＬ－Ｆ（東加座2435－１、大和谷）
64－３		6ＡＤＤ－Ａ（篠林3136－１、山路）
64－４		6ＡＧＲ－Ｎ（笛川2340、丸山）
64－５		6ＡＣＭ－Ｒ・Ｑ・Ｐ（東裏3385－２、斎宮小）
64－６		6ＡＣＫ　（東裏361－２、竹川自治会）
64－７		6ＡＧＩ－Ｇ（東加座2435－２、大和谷）
64－８		6ＡＧＲ－Ｊ（笛川2341－６、山下）
64－９		6ＡＤＱ－Ｍ（牛葉、町道側溝）
64－10		6ＡＣＦ－Ａ（東裏365－１、樋口）
64－11		6ＡＣＭ－Ｏ（東裏3385－２、斎宮小）
64－12		6ＡＤＥ－Ｂ（篠林3162－３、江崎）
65－１		6ＡＣＣ－Ｍ（塚山3331－１）
65－２		6ＡＥＧ－Ｓ（楽殿2908－２、他）
65－３		6ＡＥＩ－Ｌ・Ｍ（楽殿2917－４、他）
66		6ＡＧＧ－Ｃ（東加座2437－１、他）
67		6ＡＢＦ　（古里523、他）
68		6ＡＢＦ　（古里502、他）
69		6ＡＧＭ－Ｅ～Ｈ（東加座2373、他）
70－１	62	6ＡＣＣ－Ｘ（塚山3325－１、江崎）
70－２		6ＡＥＥ－Ｗ（楽殿2875－２、岡田）
70－３		6ＡＤＲ－Ｉ（木葉山129－５、大西）
70－４		6ＡＣＮ－Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｌ（広頭3389－８、林）
70－５		6ＡＥＷ－Ａ（鈴池333－１、八田）
70－６		6ＡＢＬ－Ｓ（中垣内430－６、奥山）
70－７		6ＡＥＥ－Ｔ（楽殿577、浅尾）
70－８		6ＡＥＵ・6ＡＥＸ－Ａ（牛葉、鈴池、三重県）
70－９		6ＡＥＰ－Ｃ・Ｄ（御館、榊原、近鉄）
70－10	62	6ＡＦＤ－Ｂ・Ｄ（西前沖2649－４、大西）
70－11		6ＡＧＯ－Ｈ（鍛冶山2363－２、川合）
70－12		6ＡＤＤ－Ｆ・Ｇ（篠林3158、長谷川）
70－13		6ＡＥＣ－Ｎ・Ｇ（苅干、佐藤）
70－14		6ＡＢＬ－Ｒ（中垣内459、北岡）
70－15		6ＡＦＤ－Ａ（西前沖2644－１、山本）
70－16		6ＡＣＢ－Ａ他（町道塚山線拡幅）
71		6ＡＢＥ　（古里501、他）
72－１		6ＡＢＥ　（古里500、他）
72－２		6ＡＢＦ　（古里523、他）
72－３		6ＡＢＦ　（古里551－２、他）
72－４		6ＡＢＦ　（古里528－１、他）
73		6ＡＦＦ－Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｇ（西加座2663－５、他）
74－１		6ＡＢＦ　（古里523、他）
74－２		6ＡＢＦ　（古里522、他）
74－３		6ＡＢＥ・Ｆ（古里524、他）
74－４		6ＡＢＥ　（古里548－１、他）
74－５		6ＡＢＥ　（古里543、他）
75		6ＡＧＦ－Ｃ（西加座2702、他）
76－１	63	6ＡＤＢ－Ａ～Ｄ（町道塚山線拡幅）
76－２		6ＡＤＥ－Ｆ・Ｇ（篠林3158、長谷川）
76－３		6ＡＢＥ　（古里554、明和町）
76－４		6ＡＣＫ　（東裏354－13、山際）
76－５		6ＡＥＥ－Ｗ（楽殿577、岡田）
76－６		6ＡＣＢ－Ａ（塚山3276－１、今西）
76－７		6ＡＣＭ－Ｍ（広頭3385－２、斎宮小）
76－８		6ＡＦＭ－Ｇ（鍛冶山2736－３、近鉄）
76－９		6ＡＣＱ　（南裏144－１、田所）
76－10		6ＡＢＤ－Ｕ（古里579、池田建設）
76－11		6ＡＢＥ　（古里554、明和町）
76－12		6ＡＥＥ　（楽殿、町道下水管）
76－13		6ＡＤＤ－Ｋ（篠林3143、中西）
76－14		6ＡＥＥ－Ｓ（楽殿2878－３、山路）
76－15		6ＡＢＦ～6ＡＢＨ（中垣内、県道拡幅）
76－16		6ＡＥＫ－Ｂ（下園2936－２、明和町）
76－17		6ＡＥＶ－Ａ（鈴池339－５、永島）
77		6ＡＧＪ－Ｄ（東加座2453、他）
78		6ＡＤＬ　（宮ノ前3054、他）
79		6ＡＧＧ－Ａ・Ｂ（東加座2440、他）
80		6ＡＦＧ－Ｆ～Ｉ（西加座2696、他）
81－１	Ｈ１	6ＡＥＣ～Ｆ（町道塚山線拡幅）
81－２		6ＡＢＪ、6ＡＢＫ（古里、県道拡幅）
81－３		6ＡＤＳ－Ｍ（木葉山137、中川）
81－４		6ＡＥＤ－Ｌ（楽殿2881－２、山本）
81－５		6ＡＦＱ－Ｃ（中西597－２、木戸口）
81－６		6ＡＤＤ－Ｆ（篠林313、池田）
81－７		6ＡＢＬ－Ｕ（中垣内430－７、川本）
81－８		6ＡＢＪ　（古里、明和町）
81－９		6ＡＣＦ　（中垣内、三重県）

次	年度	調　　査　　地　　区
81－10	1	６ＡＤＲ－Ｖ（木葉山297、明和町）
81－11		６ＡＣＭ－Ｎ（広頭3385－２、明和町）
81－12		６ＡＥＤ－Ａ（篠林3225、中川）
81－13		６ＡＣＢ　（塚山3276－19他、明和町）
81－14		６ＡＥＤ－Ｆ（楽殿2844－２、澄野）
81－15		６ＡＥＤ－Ｕ（楽殿2885－２、西山）
81－16		６ＡＧ　（北野3655－１、他）
82－１		６ＡＤＩ－Ｆ～Ｊ（上園3095、他）
82－２		６ＡＤＩ－Ｋ・Ｌ（上園3100、他）
83		６ＡＦＪ－Ｃ～Ｆ（西加座2770－３、他）
84－１		６ＡＦＪ－Ｇ（西加座2764－３）
84－２		６ＡＦＨ－Ｇ・Ｈ（西加座2679－１、他）
85－１	2	６ＡＢＤ～６ＡＣＤ（古里、三重県）
85－２		６ＡＣＡ－Ｐ（古里3279、松本）
85－３		６ＡＣＪ－Ｂ・Ｄ（東裏、明和町）
85－４		６ＡＢＥ　（竹川573－１、永納）
85－５		６ＡＥＤ－Ｕ（楽殿2885－２、西山）
85－６		６ＡＦＨ－Ｂ（西加座、明和町）
85－７		６ＡＣＢ－Ｃ（塚山3276－３他、加藤）
85－８		６ＡＢＩ－Ｎ（中垣内427－１、小林）
86		６ＡＦＨ－Ｆ・Ｇ・Ｈ（西加座2679－１他）
87		６ＡＣＥ－Ｎ・Ｑ・Ｒ（塚山3356他）
88		６ＡＧＮ－Ｃ・Ｄ（鍛冶山2411－１他）
89－１	3	６ＡＤＭ－Ｏ（内山3043－５、近鉄斎宮駅）
89－２		６ＡＧＩ－Ｍ（東加座2432－2他、北村）
89－３		６ＡＤＭ－Ｎ･Ｏ（内山3060－４、近鉄斎宮駅）
90		６ＡＦＨ－Ａ・Ｂ（西加座2680他）
91		６ＡＢＨ－Ｆ（中垣内393、他）
92		６ＡＧＮ－Ａ（鍛冶山2734－3）
93		６ＡＤＮ（内山3045－12、他）
94		６ＡＥＭ（御館2942）
95	4	６ＡＤＮ（内山3046－17、他）
96－１		６ＡＧＭ（東加座2374　丸山）
96－２		６ＡＤＯ（内山3068－3、他　明和町）
96－３		６ＡＣＡ－Ｄ（古里3260　清水）
96－４		６ＡＦＮ（中西2749－１　本山）
96－５		６ＡＤＲ－Ｔ（木葉山28－３　加藤）
96－６		６ＡＤＤ－Ｄ（篠林3138－１　藤井）
97		６ＡＥＭ（中垣内482、他）
98		６ＡＦＭ－Ｃ・Ｅ（鍛冶山2745、他）
99	5	６ＡＤＮ（内山3046－11、他）
100		６ＡＢＩ－Ｔ（中垣内423）
101		６ＡＤＧ（篠林3194）
102－１		６ＡＤＳ（木葉山119－５　澄野）
102－２		６ＡＥＤ－Ｊ（楽殿2882－５　杉本）
102－３		６ＡＡＱ（花園663－１　中川）
102－４		６ＡＣＦ－Ａ（東裏365－１　樋口）
102－５		６ＡＢＪ－Ｄ（中垣内493－６　川口）
102－６		６ＡＧ　（鍛冶山地内　明和町）
102－７		６ＡＣＧ－Ｅ（東裏318－１　川本）
102－８		６ＡＥ　（楽殿地内　明和町）
103		６ＡＥＱ－Ａ（柳原2779－3）
104		６ＡＧＴ（笛川1048－1、他）
105	6	６ＡＦＮ（鍛冶山2758－1、他）
106－１		６ＡＥＷ－Ｊ（鈴池338－１　森西）
106－２		６ＡＥＥ－Ｗ（楽殿2891－３　向井）
106－３		６ＡＦＬ他（鍛冶山地内　明和町）
106－４		６ＡＥＣ－Ｌ（苅干2861　坂本）
106－５		６ＡＧＯ（鍛冶山2362　青山）
106－６		６ＡＣＣ－Ｂ（塚山3340－４　田畑）
107		６ＡＢＩ－Ｏ（中垣内414－1、他）
108		６ＡＥＱ－Ｃ（柳原2779－2、他）



第30図　斎宮跡地区表示

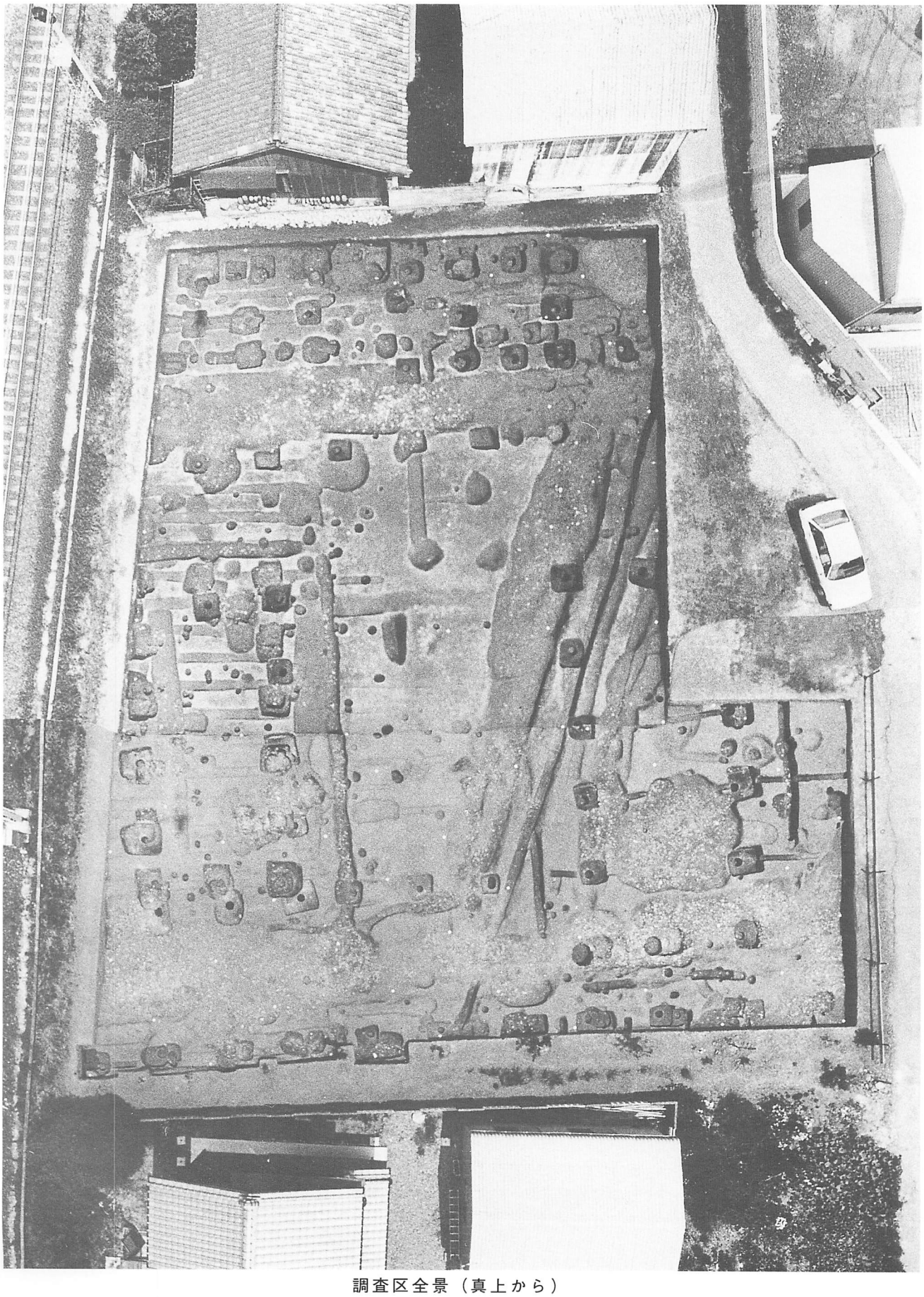
第31図　斎宮跡方格地割区画名称

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせい6ねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成6年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉水康夫・野原宏司・大川勝宏・赤岩　操
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 05965－2－3800
発行年月日	1995年3月31日

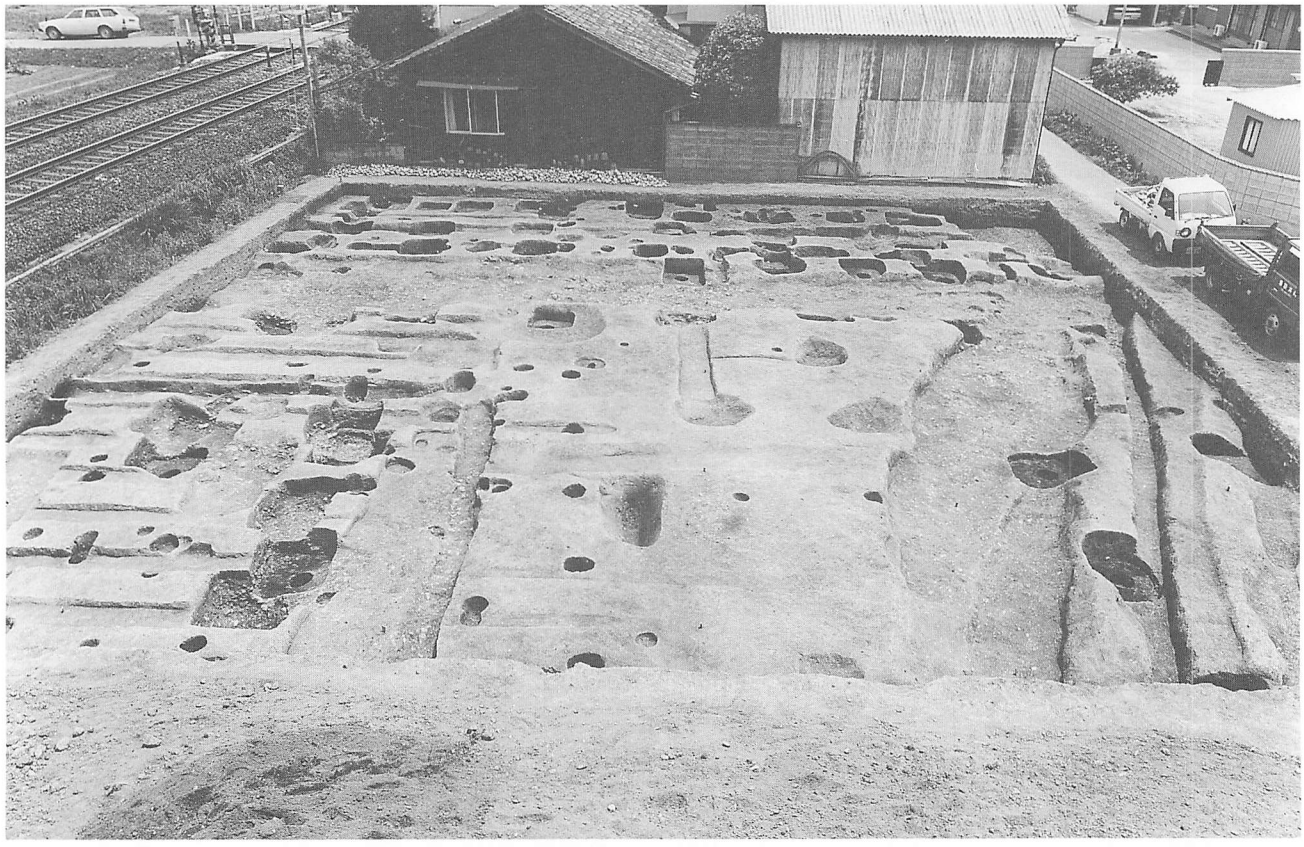
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
斎宮跡	多気郡明和町斎宮他	24442	210	34°31′55″ ～ 34°32′30″	136°36′16″ ～ 136°37′37″			
第105次調査	斎宮字鍛冶山					19940407 ～ 19941007	780	計画調査
第107次調査	竹川字中垣内					19940718 ～ 19941115	530	〃
第108次調査	斎宮字柳原					19941115 ～ 19950303	1,100	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡	官衙				
第105次調査			掘立柱建物・柵列	土師器・須恵器・陶棺片 灰釉陶器・緑釉陶器	平安時代初期における斎宮跡中枢部の一画
第107次調査			方形周溝墓・掘立柱建物 土坑墓・土坑	弥生土器・土師器 須恵器・円面硯	斎宮成立前～斎宮初期の遺構・遺物
第108次調査			掘立柱建物・柵列・土坑 区画道路側溝	土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器	一区画のほぼ全域を囲む柵列と掘立柱建物群

図　　版

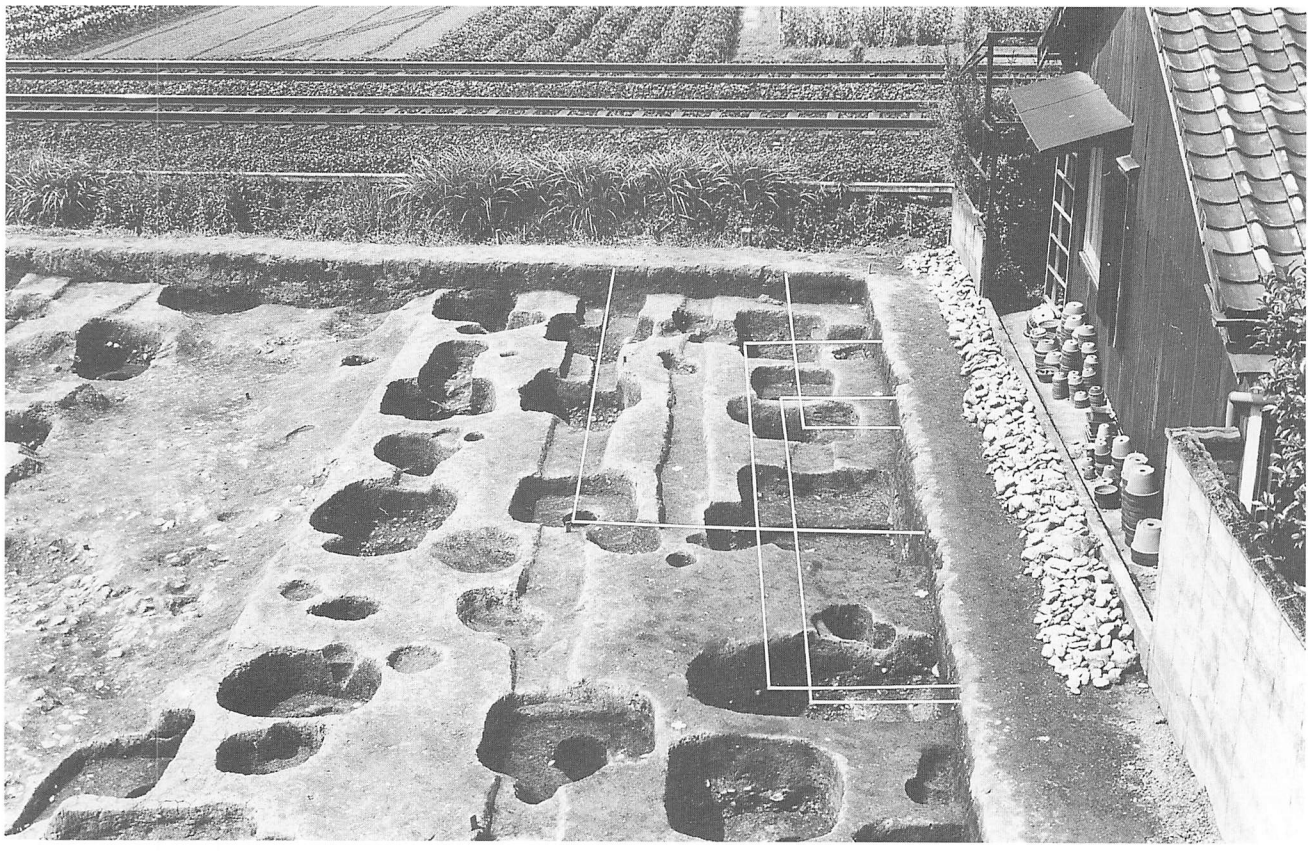


調査区全景（真上から）

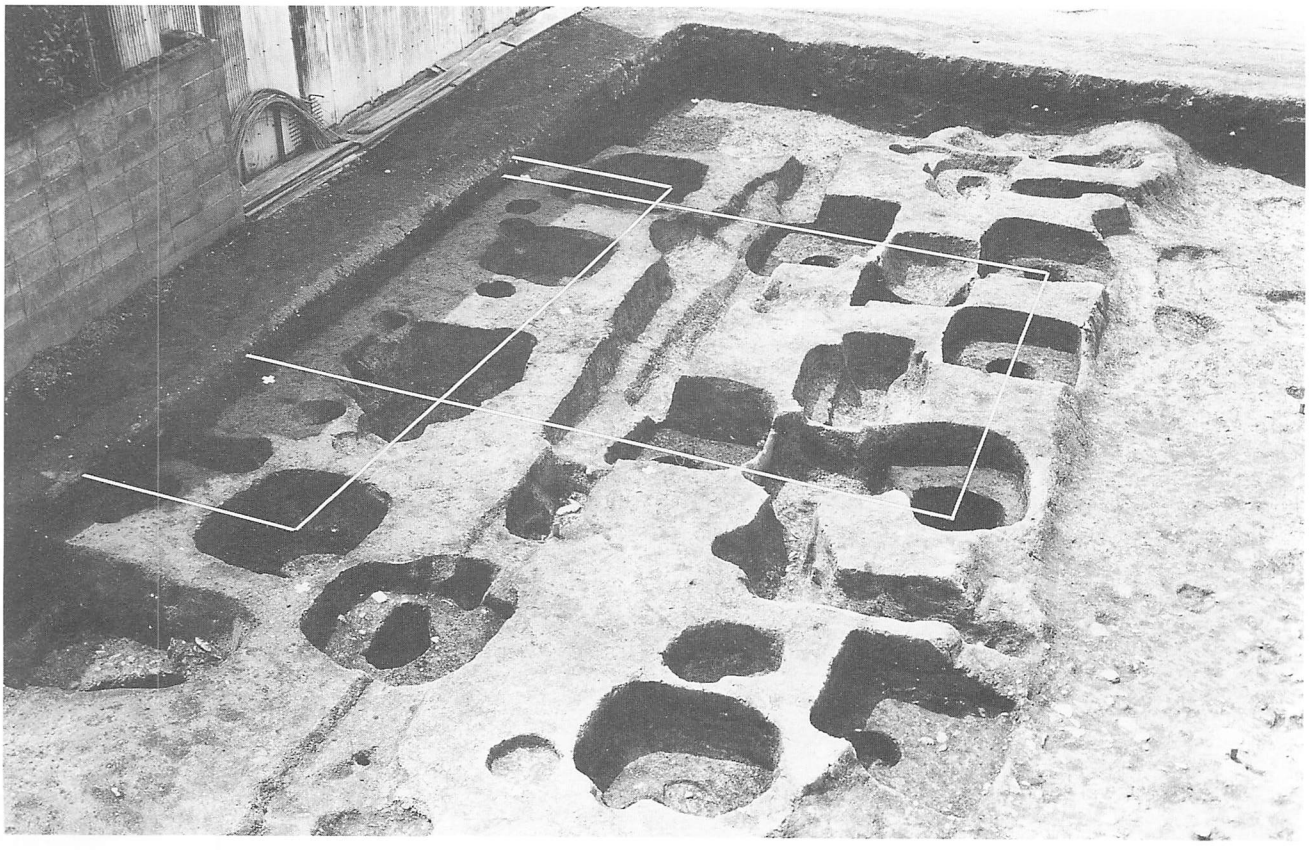


調査区東半（西から）

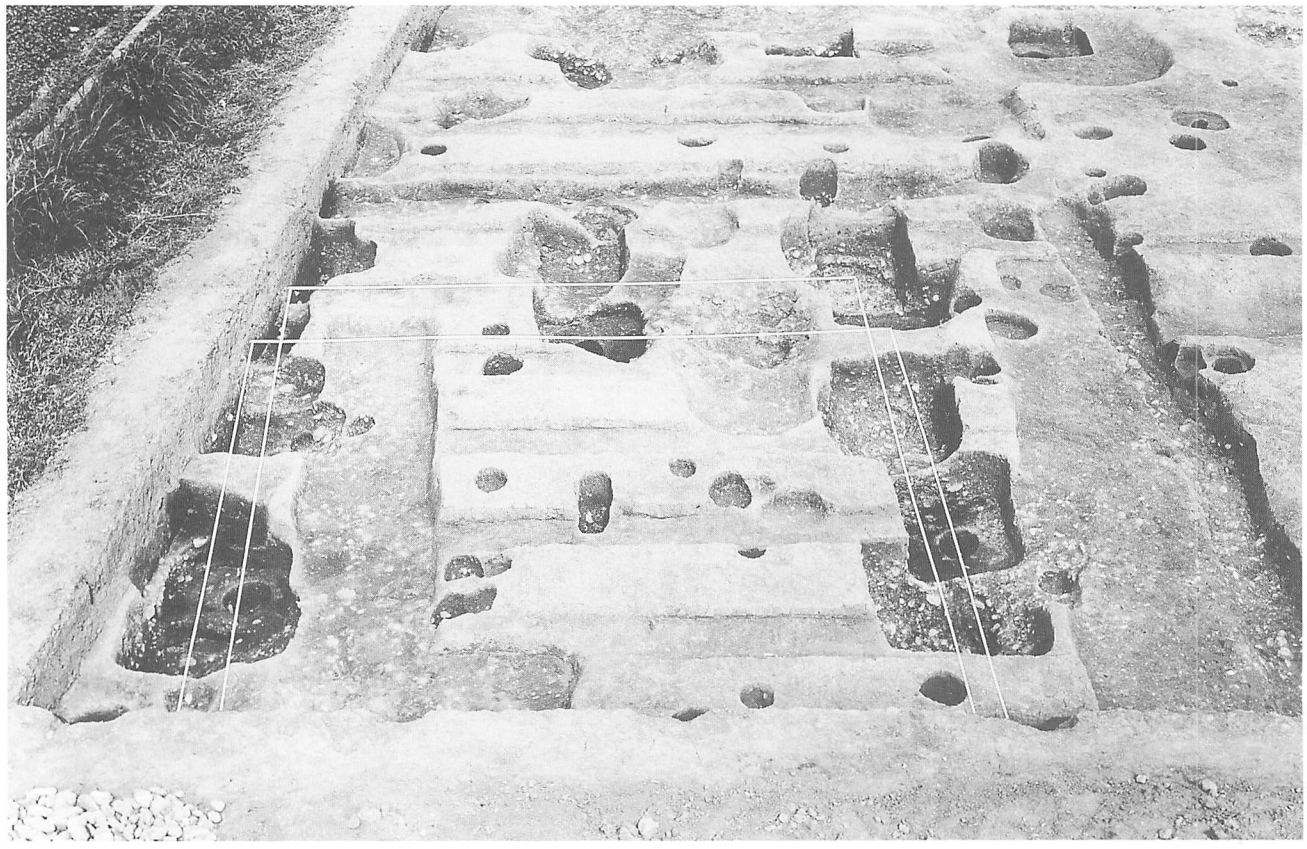
ＳＡ7150・7170（南から）



ＳＢ7180・7165・7195・7196（南から）



ＳＢ7175・7185（北西から）



ＳＢ7155・7190・7191東半（西から）

ＳＢ7155・7190・7191西半（南から）

ＳＢ7160・7155東半（南から）

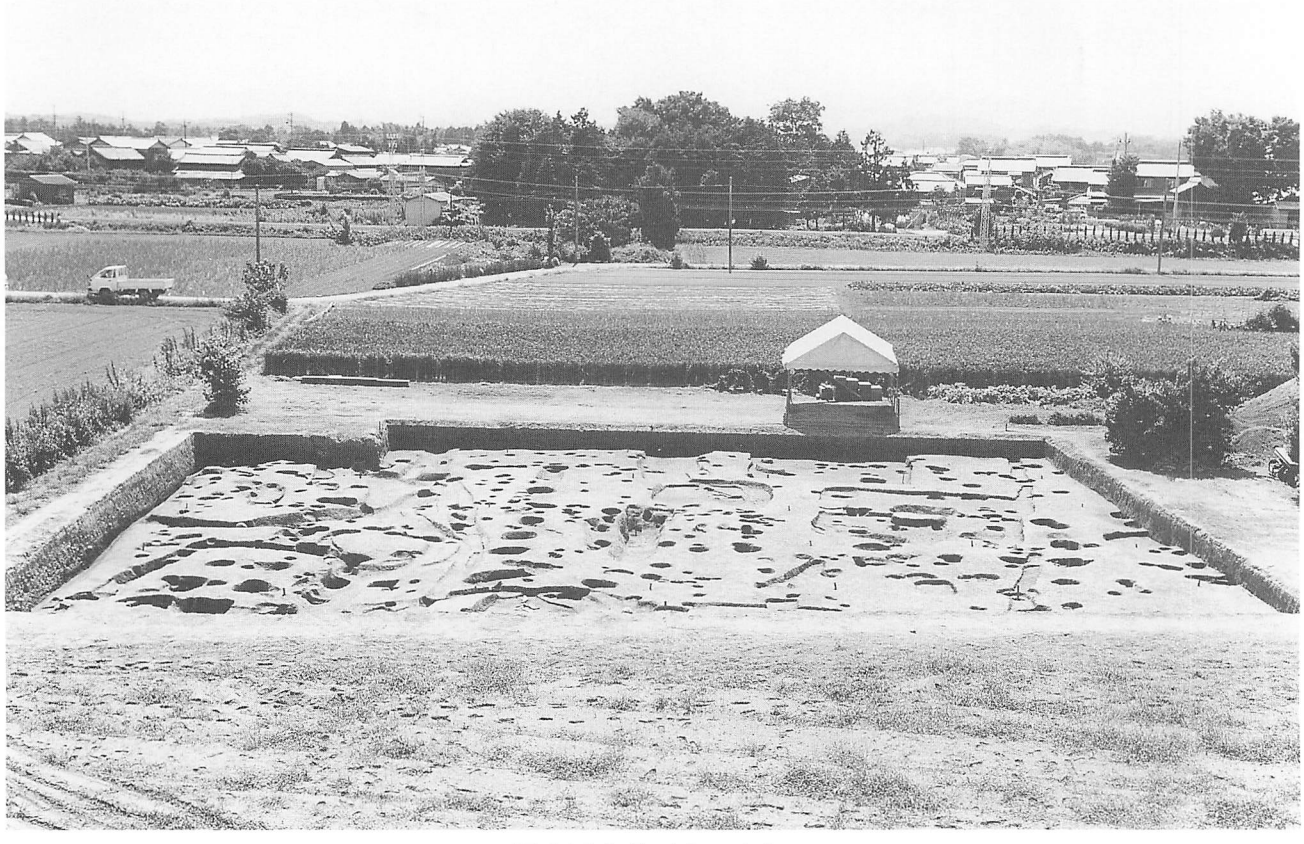
ＳＢ7160西半（東から）

調査区西半（南から）

ＳＡ1411・2675・7151（東から）

調査区全景（真上から）

調査区遠景（東から）



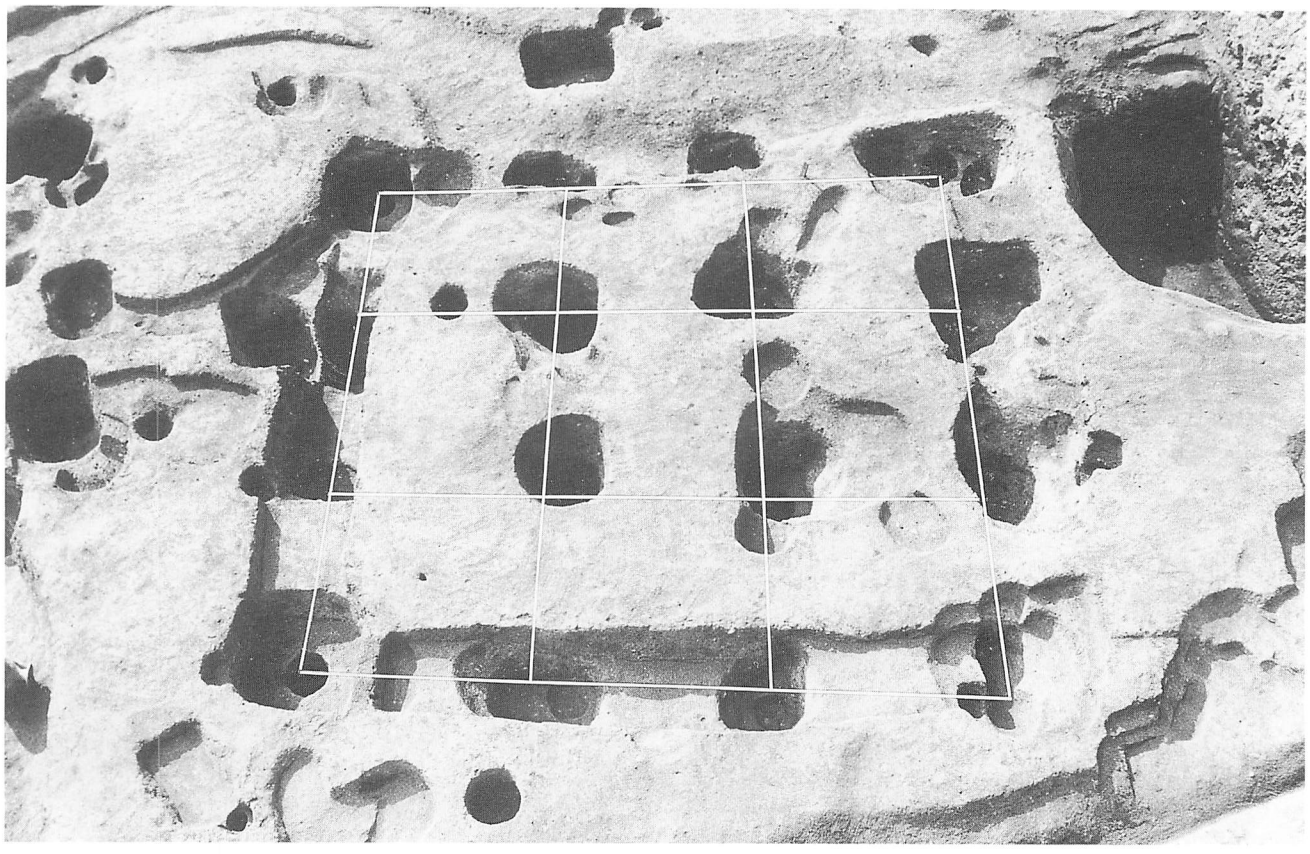
調査区全景（北から）

ＳＸ7200（北西から）

ＳＸ7201遺物出土状況（南東から）

ＳＢ7232（北から）

ＳＢ7227・7228・7229（北から）

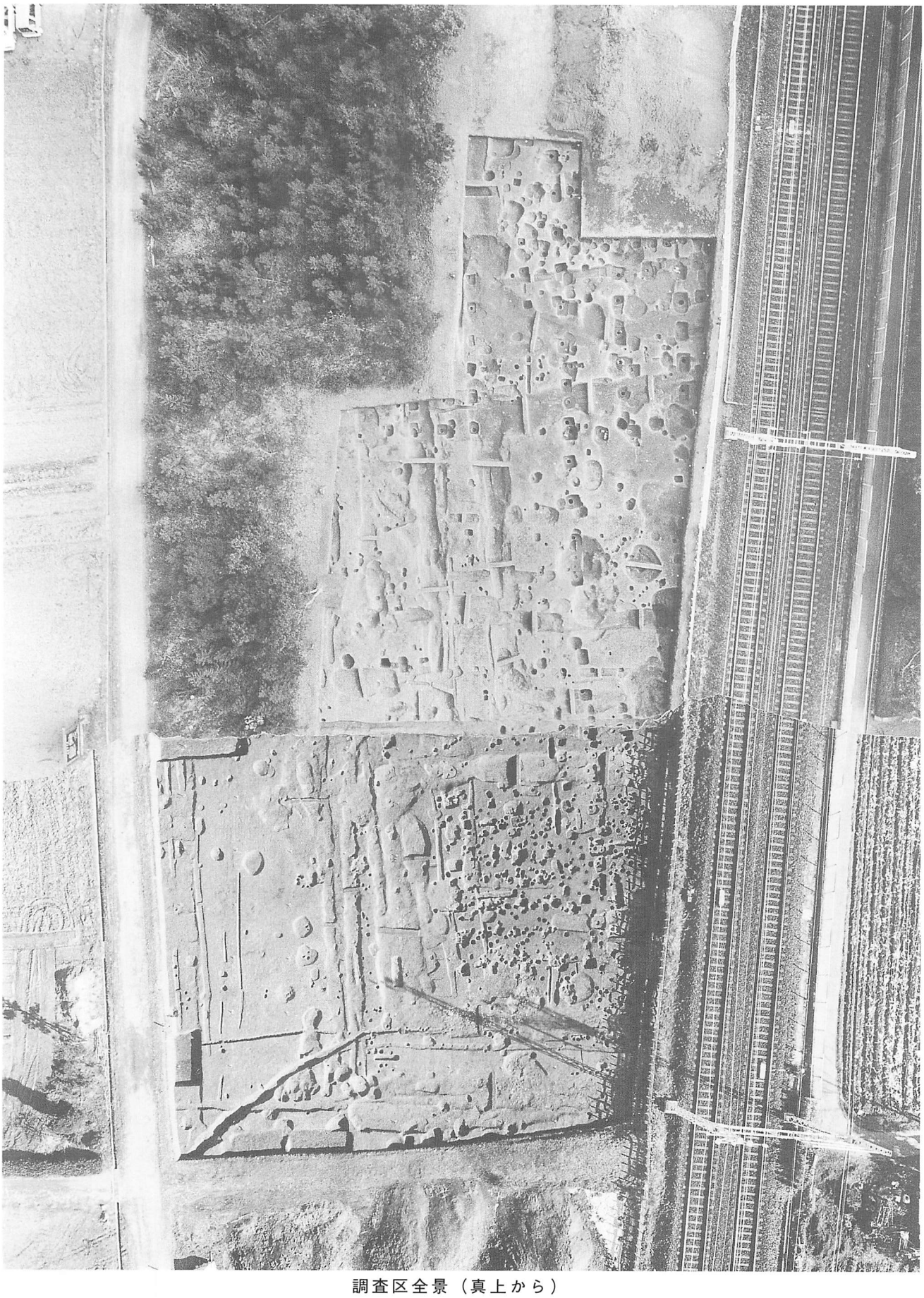


ＳＢ7210（東から）

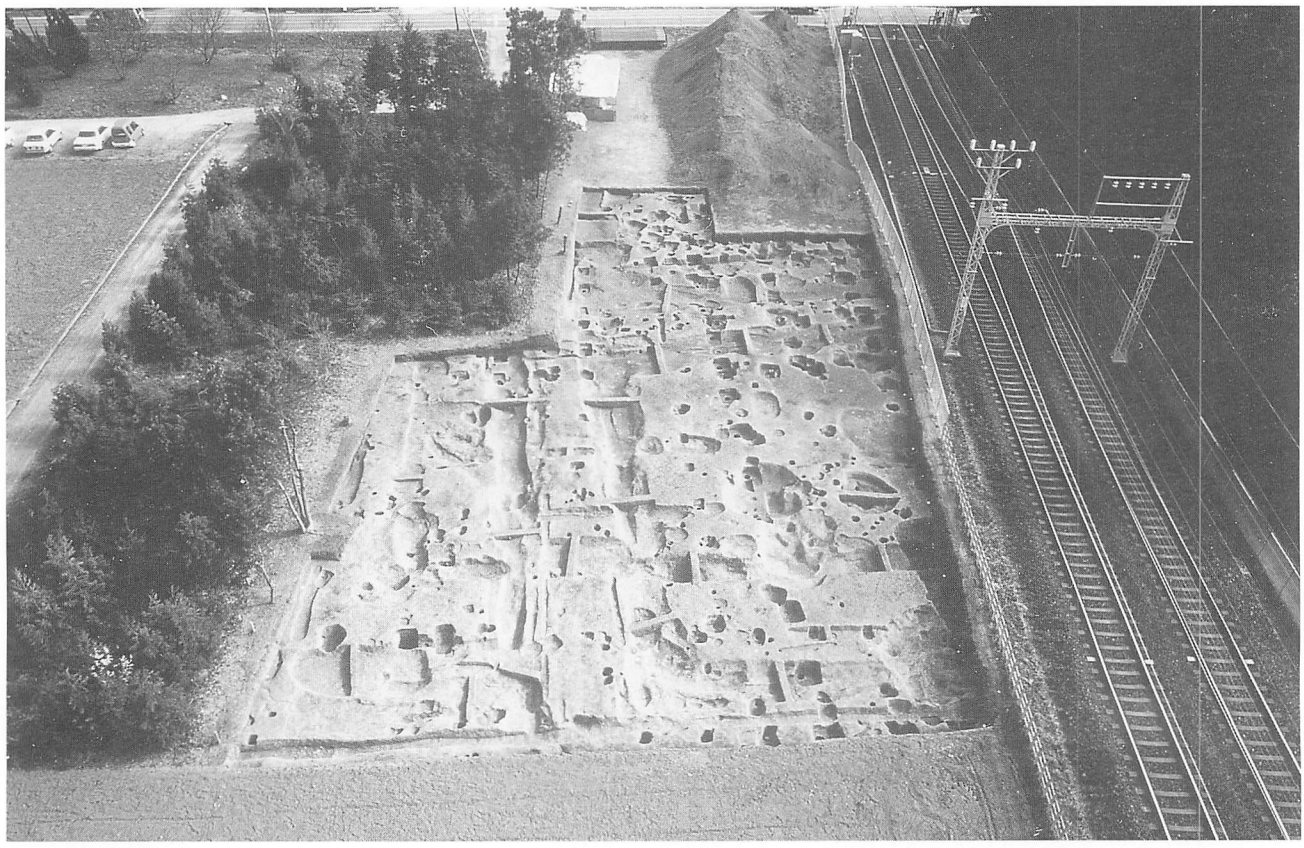
ＳＢ7231・7233（北から）

ＳＫ7220遺物出土状況（南から）

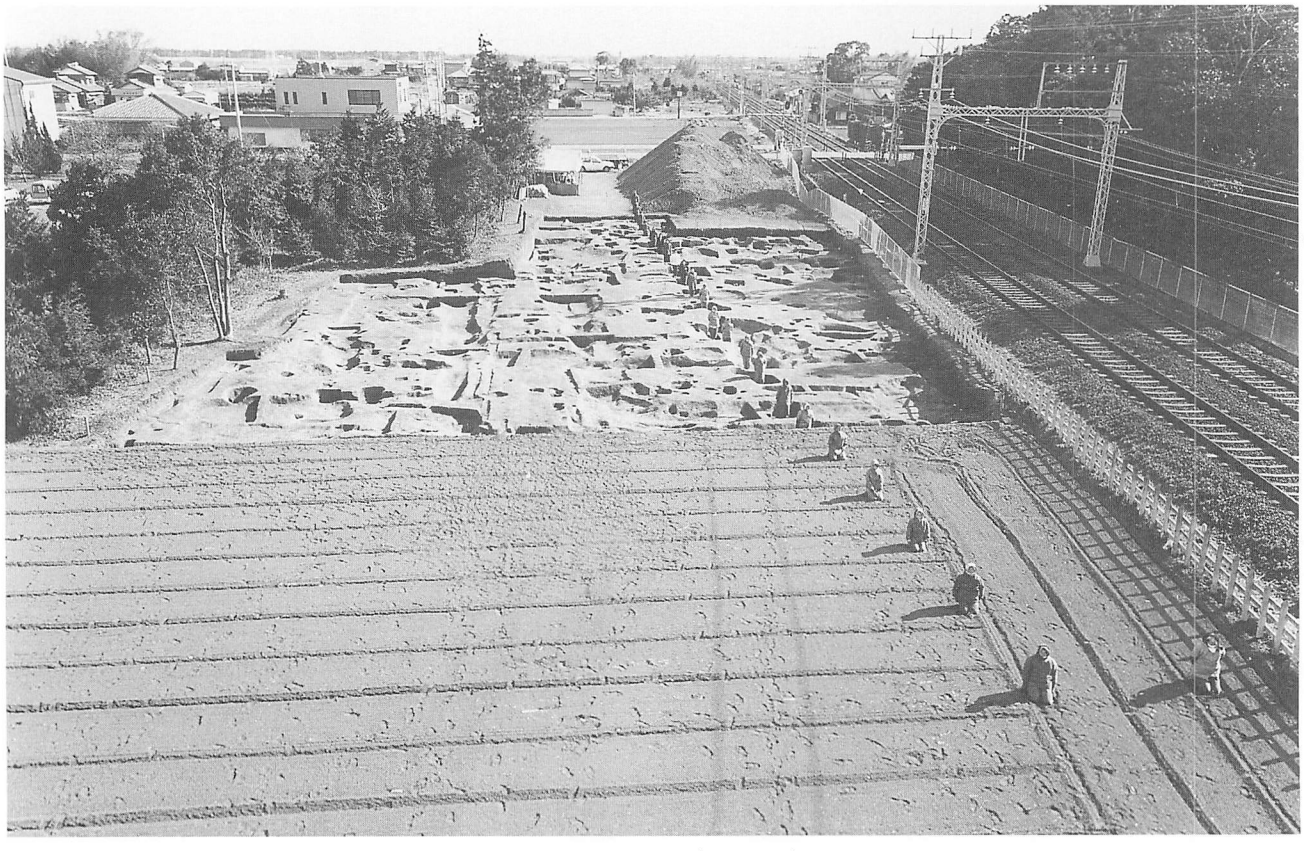
ＳＸ7240（北から）



調査区全景（真上から）

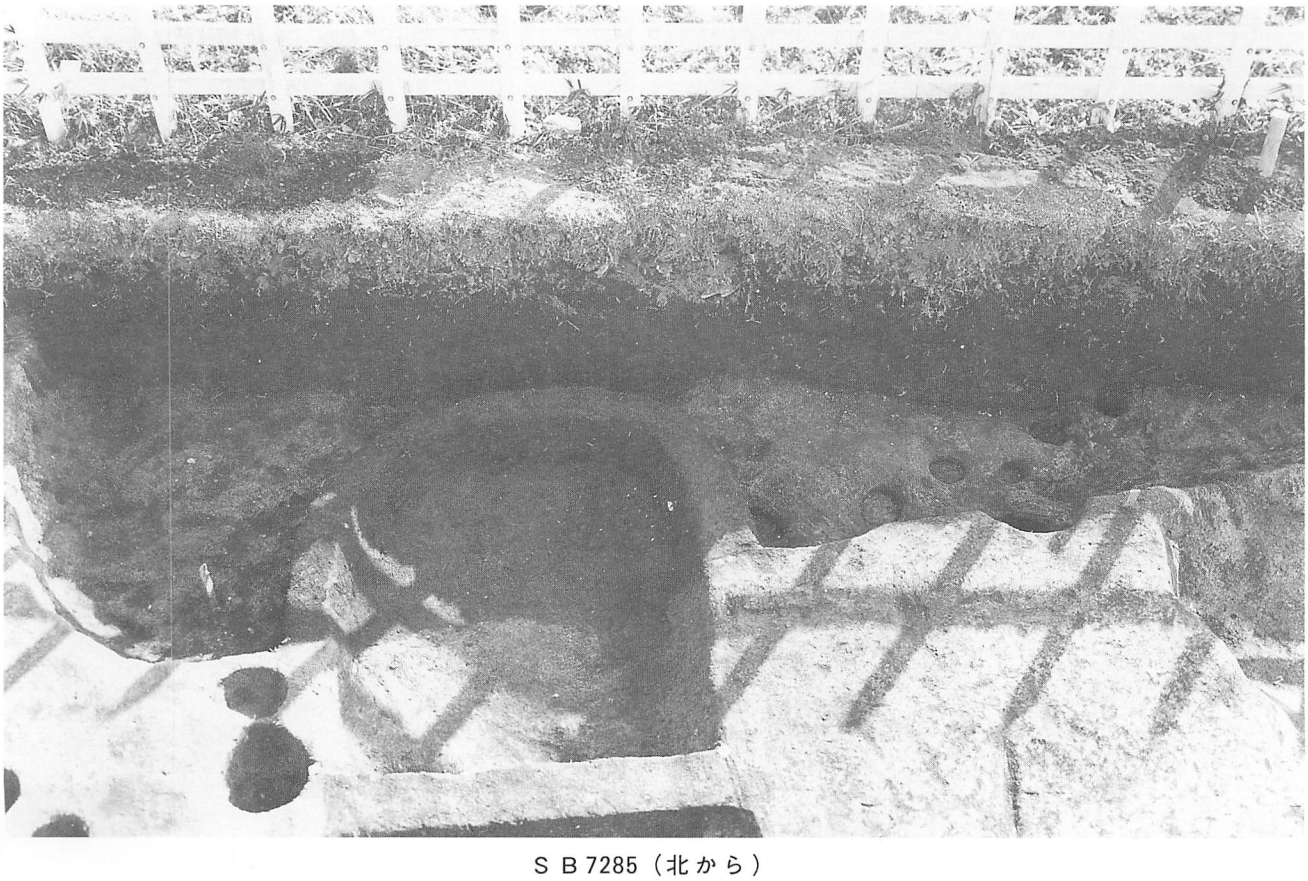


調査区全景（西から）

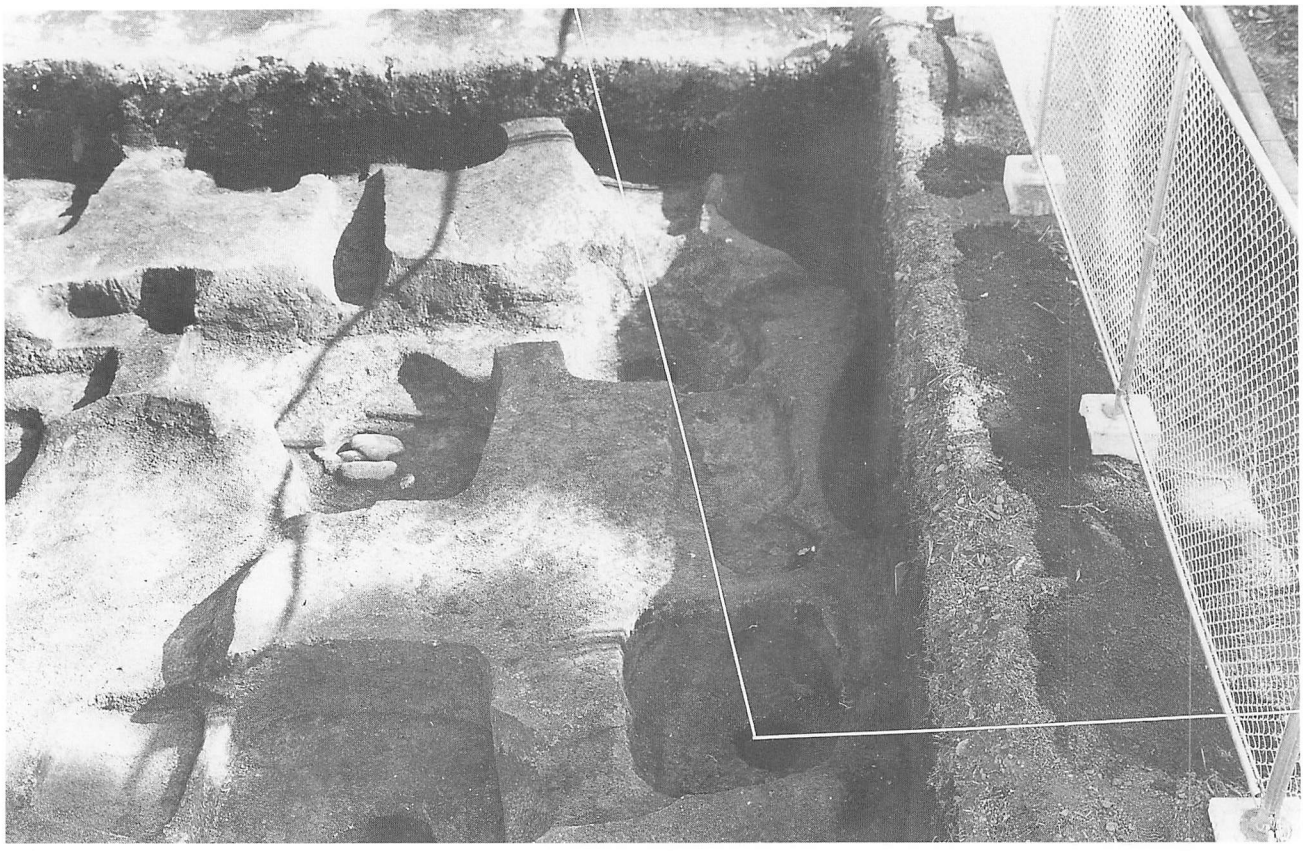


ＳＡ6999・7000（西から）

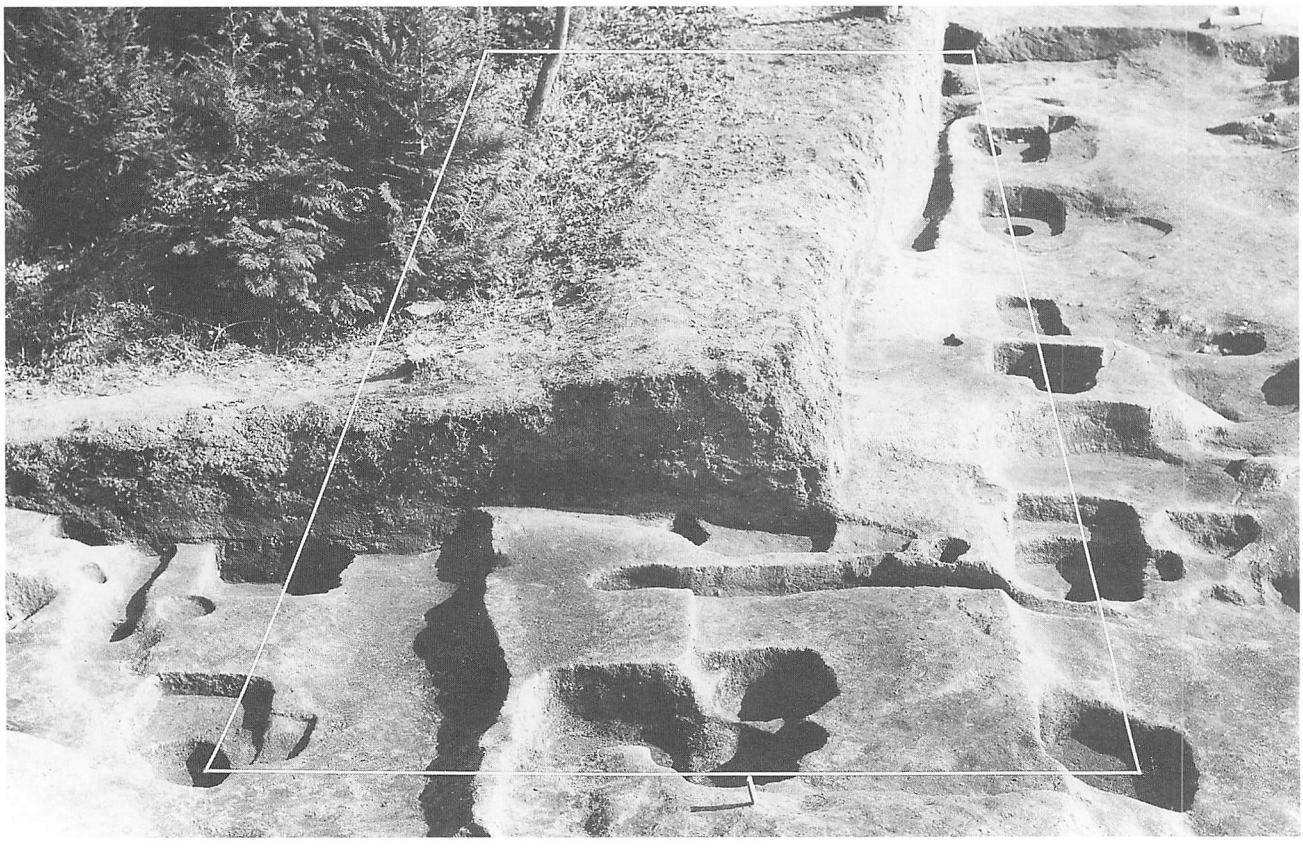
調査区南東部（東から）



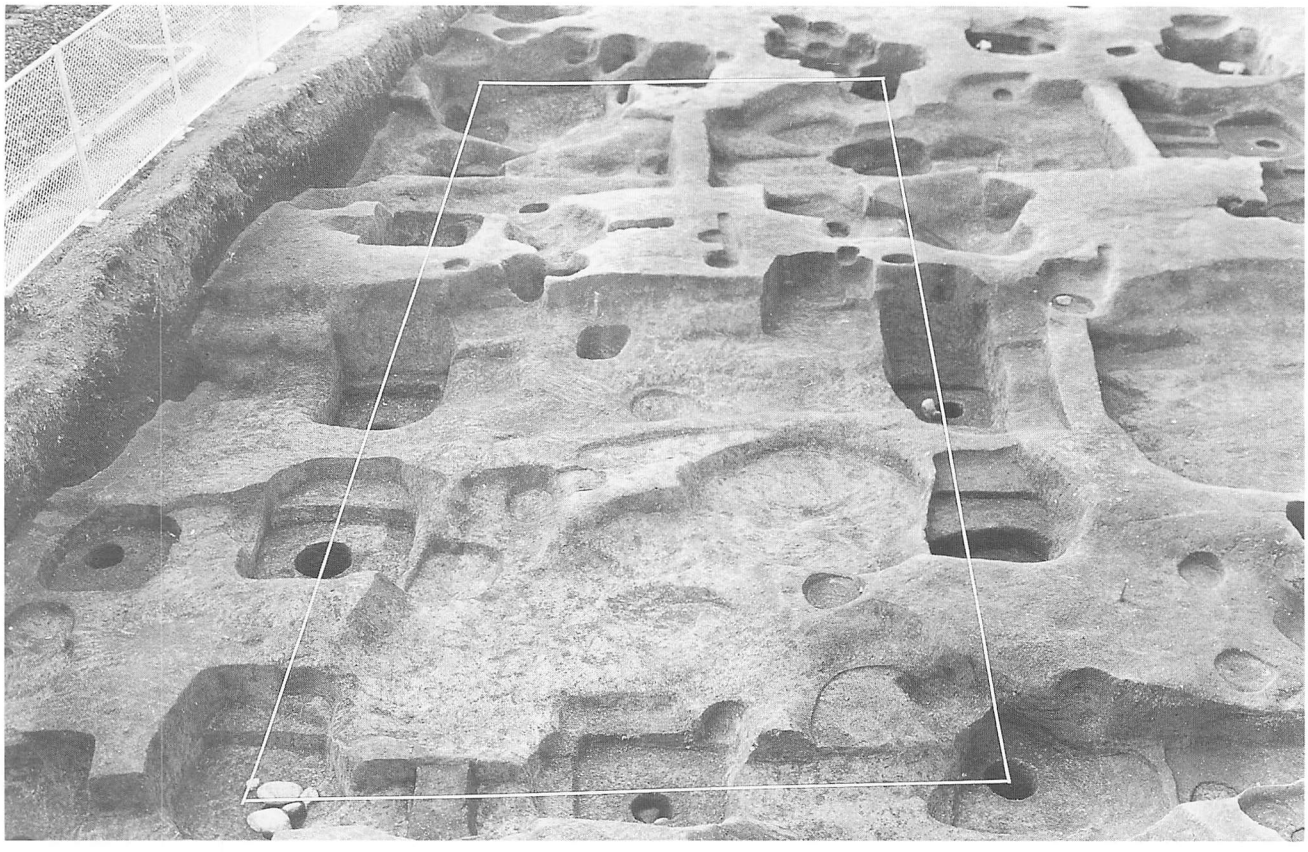
ＳＢ7285（北から）



ＳＢ7315（西から）



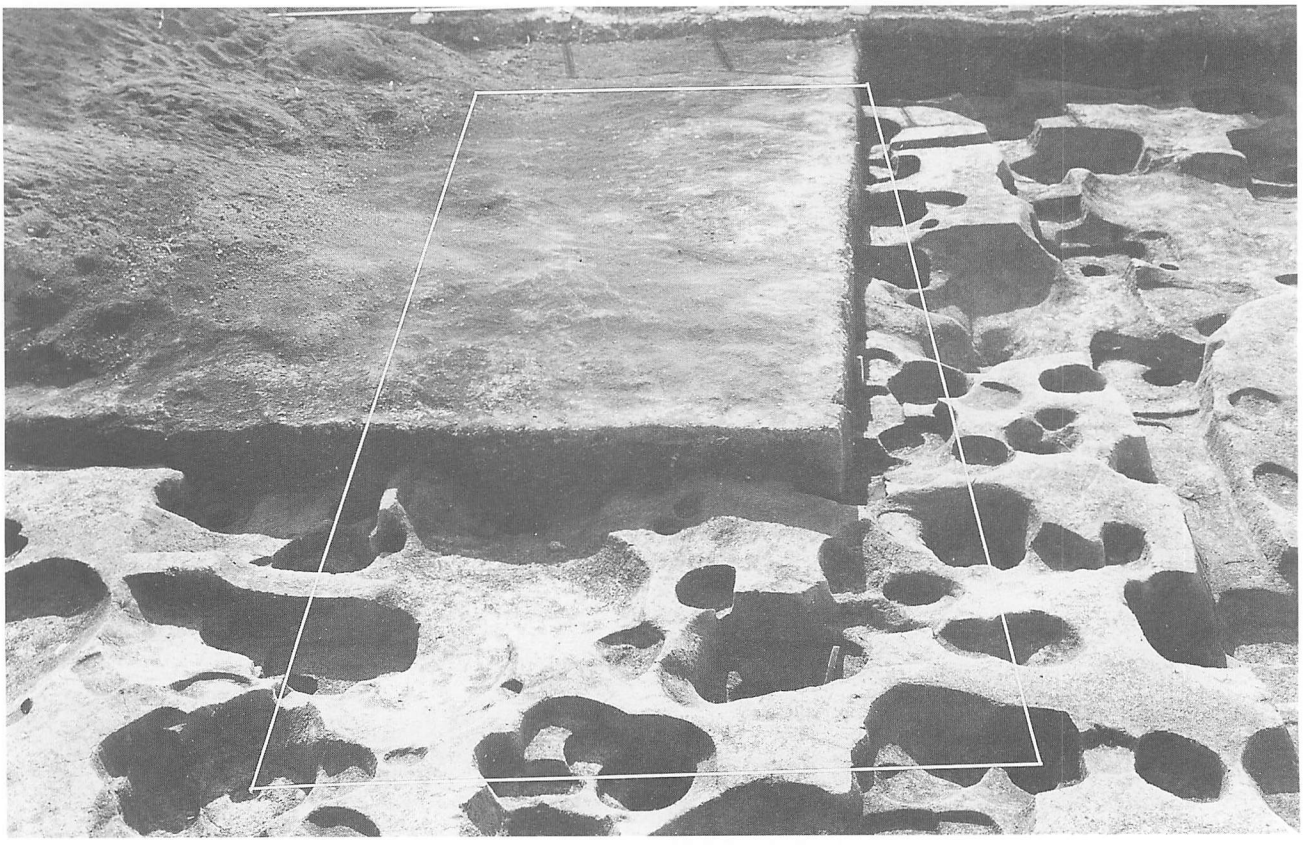
ＳＢ7293（西から）



ＳＢ7300（東から）

ＳＢ7299（東から）

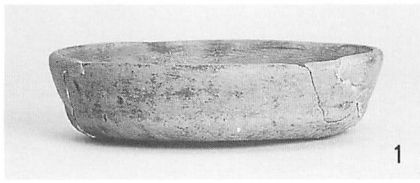
ＳＢ7310（西から）

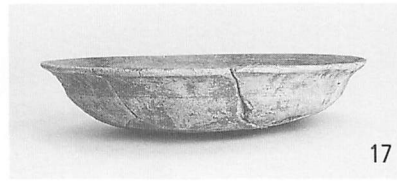


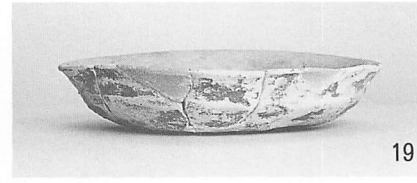
ＳＢ7313（北から）

ＳＤ7269・7307（北から）

ＳＫ7281埋土断面（東から）


1

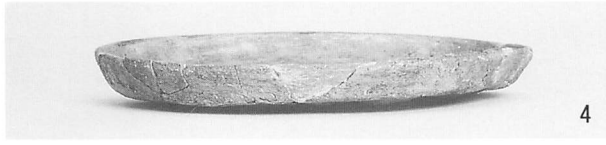

17

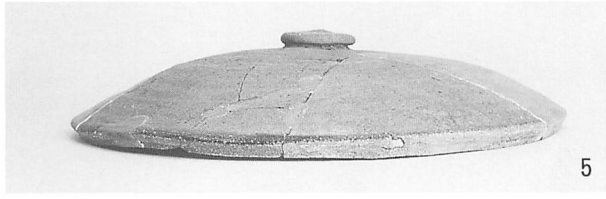

19

2

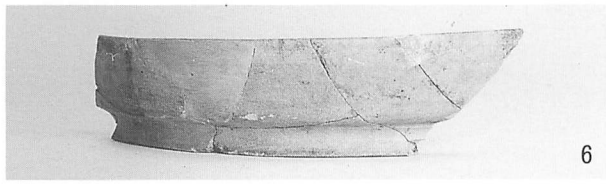
15

21


4


5

29

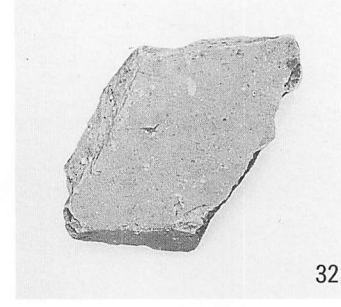

6

27

28

13

25


32

12

26

7

10

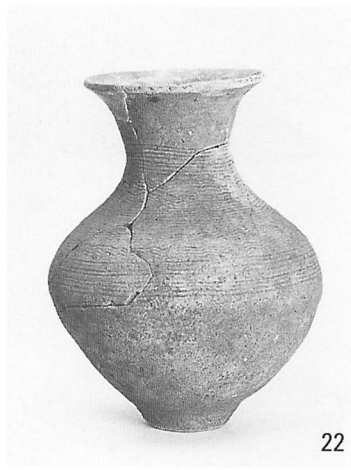
11

31

出　土　遺　物（１：３）

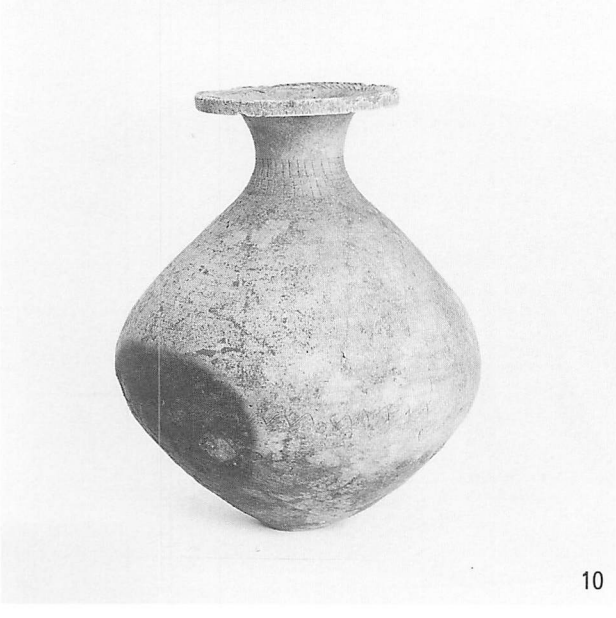
5

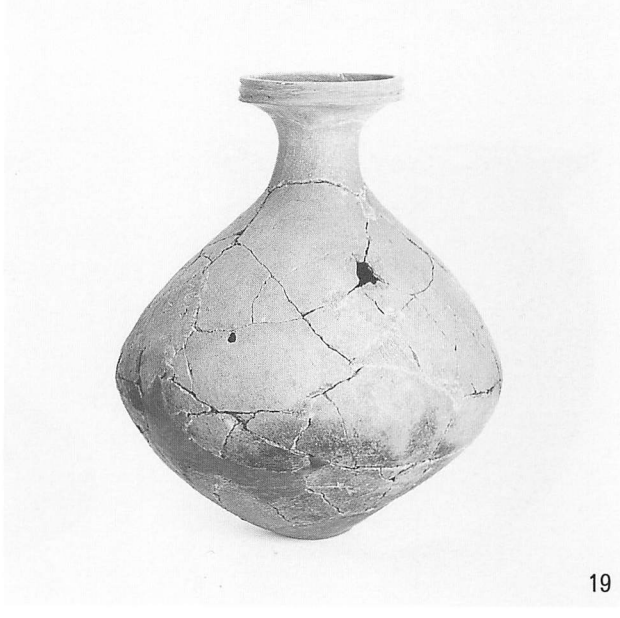
6


22

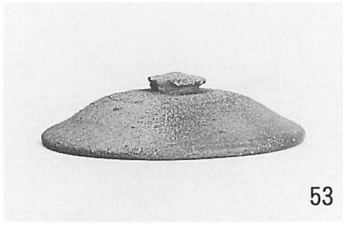
7

8

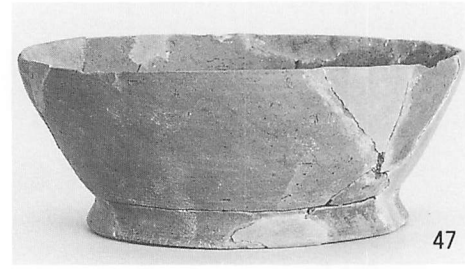

10

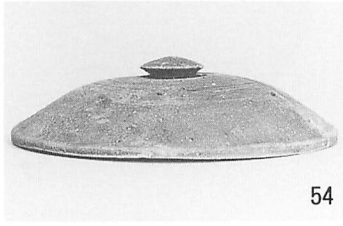

19

出土遺物　弥生土器（１：６）


53

44

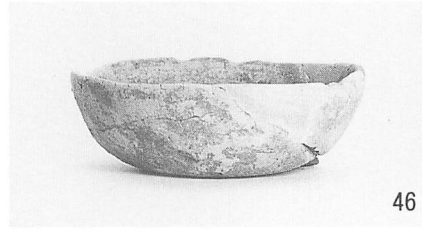

47


54

45

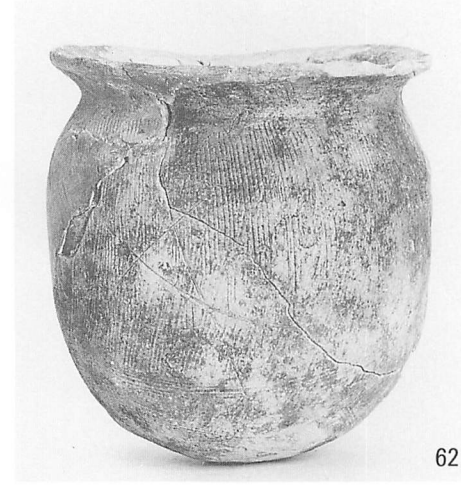
59

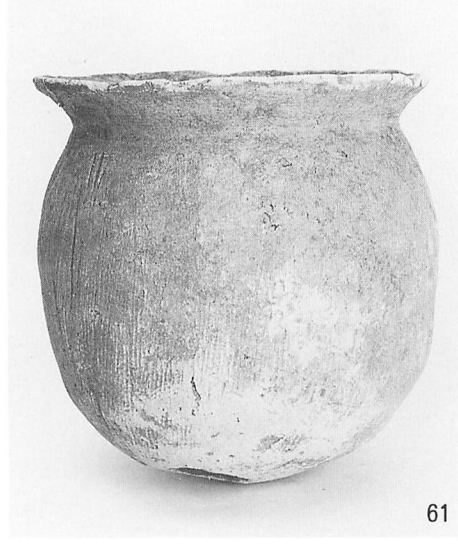
50


46

52

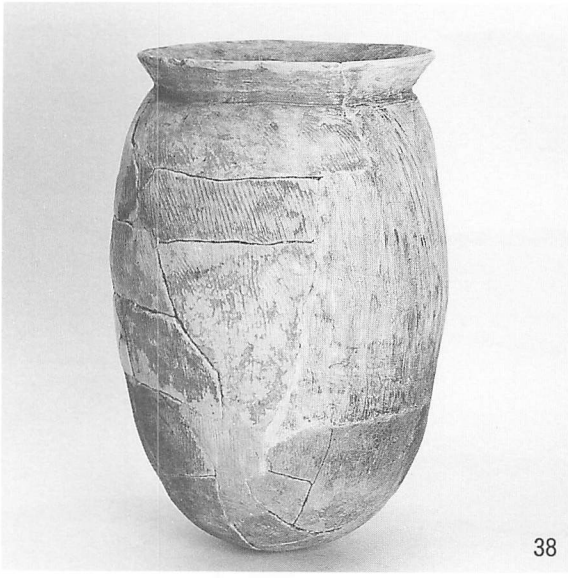
49


62

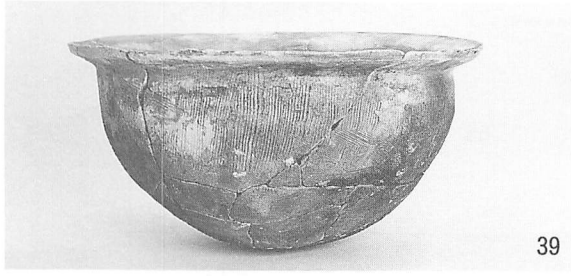

61

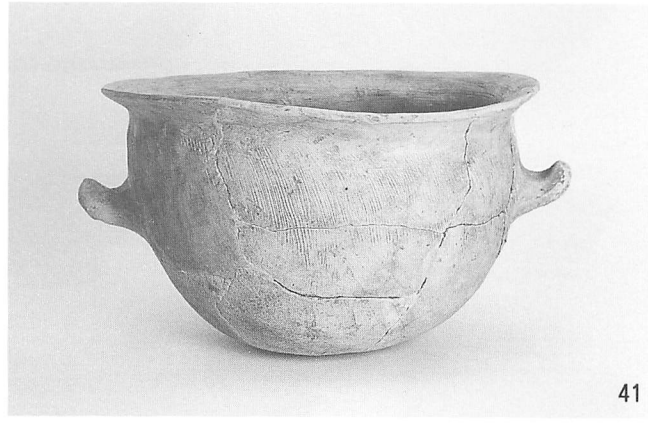
64

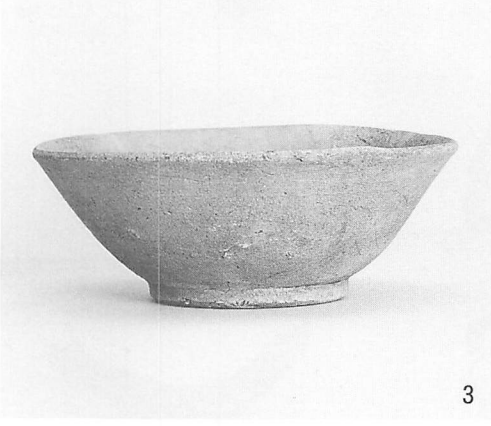
出　土　遺　物（１：３）


38

40

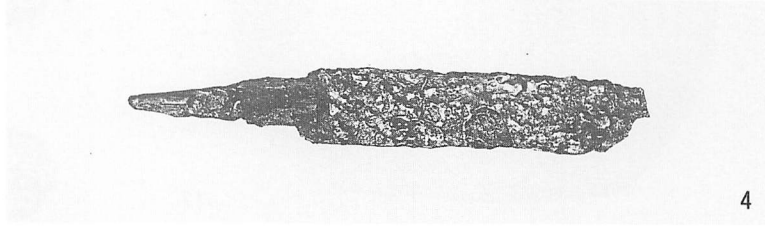

39

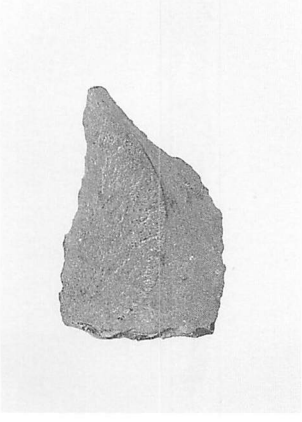

41

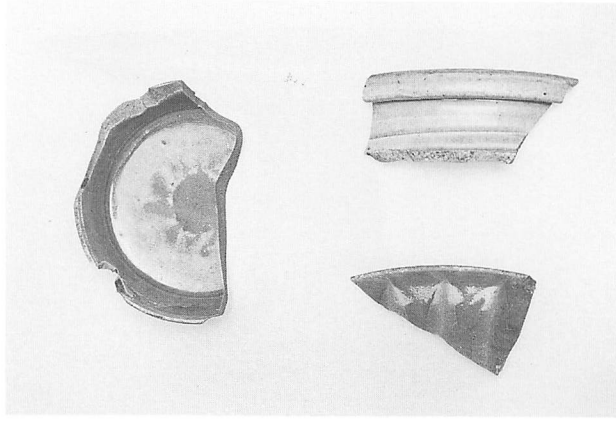

3

2

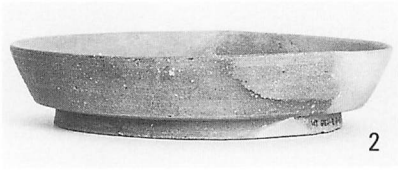
1


4





出土遺物　38～41（１：６），その他（１：３），下段・包含層出土（スクレイパー　１：２）


2

5

8

25

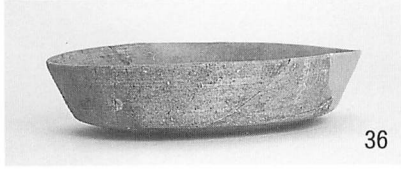
11

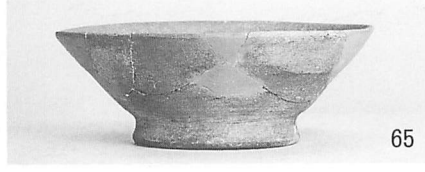
87

23

15

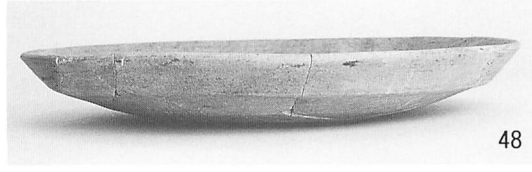
96

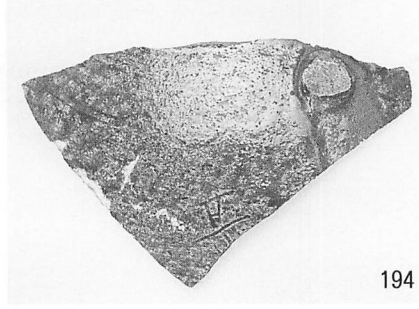

36


65

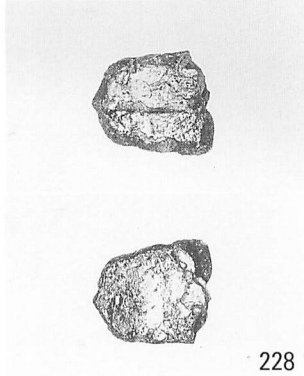
164

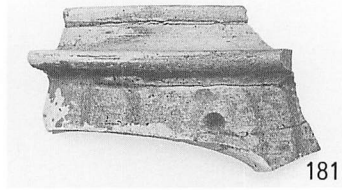
34


48

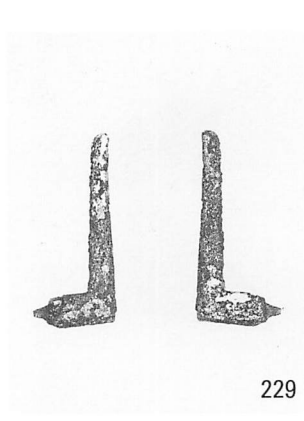

194

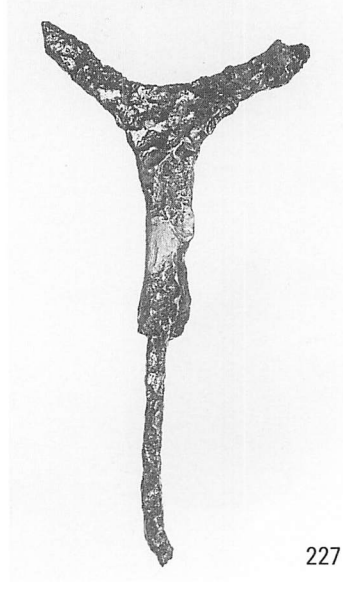
17


228


181

16


229


227

出土遺物　227～229（１：２），その他（１：３）

史跡 斎宮跡

平成6年度

発掘調査概報

平成7年3月31日

編集発行　斎宮歴史博物館

印　　刷　光出版印刷株式会社